

納本

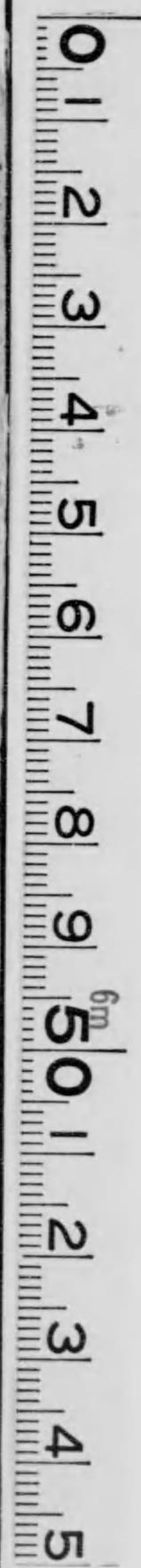
THE KUMAMOTOANNAIKI
THE TAISHONOKUMAMOTO

21
384

大正の熊本
大正の熊本



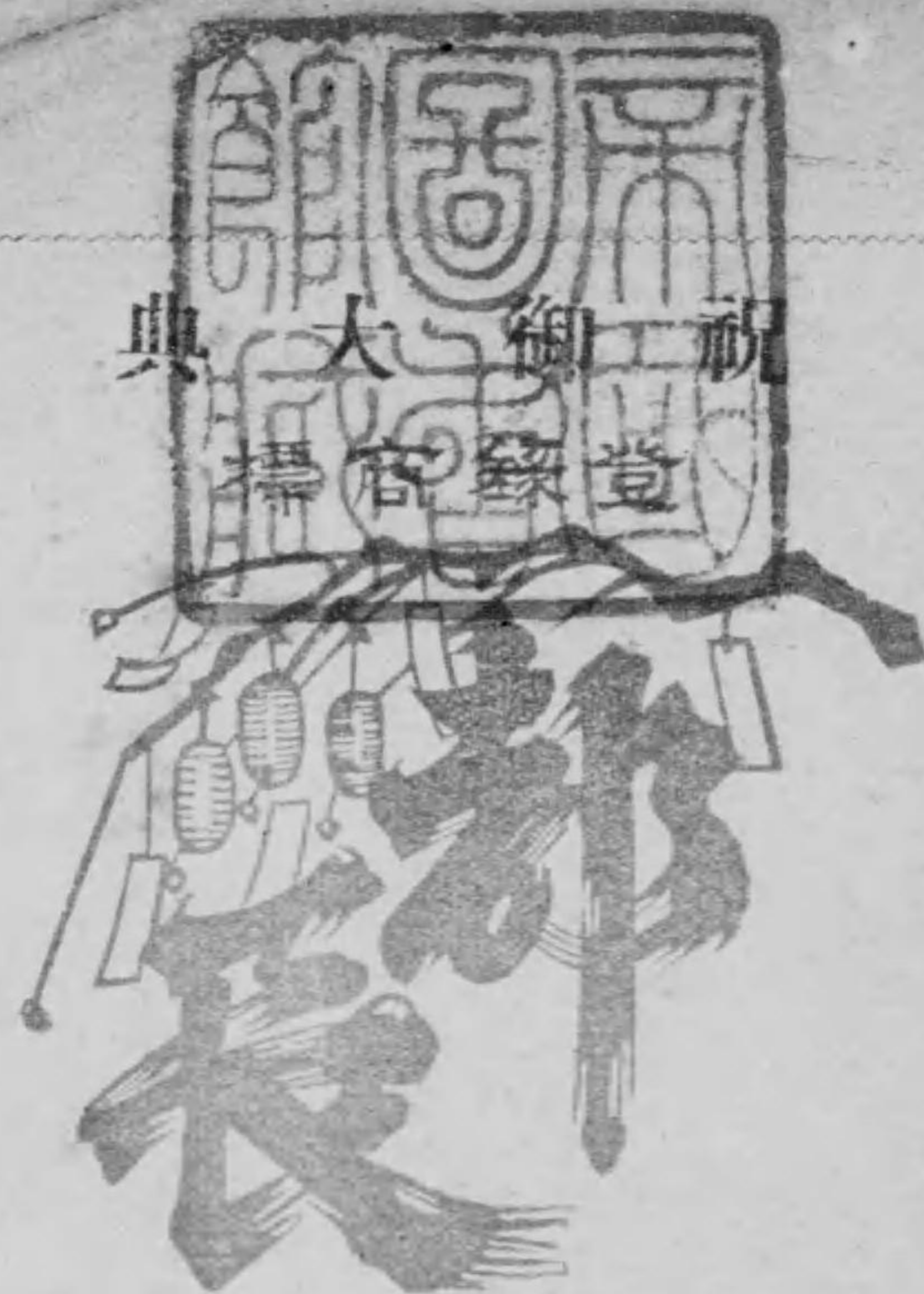
見...大正の熊本...野く...
大正の熊本...野く...
大正の熊本...野く...



始



優等賞金牌受領



大日本優等清酒

百つとみ 打つて よろこぶ 都長

釀造元

熊本市吳服町三丁目

魚住廣八本店

電話三五二六番

大正 4.8.16 内交

謹祝御大典



醇良清酒

クヨウ正宗

優等賞金牌受領



各國大博覽會

九曜正宗

清秋御愛飲の 好季節倍舊の 御眷顧賜り度 伏して懇願の 至りに御座候 拜具

熊本市 米尾町

釀造發賣元

西岡壽一郎本店

長電一八番 電話一〇九番

祝御大典



世界的新發明品

完全無比ノ蚤蚊よけ

ス。キ。ツ。ト。

南京虫其他害蟲驅除ニ偉効アリ

熊本市外三軒町出切

製造本舗 大日本ローヤル商會
吉川第一工場

祝御大典

赤十字印 清涼飲料



●これだから……よく賣れる

サイダー
特製レモン
ラムネ
果實密
タンサン水
果實サイダー

飲料水は何といふても赤十字印に限る……製造元クメセイ商會は神の如き心を以て公衆衛生を重んじ……清潔なる工場で數多の藥學士、技師、監督の許に製造するものなれば……安心してうましく飲める事うたがひなし元より品がよいから信用ある……信用あるから良く賣れる……多く賣れると生産費を省く……省いた費用は元料を撰む……元料がよいから品がよくて人氣が上る

●これだから……非常な人氣

本支店 熊本市 熊本市 熊本市 熊本市 熊本市 熊本市
電話 〇七六 〇七六 〇七六 〇七六 〇七六 〇七六

クメセイ商會工業部

大

祝御大典
株式會社 九州商業銀行

祝御大典
株式會社 十八銀行熊本支店

行

四

祝御大典
株式會社 肥後銀行

祝御大典
株式會社 九州實業銀行

銀

大正の香り熊本の誇りとして紹介す可き四銀行



熊本 越後屋呉服店

電話百〇二番
福岡替一〇五二番



祝 御 大 典

果物蜜
製造元

熊本市坪井六間町

毛利青果園

電話九三三番
振替口座一五三一番

酒類
米穀

熊本市南新坪井町

毛利喜熊

電話九三三番
振替口座一五三一番

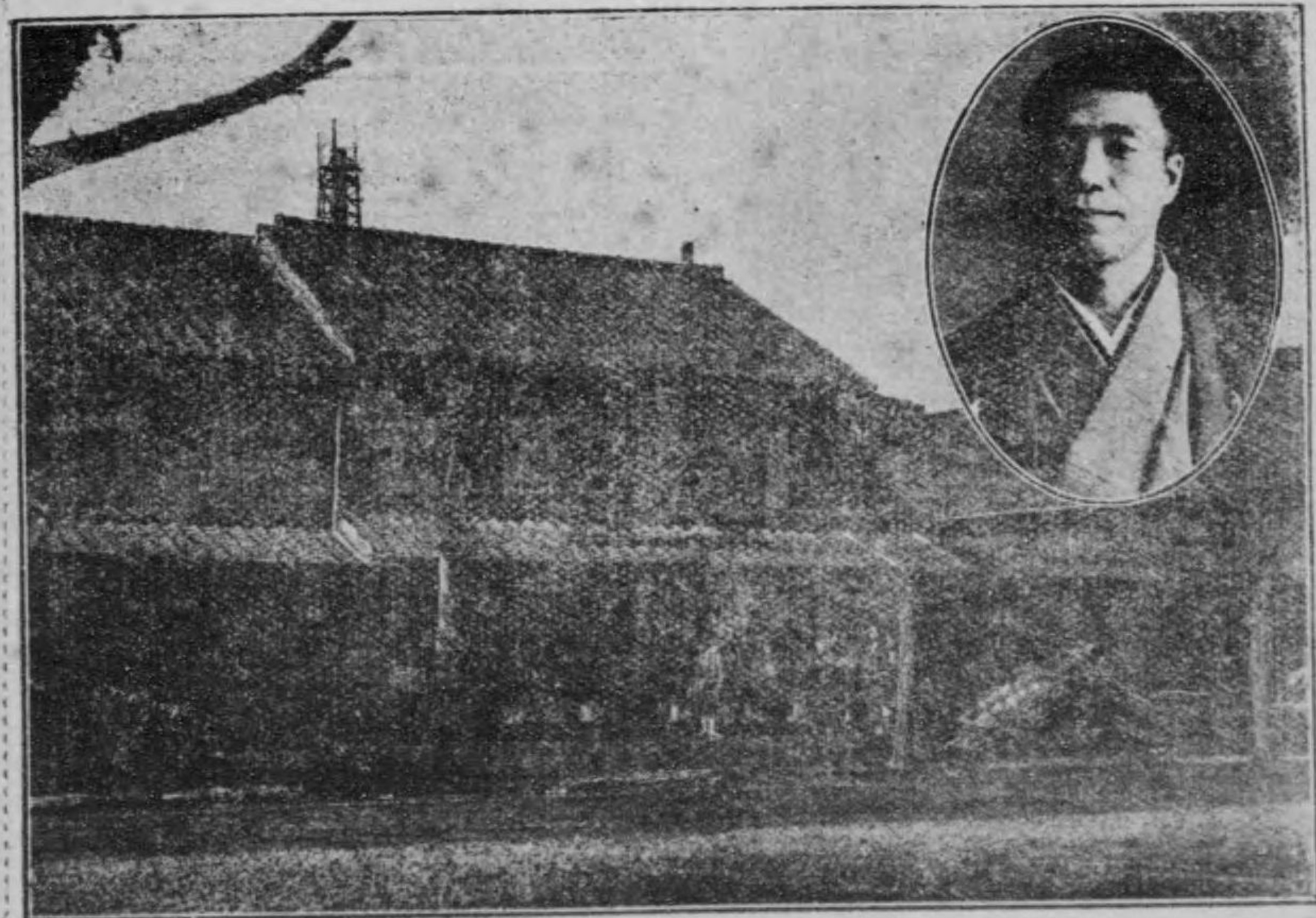
祝 御 大 典

商標 登錄
元造 釀

熊本市南千反畑町

上田彦次郎本店

長電話六四九番
振替口座九二九番



大業組員
典

熊本洋服
祝御

津長久中山山山山中久長津
田崎連崎田連崎田連崎田
仁善四金龍服茂八
太郎四郎太郎太郎太郎太郎
松守柴宮有有江古小山山山山
村未田崎田田口閑早代崎本
源五市彌政善庄川勸彦茂服
太郎五次一五太太五

田長嶽瀨高吉吉吉岡笠德本伊伊岩池
田本野淵野武本田本光田藤藤下田
直市作爲三服峯次政次五存金三伊太
人平彌藏郎店記郎平郎郎記吾郎三郎

祝 御 大 興



熊本市安己橋通町

千 德 屋 吳 服 店

千 場 惣 四 郎

電 話 八 百 九 十 七 番



祝 御 大 興

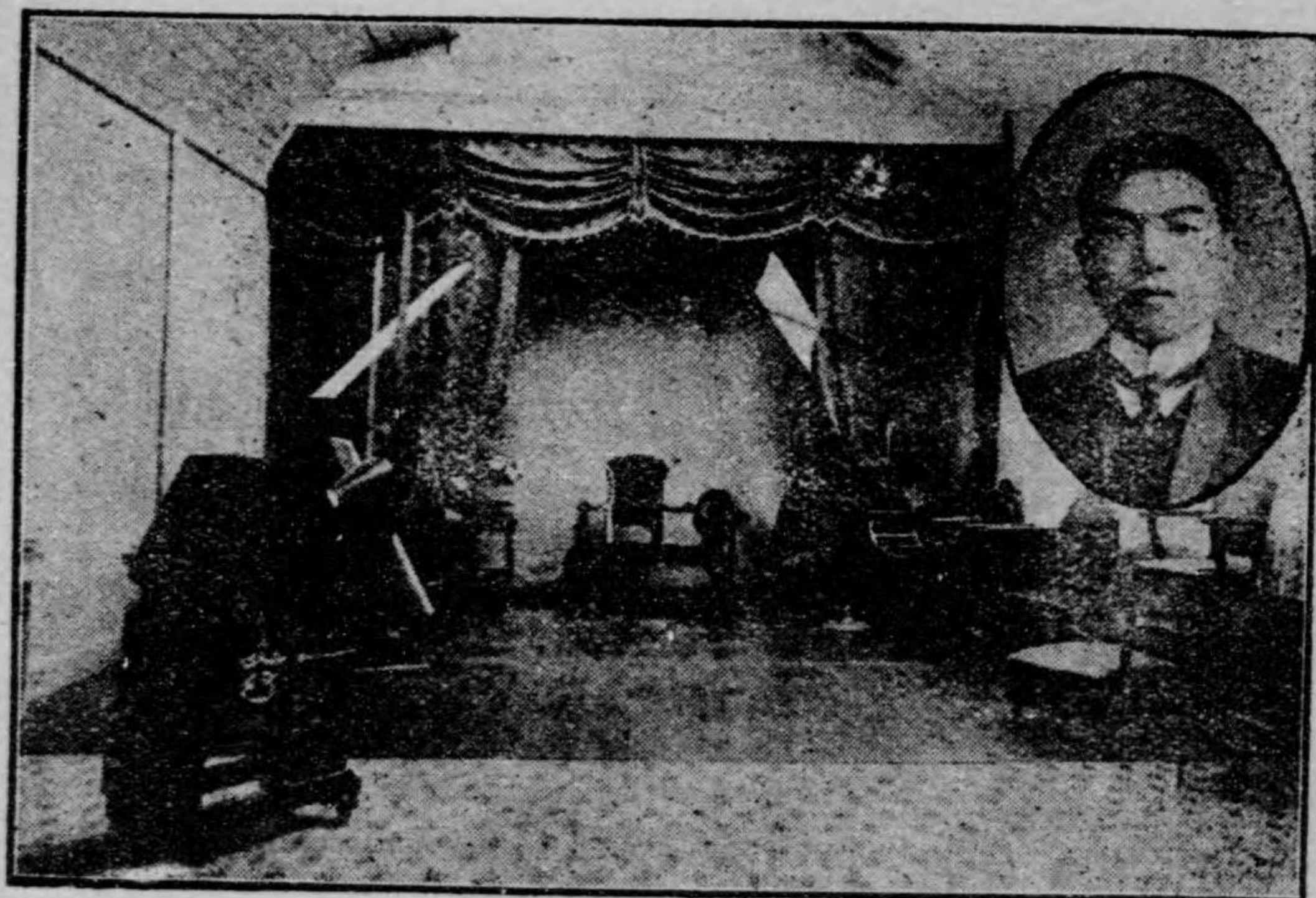
熊本市新南千反畑町

九 州 貯 金 株 式 會 社

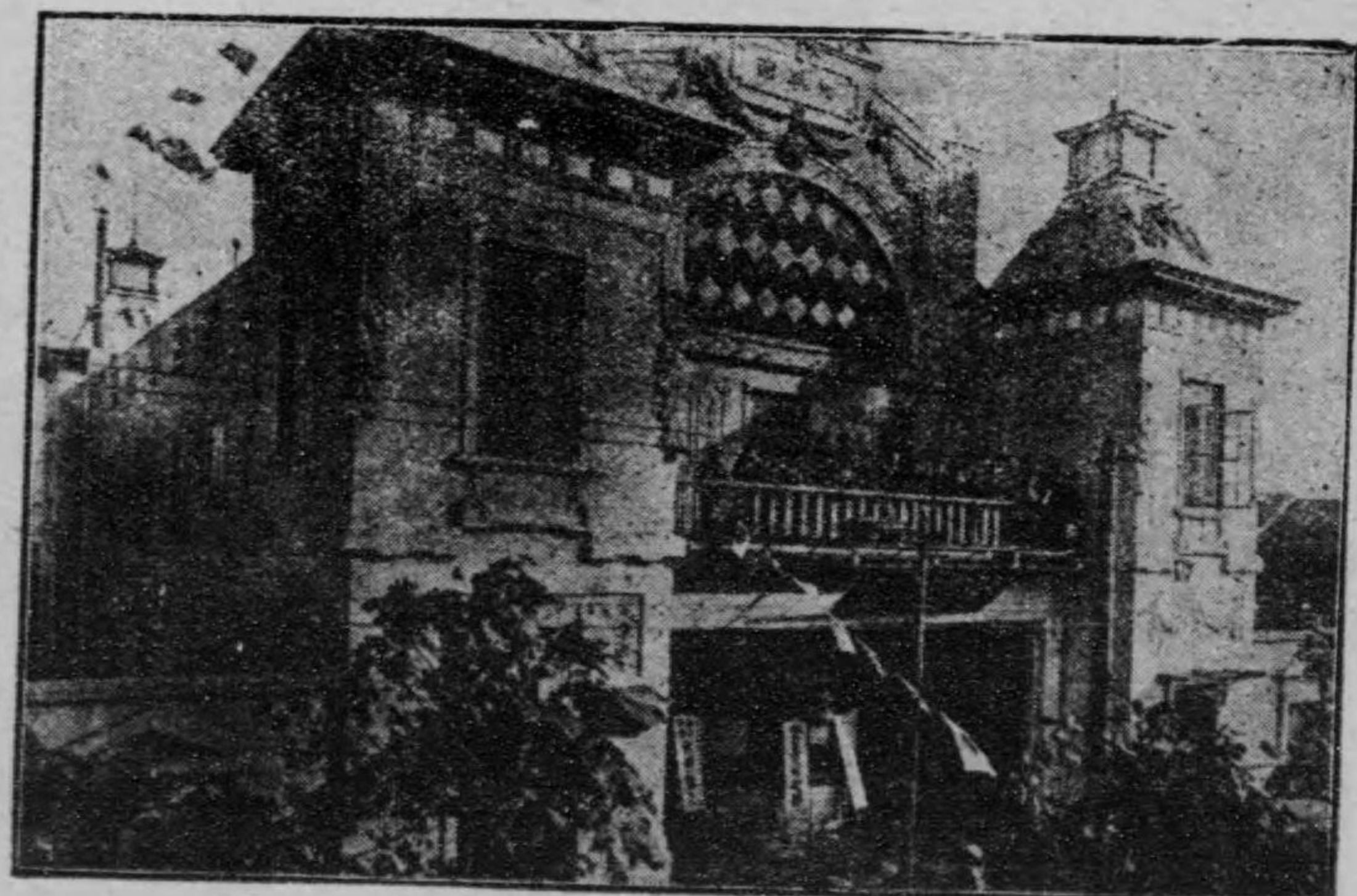
專務取締役 寺山 亥三郎

電話一〇四八番

祝 御 大 典



紀念碑前 正木凱旋館 電話九四一



新市街通 世界館

祝 御 大 典
商 標 登 錄

優等賞金牌數十個受領

各博覽會共進會品評會



釀 造 元

玉 城 常 八

熊本市迎町長電話九六番



祝御大典

於內外各博覽會品評會

金銀賞牌三十八個受領

日本清酒之花形



釀造元

玉名郡高瀬町

久米清商會本店

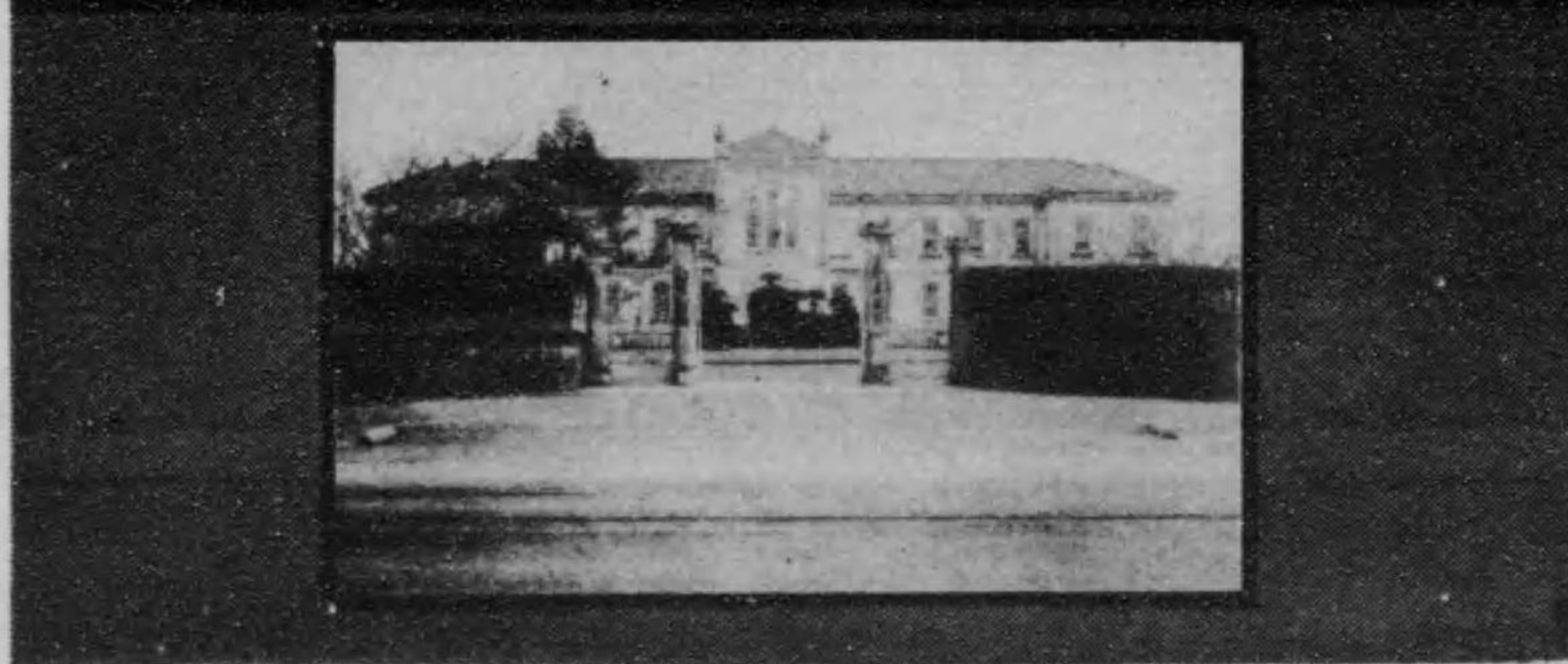
長電話第二〇番

支店 熊本市横紺屋町

久米清商會熊本支店

電話第四六七番

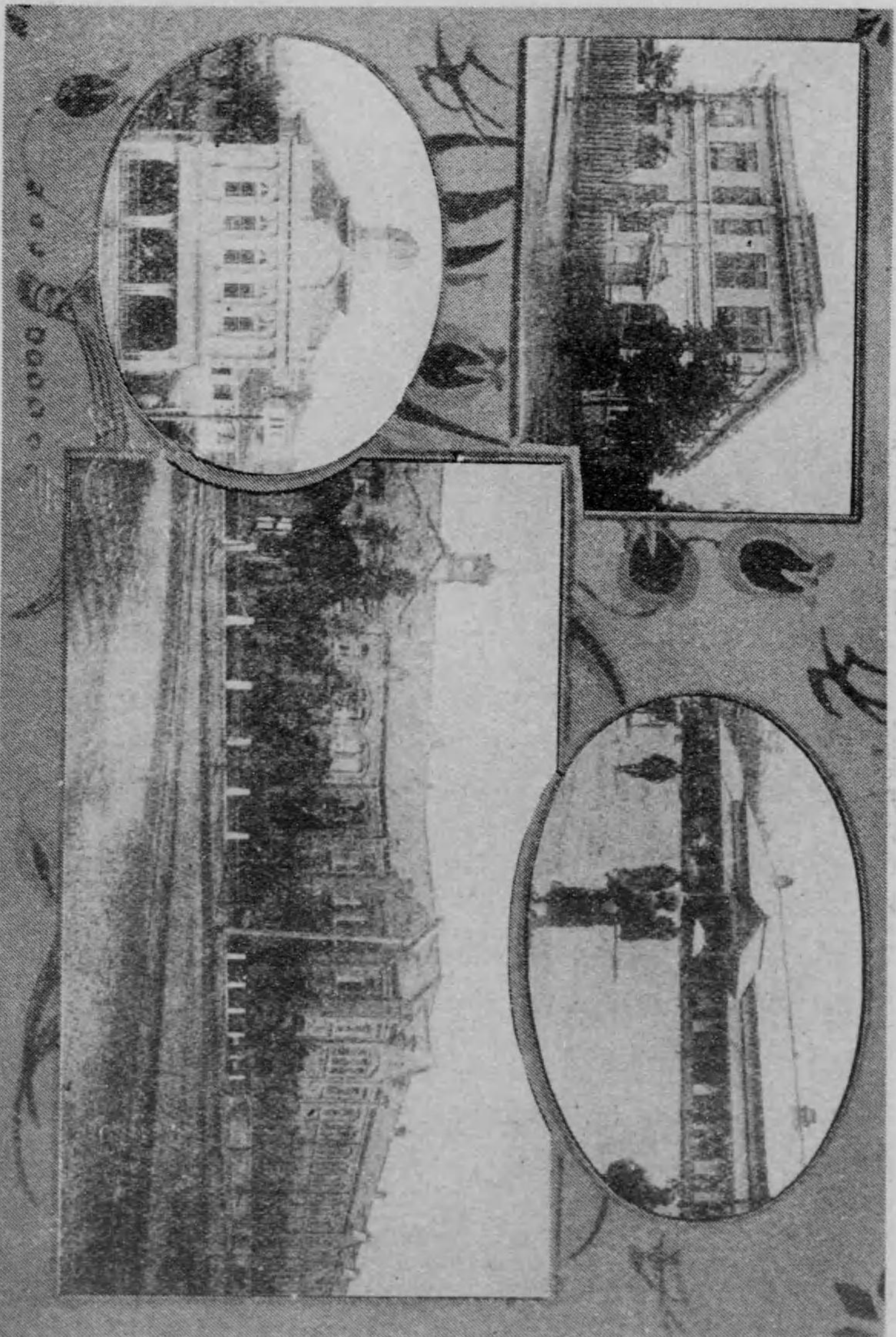
- 一 清酒釀造創立後僅に十ヶ年に
して縣下に於ける造石數の第
二位に達せし理由は如何
 - 二 縣下に於る清酒界の泰斗と仰
がるゝ理由は如何
 - 三 九州清酒界の優等品なりと撰
定されし理由は如何
 - 四 大日本十大銘酒の一に數へら
れし理由は如何
- 其解決は只諸君の御判断に御
まかせするのみ



熊本縣廳(下)

熊本市全景(中)

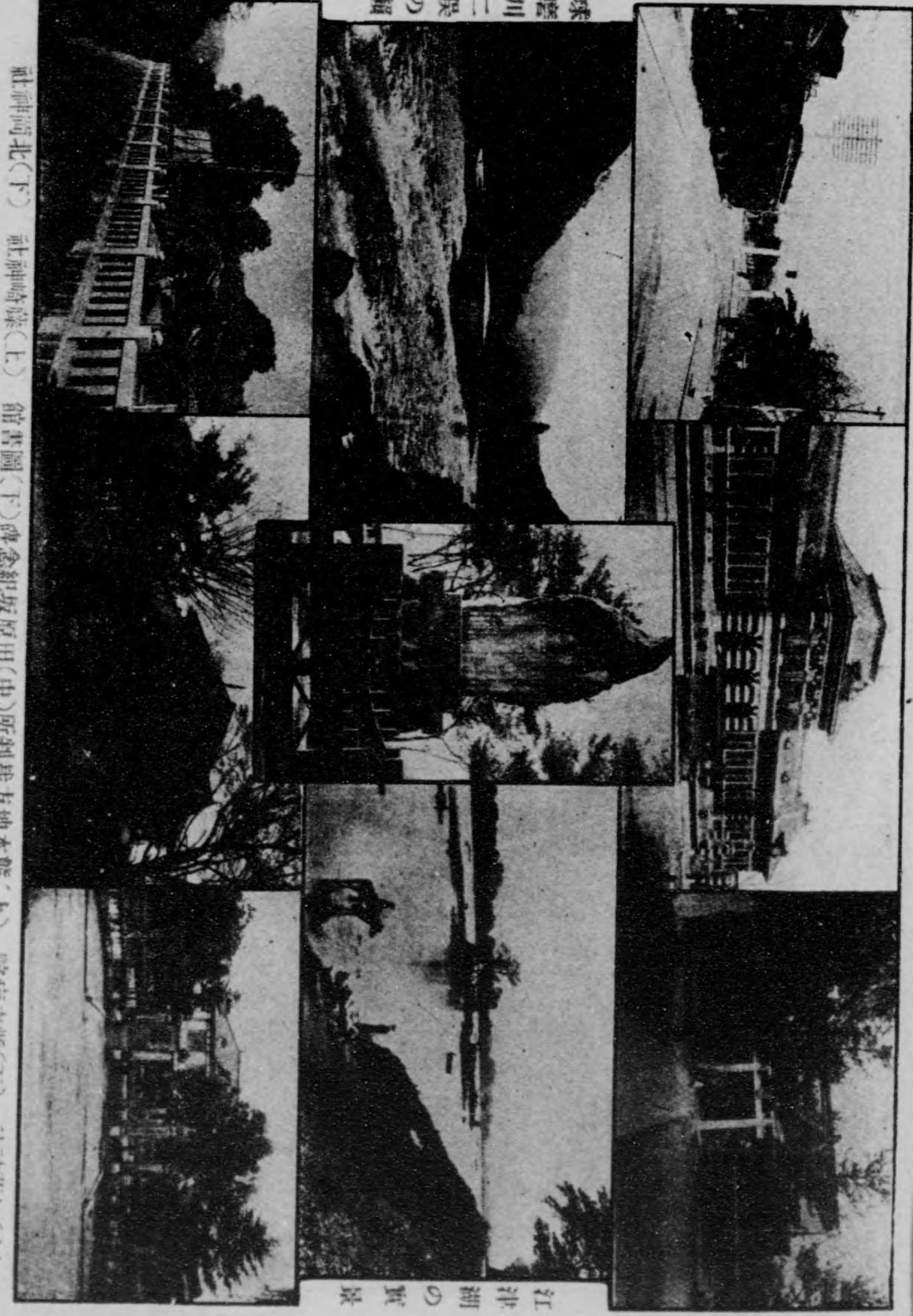
師團司令部(上)



館樓相後肥(下) 局信遞州九(上)

局支資身本館(下)

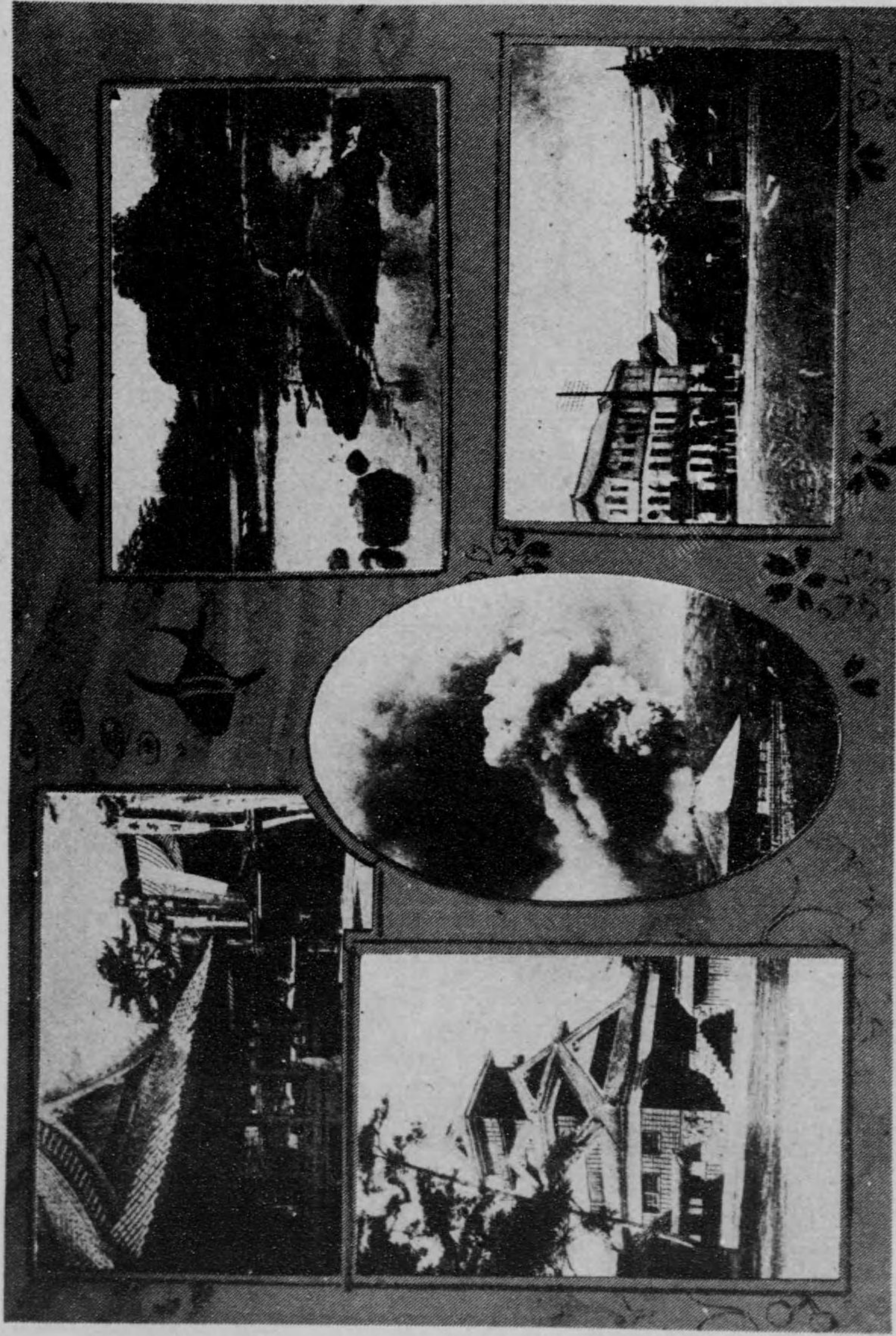
場車停本館(上)



社神河北(下) 社神高森(上) 館書圖(下) 碑念紀身原田(中) 所州殿方地本熊(上) 院病立縣(下) 社神崇加(上)

珠磨川二俣の瀬

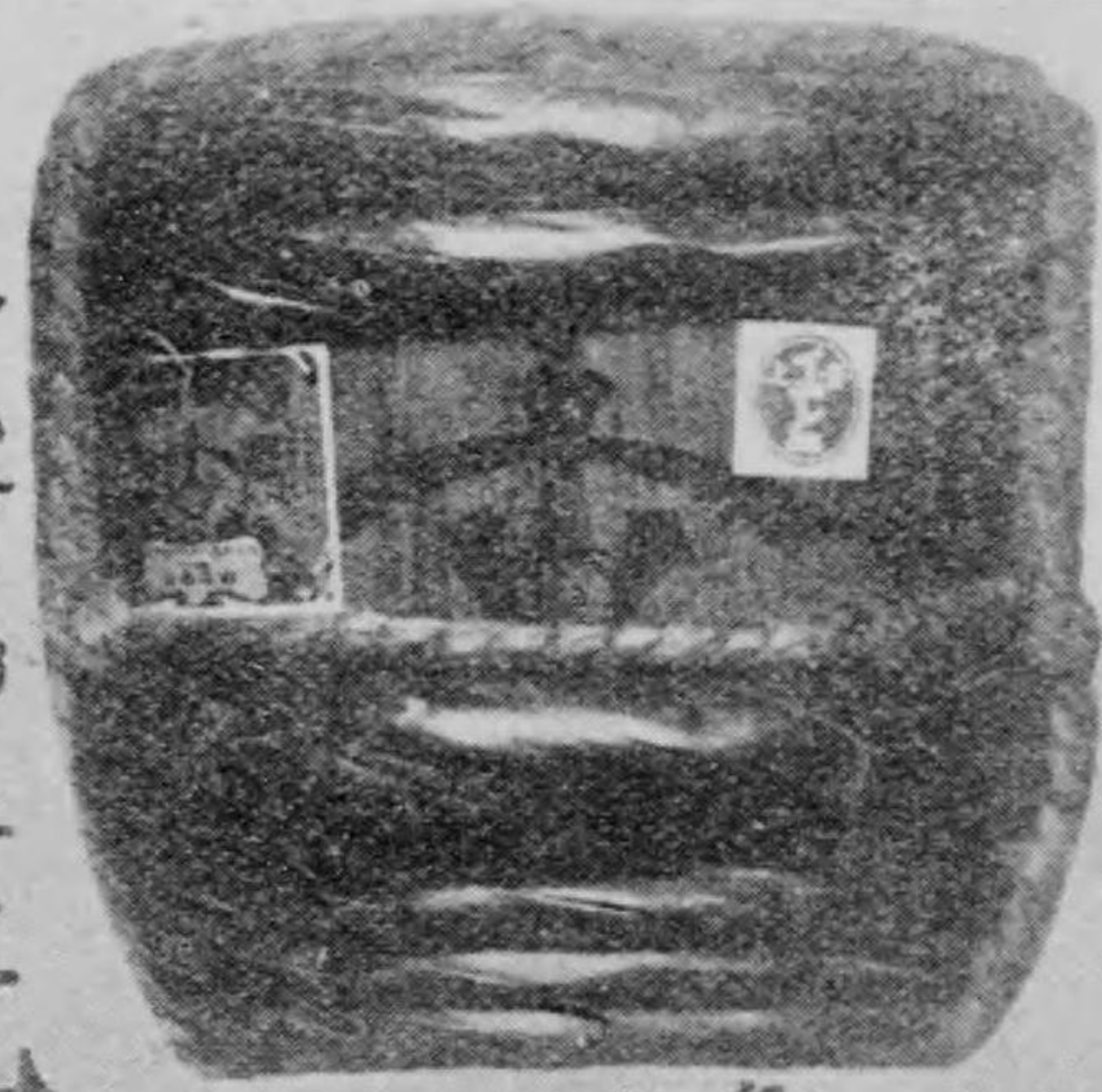
江津湖の實景



有夫上字(下) 寺姥本(上) 火噴の蘇阿 榮備と碑念紀清日(下) 寺前水(上)

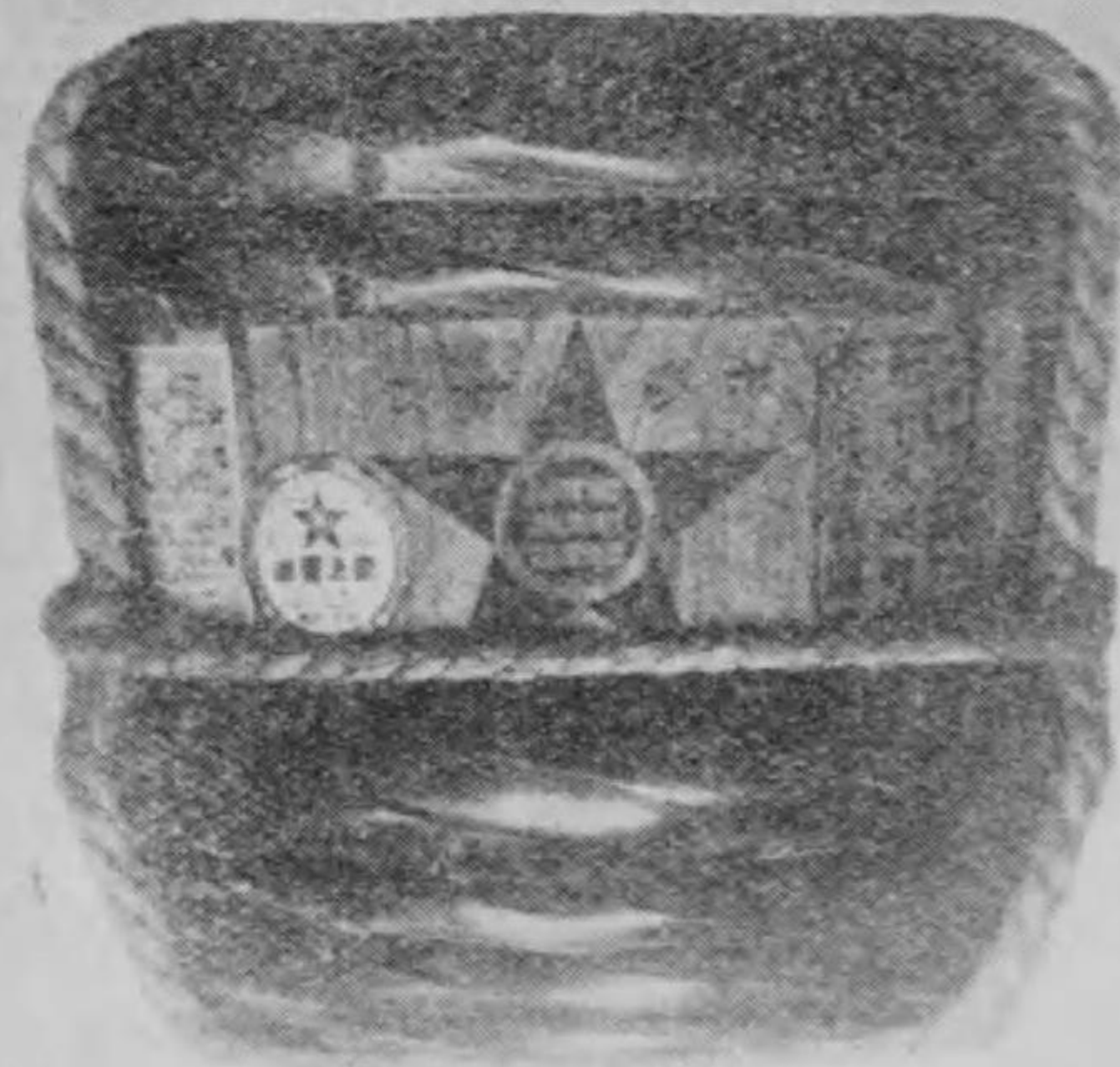
大 典 記 念
 大 正 の 熊 本
 熊 本 案 內 記

後 藤 蘇 風 著



イニシへ醬油醸造元
 熊本市北新坪井所
 古庄宗七
 電話百貳拾五番

名譽大賞
 金牌及
 一等賞金牌
 勳章
 受領



ホニシへ醬油醸造元
 熊本市北千友相所
 古庄政吉
 電話百〇四番

野に聲あり

吾、熊本に一の案内記が無いと言ふ事は取も直す熊本の一大缺點であらう、誰れ乎は問ふなる可し、そは勿論明治の代に縣案内一篇が編まれ、大正二年に極めて、單なるものが出でたのみ、不斷の發賣としては實に本書を以て嚆矢であらう。

翻つて吾熊本を顧る時實に紹介に價するものが多い、更に頗る心細感なきを得ない、予は於茲、鑑みる處深くこの書を著して各部面の連絡と親睦を圖り研究勉勵の材に供し、間接直接肥後大自然の發達進歩向上に努めむこと切也、秋幸ひ大典の慶に遇し又以て唯一の記念公刊書としたい、予は最初『熊本案内記』と題した、そは何々と云ふ盟友の言葉によつて『大正の熊本』『熊本案内記』と改題したのである、夫れ予は遺憾なく大正の熊本、現實の肥後を如何に紹介爲得るや、甚だ躊躇せず居られない。然し予は飾らず欺かず第一第二第三の各篇に亘つて大正の熊本を案内せり、是れ全く評論乎、非らず、雜報乎、非らず然らば記事文乎、骨躍り肉富める所謂肥後文明紹介記乎、讀者咎むる無くむば幸也。

夕立の止みし頃南向の椽側にて

大正四年眞夏

編者識

『大正の熊本』に就て

一 彼れが思出では正月の頃蘇麓の大自然にあつた時であつた出熊後健康すぐれず之を果す事が六ヶしい、偶々在熊同人一部の記者が彼の爲めに執筆の勞を呑ぬと云ふので五月中旬彼れはこの書の編輯に着手した、彼が九州新聞社にあつた時同人たりし溪泉齋藤忠嗣君亦來つて編輯同人となる、愈々彼は事務所を設けて編纂を續けた。二 ほぼ草稿の成つたのは越へし月の中旬であつた、彼れは半ば芽生の草稿を懐いて西灘際崎の海に遊んだ、山深縁りに海青く快々心行くばかり草稿の校正に就つた斯くて印刷に附したのは七月中旬である、彼れは五、六、七の三ヶ月に亘つて此片々たる小冊子に費したのである。三 彼れは大正記念唯一の刊行書として出版したのであらう、即ち本縣の現今の状況を連れたるもいさ、か其發達變遷の歴史も考へて見たのであらう、彼は出来るだけ各方面各部の寫眞の蒐集挿入に力めた、然し經濟は彼の思ひと矛盾し彼が思ふ半も満足能ない遺憾千萬々

四 彼れは熊本市論に多くの紙を費した、市發展を目的とせる彼れの理想とこの書の性質上已むを得ざる結果で、各郡の發展は用なしと言ふ意ではない、他日新しい材料を蒐めて増補する機は吃度あるであらう。五 彼れの編輯に材料上總べての點に就て盡された先輩友人は多い、この書の成つたのは半ば先輩友人の助力である茲に謝す。凡そ統計數量等は縣及市の最近統計に據りしもの、調査未了のものに已むなく前年のものを彼れは採つた、六 彼れは特に岩橋武之助君山田鉛五郎君柴田貫君竹内悌三郎君志位一藏君等の厚意を深く謝す、ア熱誠勁直な實業界の巨人達と益進せよ、そして、ちつとも退くな。

七 この書の編輯及校正に就ては小山恒一君最も勉められた、三色版挿入の如き彼れは深く感謝に値ひするものがある、彼れをして短日子にこの書を出版するを得せしめたるは一面盛林堂同人の力に頼る、謝せざるべからず々

大正四年七月二十五日

城東縁陸樹下の書齋にて

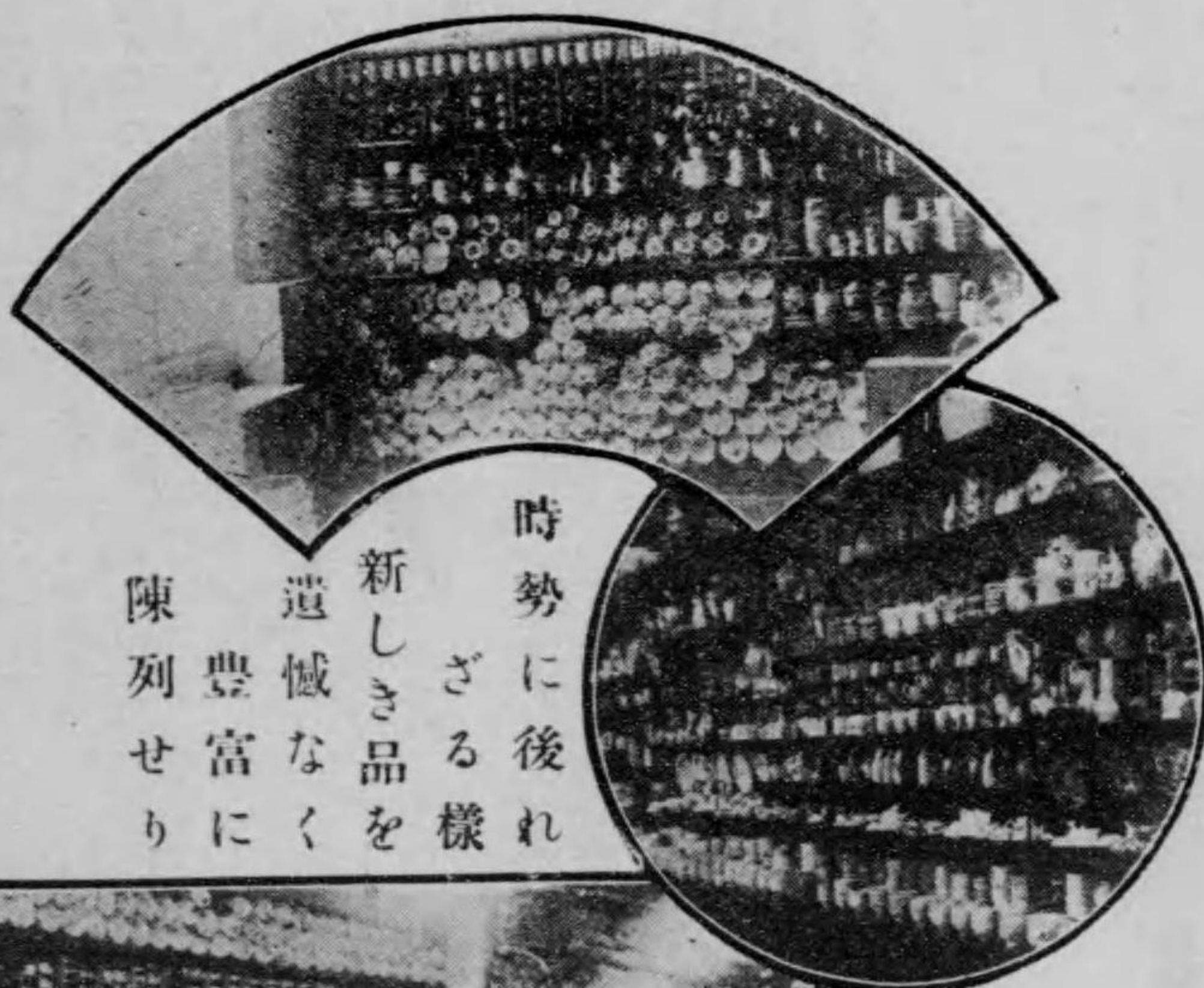
蘇風學人

熊本市六間町

今田代屋呉服店

電話 話三十七番
振替屋福岡七二六番

祝 御 大 典



時勢に後れ
ざる様
新しき品を
遺憾なく
豊富に
陳列せり



熊本市井米屋町
有田陶磁器店

振替福岡三三五七番
電話三百九十二番

『大正の熊本』目次

□挿畫……………夏の郊外(三色版)

第一篇 縣總論……………一

第一章 熊本縣沿革……………第二章 位置、地勢、人口……………第三章 本縣の氣候……………第四章 行政區劃……………第五章 開縣以後の長官……………九

第二篇 市總論……………九

第一章 位置、廣袤……………第二章 市沿革……………第三章 市區及市政……………第四章 戶數及人口……………第五章 議員及選舉權……………一八

第六章 官衙、公署、團體……………一八

縣廳……………市役所……………地方裁判所……………監獄署……………稅務監督局……………九州遞信局……………熊本專賣支局……………熊本郵便局……………大林區署……………市警察署……………原野製糖所……………熊本本種馬所……………農事試驗九州支場……………九州癩癩養所……………赤十字熊本支部……………衛生熊本支部……………武德會熊本支部……………篤志看護婦人會……………第六師團……………二九

第七章 教 育……………二九

五高……………高工……………醫專……………藥專……………兩師範……………女子師範……………中學濟々堂……………熊中……………九州學院……………鐘中……………商業學校……………農業學校……………工業學校……………獸醫學……………一

校……………縣立高女……………尙綱校……………女子工藝……………玫瑰……………熊本女學校……………補習教育……………小學教育……………圖書館。

第八章 宗 教……………表數的ニ班宗教……………神道……………佛道……………基督教一斑……………五二

第九章 交通、通信……………各地間の通路……………鐵道交通……………輕便鐵道……………郵便事務……………電報電話……………五四

第十章 慈善事業……………五五

第十一章 實 業……………肥後……………十八……………實業……………商業……………農工……………飽田……………福榮……………大福……………共榮……………戊申……………九州……………本所……………寶壽……………熊本電氣……………共益社鐵工場……………鐘淵支店……………内國通運……………熊本製氷……………兩製糸會社……………熊本塗器……………肥後酒精……………九州汽船……………肥後製蠟……………熊本瓦斯……………松村鐵工所……………各種商工業會社……………肥後米輸……………熊本茶業……………熊本洋服……………熊本靴業……………熊本傘業……………熊本指物……………熊本菓子……………保險事業……………帝國生命……………五九

第十二章 各種協會……………縣農會……………商業會議所……………聯合實業……………實糸協會……………米穀取引……………織物協會……………五二會……………商工協會……………九二

第十三章 熊本縣物産館……………九六

第十四章 諸營業の彙……………銘酒と醬油……………完備セス清酒醸造所……………九曜正宗……………熊本醬油界の重鎮……………模範的醬油醸造所……………マルコメ醬油……………銘酒金白……………銘酒蓄源と眞……………二宮置館……………スキット……………熊本の三越……………當代吳服店の模範……………著名吳服店……………前途ある吳服店……………奮進の店……………洋品店……………總まくり……………洋服店總まくり……………代表的菓子商……………縣下の名産……………新行堂……………盛林堂……………九六

第十五章 新聞 雜誌……………九日……………九州……………熊日……………立憲……………一二三

第十六章 辨 護 士……………一二五

第十七章 衙 生……………一二五

第十八章 旅館、料亭……………一二七

第十九章 遊 樂……………大和座……………東雲座……………旭座……………活動寫眞……………相撲館……………券番……………一二八

第二十章 洗 湯……………一二三

夏の郊外



第二十一章 名所舊蹟……………二三

市内遊覽地……………市外遊覽地……………

第二十二章 総覽……………二六

熊本驛附近……………上熊本驛附近……………

縣廳附近……………市の中心點……………

自動電話……………人力車賃……………

壺中我觀……………

第三篇 郡総論……………三三

第一章各郡現勢……………飽託……………宇土……………鹿本……………

菊池……………阿蘇……………剛谷城……………八代……………

茨北……………

第二章郡部の印象……………大熱帯の川畔より……………

夜の港まちから……………立願寺のこゝ共し

菊榮館の旅寢心地……………蘇瀧の大自然より……………

卅年の屋霜を経て……………八代の印象

夜の球磨川舟……………海邊の月を……………

富岡の風景……………

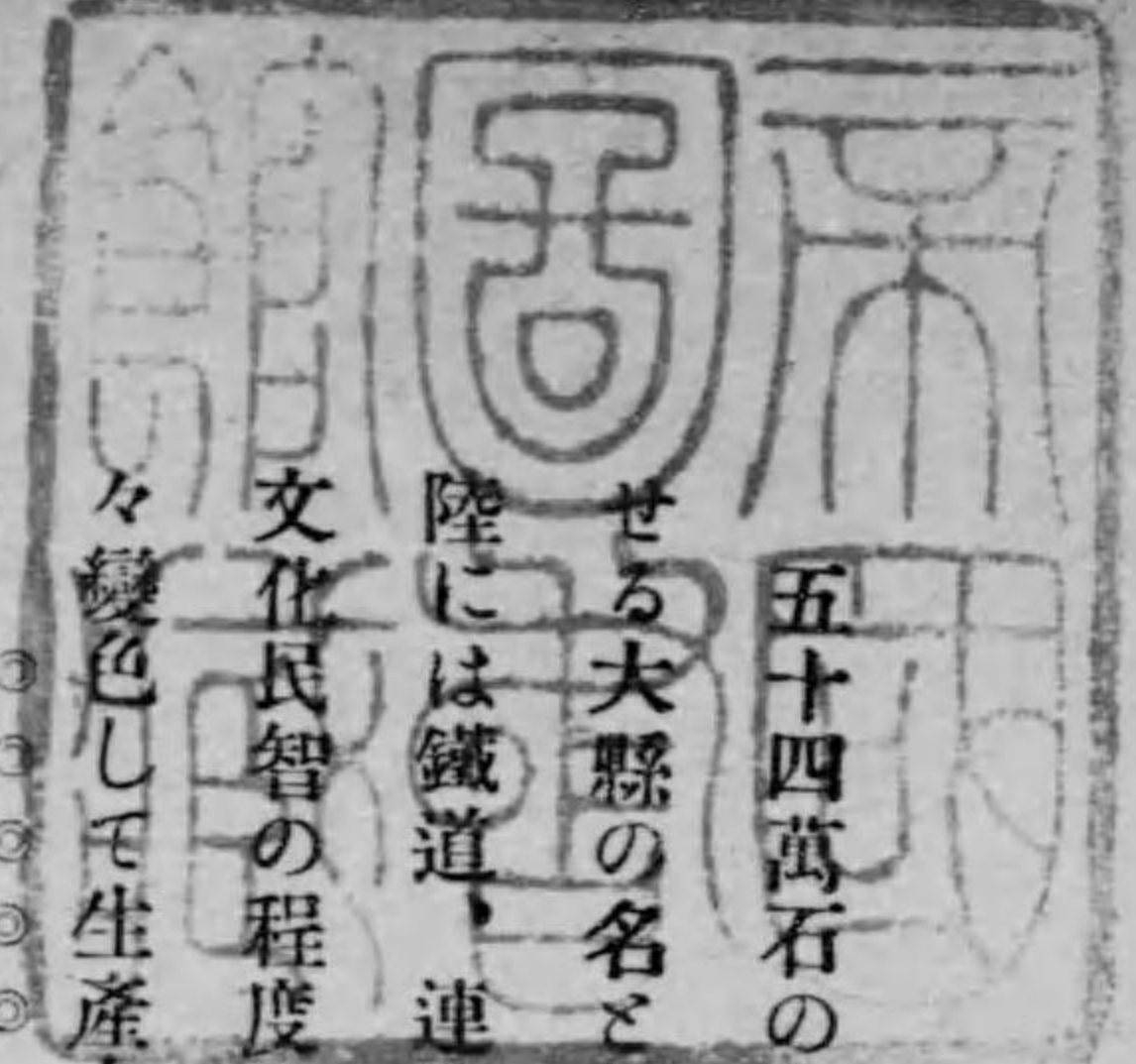
編輯を終へ……………一五四



第一篇

熊本縣總論

第一章 熊本縣沿革



五十四萬石の大藩として天下に隠れなかつた、我熊本の名は今や九州の中央に雄視せる大縣の名として天下の注意を惹く様に爲つた。

陸には鐵道、連絡し海には汽船の來往が絶へぬ、農工商の各實業は益々發達進歩して文化民智の程度は愈々向上して來た。昔時武健の風を以て著れてゐた我熊本も今は然々變色して生産力の發達増進によりて重きを天下に爲さんとするの趨勢を現して來た此の變遷の歴史、經過の概要は熊本の現情を討ぬるものゝ先づ識らねばならぬ處である。著者は愚人の愚擧の感無しとせずも、今大略を敲いて見よう

古代の事は邈として明かでない。往史に依つて考へて見るに昔時現今の様に、肥前

肥後を區別爲無くて一に之を火の國と言つて居た、景行天皇の御代初めて、火前、火後、の二國に分ち火後を十四郡と劃した。其後國音の同じい處から改めて、肥前肥後となつて今日に及んでゐる。

爾後に於て國土の割裂、群豪の起伏、等は國史に尋ねて之を詳細に知る事が出来る。本書は之を悉くするの目的でないので以て省略する、唯中古以來菊池氏の一族が頗る勢力を得、南北朝の頃征西將軍を奉じて勤王の義旗を西陲の一隅に翻し大に九州男兒の義意を發揚した事は、肥後歴史の一大名譽であつて、其の流風餘韻今日今朝迄で流傳して、以て肥後人士の氣質風習に隱晦の感化を與へた者が無いと謂ふ可きでない。

豊臣氏の時代、佐々成政一時來つて肥後を領してゐたが、幾ならずして罪を得て領土を奪はれた加藤清正、小西行長代つて一國を分領する事になつた。清正が國を治むるや堤防、治水、土木、灌漑の事、天稟の神才、大に經營する處があつた、今日本縣の農桑開け、水利完き所以の者は天然の地勢が固より之を致せしに因るとは雖又清正公經營の余澤多きにありだ。小西行長が關ヶ原の役で戰死してから清正殆んど一國を

領して、益々農業獎勵に努めたのである。本縣今日の現在を審知せんと欲せらる人遠は必ず清正の經營に就て充分の觀察を爲なくてはならぬ。

寛永九年十二月細川氏が封を肥後に移されて以後、名君、賢輔、相踵で出で能く清正の遺圖を綺で農工商の事を勸奨し、儒家名流の彬々輩出するに逢ふて學術を非常に獎勵された、土風を振起し、木林鬱然として自ら一種の美風、他と標異する者ある様になつた。爾來二百有余年間の肥後は君臣輯睦して諄義の風、昌平の氣に滿々て頗る平和幸福の間に星移り、物亦換つた。

されど、今日の肥後全國は悉く舊時、細川氏の領地ではなかつた。球磨郡は相良氏(人吉藩)と米良氏の采地であつた、八代郡中五家の庄は貞享二年幕府の所轄に歸した天草島の一圓も亦所謂天領として幕府の支配する處であつた。是れを以て天草や人吉の如きを深く觀察する時人情、風俗の上に細川氏所領の地方とは自然、多少の相違ある事は當り前であらう。

維新以後廢藩置縣の時に飽田、託麻、玉名、山鹿、山本、菊池、合志、阿蘇、上益

城、下益城、宇土、葦北及び八代の大部を合併して熊本縣となつた。八代の一部は天草と共に長崎縣に屬した。球磨郡は人吉縣と稱して肥後一國は全く三縣に分屬したのである。明治四年十一月更に、熊本縣と八代縣を置いて、飽田以下阿蘇迄を熊本縣として益城以下、球磨迄の五郡を八代縣に編入したのである。明治五年六月十三日更に熊本縣を改めて白川縣と改稱して、八代縣を廢して白川縣と合併した。そして球磨郡の一部は美々津縣に編入されたが、明治六年一月十五日肥後全國悉く白川縣の所轄として全九年二月二十四日再び白川縣を改稱し次で熊本縣と改め今日に及んでゐる。若し夫れ郡の廢合に至つては明治二十八年征清第二年の時飽田、託麻の二郡を合して飽託郡と改稱し、山鹿山本を合して鹿本郡と稱し合志郡は菊池郡に編入して、今日に至つてゐる、言ふ迄ない、現今の肥後一國は一市十二郡である、そうして熊本縣を形造つてゐる。こうして益進しつゝ、大正の熊本は現れて來たのである。

第二章 位置、地勢、人口

■位置■ 九州の中央に位してゐる。東經百二十九度、五九、八〇、より同百三

十一度、一八、二九北緯三十二度〇七より同三十三度十一に終つてゐる、東は大分宮崎に界し南は宮崎、鹿兒島に接し西方は有明、不知火海を隔て、遙かに肥前に相對し北は大分、福岡に隣してゐる縣の東極阿蘇郡野尻村から西極天草郡魚貫村に至る全長は三十六里十六町である。南極球磨郡藍田村より北極阿蘇郡北小國村に至る全長は三十二里十三町である。其の間に含む處の面積四百八十四方里三一である。

■地勢 人口■ 北の方、筑豊の間から小袋^①、八方^②、國見^③、祖母^④、涌蓋^⑤等の諸山次第に國の東隅に入つて阿蘇一帯の山脈となつて南に延んで國見^⑥、大矢^⑦、白山^⑧、權現^⑨の諸山と連り進んで球磨葦北の諸山脈となつて、そして國の三境を扼してゐる、中間亦益城の東邊から起つて居る、一帯の山脈は宇土の半島となつて延びて天草の群島を爲してゐる、これを以て地勢北東南の三方漸時高きを証してゐる河水亦西流するは當り前球磨、緑、白川、菊池の諸川を主なるものとしてゐる。支流縱横灌漑の便至らざるなく沃野遠く連つて所謂肥後の平野を爲して居る。海岸線の出入亦短かくないと雖も海濱土砂堆塞して良港至つて少ない。かるが故に船舶の出入亦不便である。

本籍人口百三十五萬四千七百六十三人現住人口百二十九萬六千八百四十人現住戸數二十一萬九千二百七十戸である。

第三章 本縣の氣候

氣候は一般に温暖であるけれども阿蘇、球磨一帶の高地に至れば頗る寒冷である暑氣亦甚しき處もあるが差程苦き方でない。最近三箇年の調査に依ると一年平均溫度攝氏三十五度(華氏五十九度五)最高溫度攝氏三十五度(華氏七十七度二四)である。

高地を除いたら降雪概して多い方でない。風向は凡そ北南西の風多く夏秋の交天氣毎に屢々猛烈な西南風に襲れる事がある。一日中無風時間の長き事は亦著しきものであつて、熊本市の如きは朝◎◎◎◎夕◎◎◎◎なきの長サ三時間以上に亘り酷暑の候、一日の勞を晩涼に慰せんと爲る人達ちが頗る苦悶する處であるが、夜半は溫度俄かに降つて薄寢衣ではこれを凌ぐに堪へぬ時がある。小さき大陸性の氣温である

第四章 行政區劃

本縣の行政區劃は一市十二郡に分れてゐる、夫を三百六十四箇町村に分割してある

今左に表解して置く

(市町村區劃)						
郡市名	面積	町村數	郡市名	面積	町村數	
熊本市	〇、三六 <small>方里</small>	一四四	上益城	四四、九〇 <small>方里</small>	四町二八村	
飽託郡	一六、八九	四町四六村	下益城	一九、〇六	三町一五村	
宇土郡	九、〇〇	二町一〇村	八代郡	四一、四二	三町二九村	
玉名郡	二六、五〇	五町三八村	葦北郡	三三、九〇	三町八村	
鹿本郡	二二、二一	三町二四村	球磨郡	九八、一八	一町二四村	
菊池郡	三二、一三	二町二三村	天草郡	五七、二六	三町六〇村	
阿蘇郡	八二、五〇	四町二二村	合計	四八四、三一	一市三六四町村	

第五章 開廳以後の長官

「大正の熊本」に開廳以後の長官を掲載する必要は余り多くないが、参考にもなるし歴史的に記述しても、不必要でもあるまいし寧ろ無いよりも善かろう。

(開廳以後の長官)

任官年月日	退官年月日	官職	氏名
明治六年五月三十日	明治九年十月廿七日	權令、縣令、知事	安岡良亮
明治九年十一月二十日	同 二十四年五月五日	權令、縣令、知事	富岡敬明
明治二十四年四月九日	同 二十九年十月廿一日	知事	松平正直
明治二十九年十二月一日	同 三十一年七月廿八日	知事	大浦秉武
明治三十一年七月廿八日	同 三十六年六月廿九日	知事	徳久恒範
明治三十六年六月廿九日	同 四十年一月十一日	知事	江木千之
明治四十年一月十一日	同 四十一年七月十七日	知事	押川則吉
明治四十一年七月廿九日	同 四十五年三月廿八日	知事	川路利恭
明治四十五年三月廿八日	大正元年十二月廿三日	知事	宗像政
大正元年十二月三十日	同 二年六月一日	知事	山上滿之進
大正二年六月一日	同 三年四月廿八日	知事	赤星典太
大正三年四月廿八日		知事	川上親晴

第二篇

熊本市總論

第一章 位置 廣袤

白川、菊池川、緑川の流域が所謂肥後の大平野である、幾萬幾千數の田園は限りも無く續いて美しい氣に溢れる、吾が熊本市は實に此の麗かな自然美の沃野の只真中に位置してゐる、

市は飽託郡の花園、横手、春日、本山、本莊、大江、黒髪の村や街から四方を圍周されて日に月に市外村落を市街化してゐる、水清き白川、坪井川の二流は劣らぬ水勢をもつて市中を貫流する、金峰の壯姿を西方に望んで東北に、何乎を偲せる龍田山が横つてゐる東南一帯は平野である現今熊本市役所の位置してゐる新南千反畑町は恰度東經百三十度四十二分二十八秒、北緯三十二度四十八分十三秒に當つてゐる。經度は

「英國グリーンウィッチ司天臺を以て元とす」少くとも縣の中央を失ふてゐないので、商工農総べての方面と連絡が保たれてゐる。吾人は未來を欣ばねばならぬ。

市の廣さは東西が二十六町、南北が三十四町面積が零方里三十六である、然し市外の各町村が既に市街化して來たので、數字上の統計よりも實は余程廣く見へる、行政區域は上記の如きだが社會的、經濟的立脚地から見ると現面積と殆ど倍加するのである。今當市の沿革を紹介せよ。

第二章 熊本市沿革

肥後としては既に記した、肥後中心都會の熊本の舊記を案じて見る。この熊本が肥後中心都會となつたのは大化新政の際(孝德天皇の御代)國造を廢して諸國に國司を置かれた頃に始まつた様である、今日の市外古町村字宮寺の邊は、其當時國府の在つた所であつたので今に古府中在應屋敷等が名残げに見へる、是れが熊本の前身である其後、後三條天皇大宰府監、藤原則隆に菊地郡を賜ふ、則隆命を奉じて下國した常に鞍ヶ岳の觀音を信仰した、一日鞍ヶ岳觀音に遊ぶ赤輪己に沒せんと夕暉西の空を染め

て濃淡恰も隈どるが如うに見へたので、やがて隈本と稱へ始めた之れが實に熊本てふ名稱の權輿である、

中古戦亂の世は、群雄諸方に割據して統一極めて困難であつた天正年間、佐々成政秀吉の命を奉じて下國した、治道を失して程なく除國と云ふことになり、天正十六年加藤清正、國の北半部を領して此地を據城とした小西行長宇土に居つて南半部を治めてゐたが小西氏が亡ぶると同時に清正、南北を併せて五十萬石の大名となつた。此の時分から以後が全く肥後の首府となつた、清正の性を知るには「熊」の一字でも明瞭だ清正がトある一日隈字を分解して曰く「阜んで畏る」となる之れ我武を漬す名である、と即ち猛獸の「熊」の字を以て「隈」の字に代へたこれが抑も熊本なる字稱根本である、當時町の廣さは東西二十二町、南北三十四町、町數八十六であつた其の幅現在と大差がない、三百年の昔斯くも發達をして居たかと思ふと驚かざるを得ざる也。清正公の後には細川氏二百數十年の仁政に市街益々段賑展開を加へた。

明治維新後廢藩置縣以來、縣廳所在地となつて肥後の首腦となつた、そして今日に

及んでゐる、西南の役には全く殆んど兵火に罹つた當時の城將谷干城將軍をして

熊◎城◎元◎是◎好◎區◎震◎ 焦◎士◎肅◎條◎人◎未◎還◎
若◎使◎藤◎肥◎州◎尙◎在◎ 不◎教◎渡◎賊◎太◎郎◎山◎

と哀吟せしめた、詩に依りて當時の兵燹の程が窺れる然し之が爲めに市區の大革命となつた、整頓家屋の改築は行はれた著しく面目を改めて來た、そして一大新都市が建設せられるに至つたのである現今の繁榮を見るも蓋しそれからだ、試に花陵の綠陰に寄りて全市の家屋櫛比して碧瓦惡壁の遠く相連つてゐる壯嚴な盛況を俯瞰した人達は誰か、此市街が三十年の昔一時滿目荒涼の燒野原と化してしまつた事と、更に一棟の屋舎を残さぬ慘憺な光景を想像し得る者があらうか、今日の盛觀又、當年灰燼の俤だに尋ね難い、然り、斯くも荒涼極る燒野原に、新しい基礎、新しい根抵、美しい氣分の上に全く嶄新な、大市都を創造したからだ、兵火よりして、生じた現象は多々ある、市街の比較的廣濶なと間口廣き大店の並べるも全くそれである。但し七層の樓閣半天の雲に聳へてゐた、銀杏城を失つたことは、惜まねばなるまい。

第三章 市區及市政

大小約百五十の市街から成つた、熊本は古き昔からの慣習で新屋敷、京町、坪井、高田原、新町、古町、迎町の七區に區分されてゐる、商工業の中心點は新町、古町方面である、殊更に唐人町の如きは富賈豪商、軒を並べて行人常に絡驛たりだ、宛ら東都の銀座の如うである。そうして銀行、會社の如き金融機關も多い新屋敷、京町、坪井、方面は舊士族、官吏などの邸宅で大部を占めてゐる、

市の中央に別區劃をした、山崎新市街は前々市長、辛島格氏の在職時代第六師團の練兵場及び騎兵兵營の所在地であつたのを陸軍省と交渉の上、兵營と練兵場とを市外大江村に移し、市公債四拾參萬圓の經費を出し星霜三ヶ年を閲して愈々模範的新市街を建設したものである、若し夫れ熊本市の現状と既往の經過とを叙して人情風俗から商工業の詳細に亘るならば恐らく短篇の能く、盡す所でない讀者幸に別項の諸欄を參照綜合して熊本市の大体的形勢を知る上に資せられたい。

遠き藩政は云ふ迄も無い廢藩置縣後、明治六年市を南北の兩區に分つた北を第一大

區十五、小區として京町、坪井の二組に分れて町數凡て二百十六、同七年になつて更に第一大區八小區に編制した當時戸數九千四百九十七戸、人口四萬四千八百十六人であつた。明治十二年郡區町村編制法に基つて元熊本第一大區々域の外は飽託郡の内出町、託麻郡の内新屋敷町及迎町を編入して新たに熊本區を置き、戸長區域を十七區に分つた町數を百三十八とした、之れが現在の市區の基礎根本となつたものである、明治十七年戸長區域を分合して七區域に改めた、翌十八年之れを廢して復た十七區域とした、各區に町務係を置く事になつた、明治二十一年四月法律第一號を以て町制の發布があつて、之を同二十二年四月から實施する事となつてから、同年六月一日茲に始めて熊本市役所を開廳する様になつたのだ、初期の市長は、杉村大八氏である、明治二十二年五月就任した、明治二十六年八月松崎爲己氏代つて市長となつた明治三十年九月辛島格氏、松崎氏に襲で市長の席に腰を置く、以來在職十有六年永し百九拾貳ヶ月、其熱意と努力に謝せねばならぬ久しきの間に、諸經營に其他教育に勸業に釐革する處が頗る多かつた悲しい哉、大正二年二月病を以て職を辭した今日は既に故人である

る、同四年山田殊一氏市長のテールヲ擱む、又見るべきもの決して少くなかつた次に大正三年山田氏に代つて依田昌兮氏市長になつた、見るからに大丈夫のスタイルだがつつて温直、情的な熱意溢れてゐる好人物である、前途の腕前は決して心配の必要はあるまい。

當市の助役には明治二十二年五月始めて松崎爲己氏が就任した、次に富田長藏氏が二十六年六月松崎氏に代つて就任した、二十九年八月佐々布達氏富田氏に代つた三十五年八月満期となつて、市尾喜一郎氏が代つた現在の市會副議長である井場熊喜氏は三十九年六月市尾氏の後を擱む、大正元年七月當時玉名郡長であつた、猿野子之吉氏井場氏の後任となつた、猿野氏は著者との間に深い關係はないが、著者からして忘れ難い對氏に就ての印象記がある、幸ひに健在活動こそ、祈るのである、

市會議員の定員は三十六名、正副議長と市參事會員は紹介して置く。

■議

長

林

千八

■副議長

井場熊喜

■市參事會員

■河

田

巖

■行

德

健

男

■古

莊

■

韜

■竹崎 隼雄 ■渡邊 敬衛門 ■魚住 友八

附記して置く、本年度は総改選に當つて居る。

第四章 戸數及人口

熊本市統計年鑑に表れた最近(大正三年十二月三十一日調)の調査に依つたら、市の戸數は一萬五千二百十八戸である、人口は總計六萬三千二百二十四人である、其内男子が三萬千八百三十七人女子が三萬千二百八十七人である、之れを一戸數に平均して見ると四、一五人即四人強である一方里の密度は十九萬余人である、其他第六師團に屬してゐる軍人軍屬が約一萬人、市附近に散在してゐる部落をも市區に編入したら四萬二千人余もあるから、當然、社會的人口十二萬四千余を數へる決して九州の大都市たる、名に背いてはゐない、今左に面倒臭いけど市制施行以來の戸口増加の變遷を表解して置く、

年 度	戸 數	人 口
大 正 二 年	一五、二一八	六三、一二四
大 正 元 年	一五、一〇九	六一、三三二
明 治 四 十 四 年	一四、九八六	六〇、一六五
明 治 二 十 二 年	一一、七九一	四二、七二五

右の表では明治二十二年に比較すると幾分の違ひがあるが、至つて戸數増加の歩合遅々である様であるが實際に於ては、周圍の各町村が發展して來たのと、市内に戸數人口充實の余地がないのになつた事は矢つ張り急進益進したのでなければならぬ、眞個に市の展開膨脹である。

第五章 議員及選舉權

熊本市で衆議院議員選舉權を有つてゐる者は總數千六百九十五人である、その内から議員一名を選出する、昨年議會解散後の改選には又々山田殊一氏を議會の崇高なる

祭壇に送つた、縣會議員の定員は二名である有権者二千二百八十九である、現に河田巖市原秀太郎の兩氏が議員であるが市原氏六月二十一日死亡したので目下缺員である市會議員選舉權有権者三千三百九十五人、其中一級百十一人、二級六百五十三人三級二千六百三十人(大正三年十二月統計表)である。

現員數は前記の通り三十六名で參事會員六名である。

第六章 官衙公署、團體

第一節 官衙公署

當熊本市は九州の中央に位して居るから、便益上其管轄の他縣に跨つて差支へのない官衙が非常に多い、今先づ讀者の爲め簡単に記述して見る。

▲熊本縣廳▼

南千反畑町に洋風の壯嚴な高館があるそれが熊本縣廳だ、明治の初めまで古城の中にあつたが後年今の地を卜して移した、廳内は頗る廣濶である梅櫻柳の樹木點綴して萬般の規模甚だ宏大である熊本市役所と相對して西向に門構へをしてゐる門際にある

青白のペンキ塗りの家は水産試驗場である、現任知事は川上親晴氏。

▲熊本市役所▼

東向きに縣廳と相對して木造りの建物は市役所である、依然たる舊時の姿に依てゐるけれど後方裏面に豪壯な一構へが増築されてゐる、大正の今日では前面舊式的の建物で後方最新式の建物を建築したことは兎に角熊本の一異觀である、結構敢て大とは云へぬが内部の整頓してゐるのは流石は熊本だ、明治二十二年六月、初期の市長杉村大八氏の當時建築したもので星霜二十有余年を閲してゐる、改築問題を論議する一部の者があるが早晚實問題として現れるのであらう、現市長は依田昌兮氏である。

▲熊本地方裁判所▼

京町臺の加藤社に參拜せる人は、確かに社裏の宏大壯嚴な赤煉瓦構への高層を見らるゝであらう、大玄關前のソテツに見とれる人も多いであらう、之れが新築した熊本地方裁判所である、前面の大菊花章は燦として目を射る自ら司直の府たる權威とスタイルを添へてゐる、明治四十年から同四十二年に亘つて幾數萬圓を棒に振つて新築し

たものである。之れも百瀬裁判所長の腕前の一つであらう。

▲熊本監獄署▼

市内手取本町にあり、熊本城下の坪井川の流れに沿ひて結構古く明治始年の建築である先年來數度の改築移轉の議起つたけれ共國費の都合今更其儘風致上甚だよろしからざる位置に在ると思ふ、囚徒の數は常に八百五十内外を算すると云ふことである。

▲熊本稅務監督局▼

熊本稅務監督局は其の始め、熊本福岡大分の三縣を管掌して居たが、明治四十二年長崎稅務監督局の廢せられてからは長崎縣佐賀縣を合併した、大正二年六月行政整理の結果、鹿兒島稅務督局を併せたので現在は九州沖繩八縣に及んで六十ヶ所の稅務署を管理して居る、熊本稅務監督局は明治三十五年十一月の創設である、青桐の蔭に綠り滴りて夏更に涼しい、所在は市内山崎町である實は大正三年度の實收に係る國稅額は御紹介して置きたいけれど熊本案内記には頁數が限られてもあるし更に案内としては必要も差程感せぬので止して置く事にした。現監督局長は大槻龍次氏で評判が至

つてよい。

▲九州遞信局▼

群集遊覽者旅客は、市内新市街の記念碑を是非共も見らるゝであらう、そは日清役の戰勝を記念したる唯一の建物であるからだ、記念銅像を南に下る二三丁にして宏壯麗美なる建物の屹立せるを見るであらう、之れ明治四十三年度に熊本遞信管理局として始めて新設せられ大正二年六月行政整理の結果、長崎遞信管理局を併合したので改めて九州遞信局と稱したのである、九州沖繩八縣下の遞信事業を管掌してゐる、熊本市は始め本局の新設せられた時に當つて五萬余圓を投じ廳舎を新築して提供したのである當時の市當局者の達觀多とせねばならぬ局長は肥後八次氏で頭腦明晰な人である

▲熊本專賣支局▼

新市街の記念碑を眺められた人達は、九州遞信局と同時に東洋一の大建築たる赤煉瓦造の壯嚴模大な一構へを仰ぎ望まるゝであらう、之れが熊本專賣支局である、建築總費壹百余萬圓である、明治三十八年創設當時から大正二年六月制度整理の決行せ

らるゝまでは熊本葉煙草製造所と云つて只單に煙草の製造販賣のみ爲して居たのである、制度整理の結果專賣支局と合併して是れまでの事業より以外に鹽樟腦の收納販賣までを管掌する如うになつてゐる所長は杉一郎氏である。

▲熊本郵便局▼

洗馬街頭に屹然として、坪井川の流に沿ひて建てる洋館は熊本郵便局である。即ち一等郵便局である長崎に比し近年却つて各種の郵便事務頗る多忙繁盛を極めてゐる構内には九州遞信局の管掌である通信傳習生養成所がありて、九州の各縣下から廣く傳習生を募集してゐる、現局長は通信副事務官瀧本豊之輔氏である。市の殆ど中心に位置して居るので民衆の便益が頗るよい。

▲熊本側候所▼

明治二十三年二月の創立である、英國綠威偏、東經百三十度四十二分北緯二十二度四十八分海面を抜ぐ事十五米二晴雨計海面よりの高さ十六米六、寒暖計地面よりの高さ一米二雨量計地面よりの高さ三米風力全七米七の市内京町二丁目にある、一等測候

所であるから、各種觀測の器械は完備して居る、所長は技師栗山茂太郎氏である

▲熊本大林區署▼

熊本大林區署は明治三十五年に市内下追廻田畑町から現在の地市内京町臺の崇高なる地を下して移した、熊本福岡大分佐賀及長崎の五縣下の林政を管掌してゐる、管内小林區署の數は實に二十九所である、現署長は橋口正美氏で、市外池田に住宅を構へて居る。

▲熊本市警察署▼

縣廳の南隣にある、土造の建物が熊本警察署である、更に其の南に路を隔て、大日本赤十字社熊本支社がある、支社の門と相對して知事官舎がある、知事、内務部長、警察部長の官舎は相例んで、此地法稔寺町願正寺町に跨がつて建つてゐる、木造の棟である、

▲原蠶種製造支所▼

農商務省直轄の原蠶種製造所熊本支所は市外健軍村にあり、大正二年八月新築落成

した斬新の設計建築である、

▲熊本種馬所▼

熊本種馬所は市を東に去る二里余の、菊池郡西合志村に建てられてある、最始には球磨郡に建てられてあつたが、明治四十一年現在の地に移轉した、構内の面積百七十一町歩實に廣い、中に六十五町歩の耕地がある、目下繁養してある馬は五十九頭である、別に耕馬十一頭雜役二頭を養ふてゐる、所長以下所員三名牧手二十有余名を使つてゐる。

▲農事試験支場▼

農商務省直轄農事試験場、九州支場は市外出水村に在る、明治二十六年の創設にて昆虫、養蜂農藝化學専門の技師數十人が後れず研究して益進んでゐる、殊に病害虫に重く研鑽してゐる、二町六反の試験地を持つ、支場長は技師大塚由成氏である。

▲九州癩療養所▼

九州癩療養所は市を去る東方、二里余の地菊池郡西合志村にある九州各縣に於ける

扶持者なき癩病患者を收容する事が唯一の目的である、而して吾人は當病院の經濟的方面を研究して見る必要がある、大正二年度の豫算總額は三萬五千余圓であるが之れに對する各縣の出費を左りに掲げて參考に供して見よう。

縣名	出費額	縣名	出費額
長崎縣	三、六八一、七四八 ^円	福岡縣	八、一八〇、五八二 ^円
大分縣	三、六〇二、五七〇	佐賀縣	三、二三九、五七一
熊本縣	五、三七一、三〇六	宮崎縣	二、一二一、七一六
鹿兒島	四、三六六、九四三	沖繩縣	一、三四六、五〇四

第二節 諸團體

本案内記は多くの努力を營業方面に置いて居るので、諸團體を左程に紹介する要もないが一應其の概略を記す。

▲日本赤十字社熊本支部▼

明治二十七年六月二十日本社の承認を得て始めて支部を設置した、始めの間は事務所を縣廳の内に置かれたが、やがて其基礎が堅實となり、二十七八年戦役に第二回速成看護婦を三十名募り救護員として廣島陸軍豫備病院に派遣したのが其の初の活動である、三十三年八月現在の地、市内願正寺に新築落成と同時に移轉した、現今の狀勢實に驚くべく熟意發刺たるものである、支部長は川上親晴氏である、尙愛國婦人會支部ありて川上縫子氏支部長である。

▲私立衛生熊本支部▼

安じて見ると明治十七年八月、大日本私立衛生會の許しを得て熊本支會を起したのであつたが、全二十一年一月一時解散の後同年八月東肥私立衛生會を設け後二年、即ち明治二十三年六月再び私立衛生會に加里熊本支會と稱して隔月會報を發刊して縣下公衆衛生に裨益する處が少くなかつた、明治二十五年十一月手痘種繼の業を起し天然痘豫防に資する處があつたが、二十九年に至つて痘種官製となつて廢止した其後諸般改良を加つて日に盛大を加へて來た、現在新屋敷町にあるが看護人及産婆の養成其

他個人及公衆衛生上須用の事業を獎勵發達せしめんと期してゐる

▲武德會熊本支部▼

明治二十八年四月大日本武德會の創立せられたので、當地方の有志之に賛同し加入する者が甚だ多いので支部を設立する事になつた、委員七名を撰んで其の計畫に任した、明治三十年一月大に會員を募集することに決して大に勧誘に勉めた結果忽然、支部設置の定員數を得て四月七日本部の承認を求めて支部を設置したのである、是れが熊本支部の生れた第一日である、同年十二月四日正會員二千百十二人賛助會員二千四百十五人に及んだので、總裁、彰仁親王殿下の親臨を仰いで明治三十年十二月五日六日の兩日間、支部發會武德祭並に大演武會を舉行した、是れが第一回の演武仕合である、明治三十一年三月に至つて會員三萬三千と云ふ多數に達したので、市内地藏町に武德講習所を起工した、其後會員の増加著しく現下に至つては實に驚くべく多數の會員を持つてゐる、所在地は南千反町で縣會議場と並んで建つて居る。

▲篤志看護婦人會▼

熊本篤志看護婦人會は本縣の文武高等官及紳商紳士の令閨令嬢から組織されて居たが明治三十三年十一月、日本赤十字社篤志看護婦人會の支會となつたのである、そして今日に及んでゐる。

▲第六師團▼

熊本市の中央に空高く、風姿堂々と建つてゐる、千古不滅の大構へを仰がれるであらう、熊本鎮臺はそれである、明治四年城中に置いて九州の鎮守府とした、明治九年に神風連の襲撃を受けて翌十一年薩軍の包圍する處となつた事は既に述べた通りである、今は第六師團を置かれ、而も司令部は舊城の本丸にある、歩兵第十三聯隊、輜重兵第六大隊、衛戍病院、衛戍監獄、法官部、兵器支廠、經理部、糧飼部、監督部、地方幼年學校、第六憲兵隊司令部、熊本聯隊區司令部等の軍衛が宏壯に鱗次してゐる、工兵第六大隊、野戰砲兵第六聯隊、騎兵第六聯隊は市外大江村の渡鹿練兵場の附近に在る、歩兵第二十三聯隊は市内花畑町に吉野櫻を回周に移植した其中に建つてゐる御幸坂の櫻を知るものは、屹度二十三聯隊の櫻も思はれるであらう。

第七章 教育

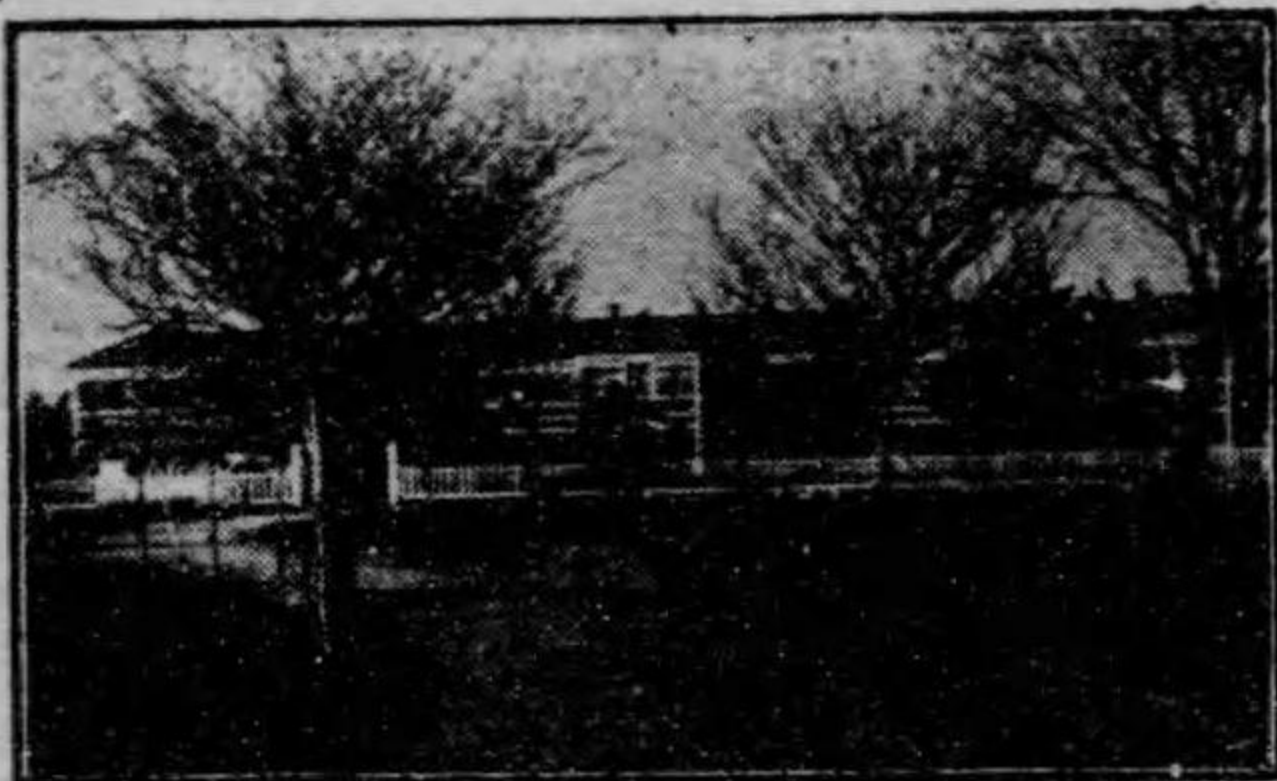
第一節 學校教育

高等教育 — 中學教育 — 補習教育 —
—— 小學校教育 —— 幼稚園 ——
—— 徒弟教育 ——

▲高等教育▼

——(第五高等學校)——

熊本に於ける最高の學校である市の東部龍田山の南麓に在る大構へである、明治十九年十一月時の文部省全國に於て、高等中學の設計區域を定めて、長崎福岡大分佐賀熊本宮崎鹿兒島の七縣を第五區として、明治二十年四月第五區高等學校の位置を熊本と定められた全年の六月、野村彦四郎氏が學校長に任せられ八月醫科部を長崎に設けた、十月始めて入學試験を施行して生徒の人員を本科六百九十人醫科四百人と定め



第五高等學校

て十一月始めて入學の式を挙げた、二十二年八月校舍新に成り現在の地に移轉した、明治二十七年九月勅令に依て、第五高等學校と改稱して本科を大學の豫科と更めて全三十年四月工學部を設置された、今の高等工業の前身である。醫學部には醫學藥學の三科があつた、工學部には土木、機械の二學が置いてあつた、卒業生には得業士の號を捧げてゐた、大學豫科は法、文、工、理、農、醫の六科があつた修業年限が三年として大學に入る事になつてゐる、現在に於ては各科共も選抜の法として激烈公平なる試験の上東大に入學を命じて、地方の各大學には其の落伍者が入る様な傾がある。設立以來野村彦四郎、嘉納治五郎、中川元、櫻井房記、松浦寅三郎の諸氏歴任して現校長吉岡郷市氏に及んでゐる。——校域頗る廣濶であつて松樹林の如く、芝生恰も曠野の様である、結構宏壯雄大である校舍は、此の大自然趣味の横溢してゐる龍田山を背景にして建つてゐる、學風は温健純朴である時流經薄の氣鮮し、文を練り思想を發表するには、龍南會雜誌が發行されてゐる、筋肉骨を鍛ふには運動部が設けてある佛教青年會、花陵會等があつて靈界の研磨に努めてゐる。



高等工業學校

龍南の山青綠に龍南の健兒又意氣青雲の志あり、龍雲の望あり、最高學府の門戸を敲く腕は強かれ頭腦は透明なれ、將來の學士博士今龍南の下に讀書す。語學の研究、數理の研究、哲學の研究、ゾロの作業は大學のテナカハ也。一等、二等、三等の大學、諸君をウエルカムする赤門亦多し！。

（熊本高等工業學校）

五高と相對して數棟の洋館の並立して居る壯嚴な姿を見られるであらう、それが熊本高等工業學校である明治三十年第五高等學校工學部の獨立分離したものである、學科は土木、機械、採鑛冶金の三科である、いろんな文明の機械器具標本が悉く備へてある、現校長は川口虎雄氏である。同氏は更に歐米に學を修め最近工業界の趨勢を學得した新人物であつて新時代の要求する動的の士である、各教授連も亦嶄新の知識を得持してゐるものが多い卒業生は年々各方面に

需用が多くて申込に應ずる事が困難と云ふ有様である、附屬として工業夜學校が設けてある、機械、土木、採鑛冶金の外六科について教授してゐる、修業年限は本科二年、年豫科一年である、中學三年以上修業の者が入學し得た時それが本科生であつて、高等小學卒業者の入學する時は豫科である、要するに豫科も本科も入學試験は嚴重に行はれてゐる

ツロ―は土木の生命ではないか。ハンマーは機械の生命ではないか、サイエンスの研究は採治の生命ではないか、アスファルトの壯觀、四十八層の建築、モーターの響き天地に轟き地下千尺不夜城の觀を見る、鑛中の壯觀は専門教育を受くる諸彦の双肩にあるではないか、諸君の頭胸の加減と腕にあるではないか？

（熊本醫學專門學校）

明治二十一年春雨霽と稱して創立した、醫學を教授してゐたが全二十四年市内四學校を合せたる九州學院の醫學部となつた、全二十九年再び獨立して、私立熊本醫學學校と稱した是れは現校長谷口長雄氏外五名が發起となつて愈々假校金を内坪井町に設け



熊本醫學專門學校

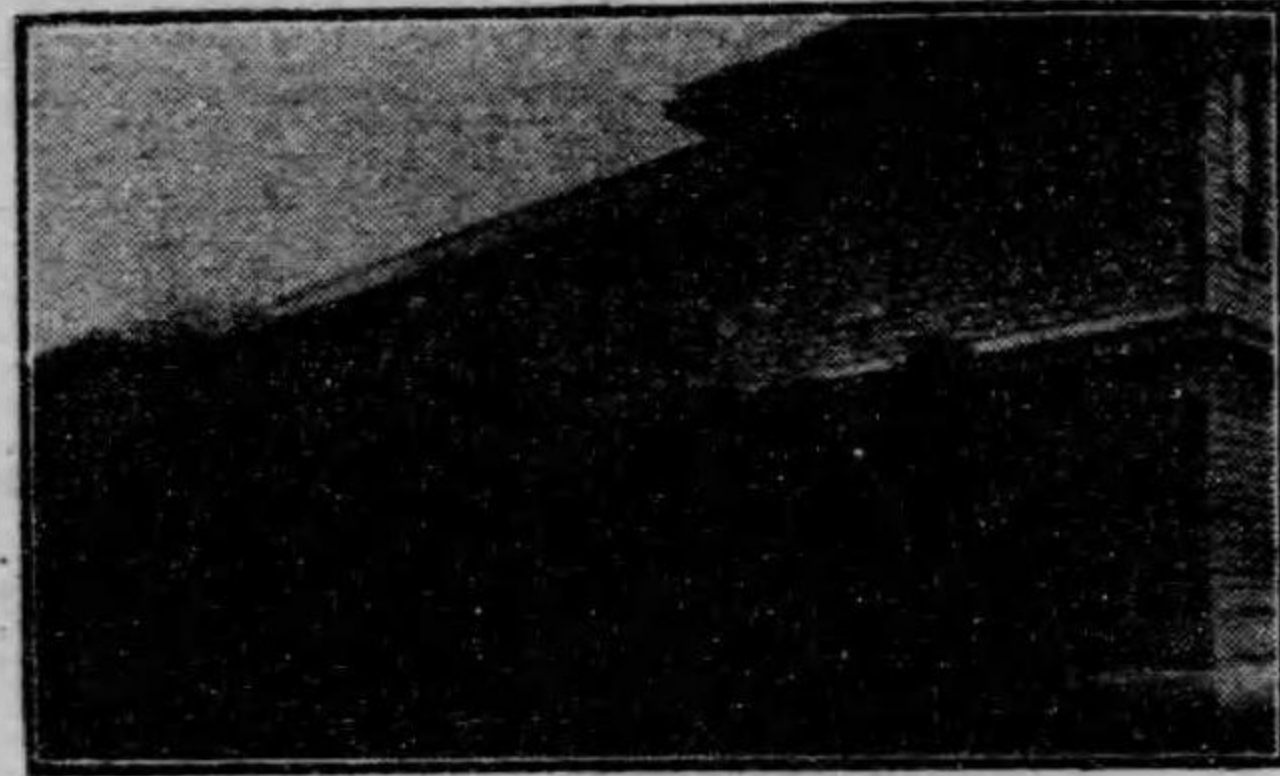
臨床上の實習は専ら縣立病院を以て充つる可く許可を得た爾來校運漸次隆盛に向ひ、明治三十六年專門學校令の發布されたので更に組織を改め校舎を改善して設備を完成した。同三十七年二月私立熊本醫學專門學校と改稱した、是れと同時に徵兵令第十三條に依て猶豫の認定許可を得たのである。更に三十九年六月醫師免許規則第三條に依つて指定の件を公布された四十一年十一月第一回卒業生を出した、四十三年愈々校名付の醫學士の稱號を認可されたのである、四十四年陸軍召募規則に依つて陸軍衛生部生徒の教養を依託された、明治四十二年度から五ヶ年間に七萬圓の縣費補助を受けて残余は設立者に於て支出し合計十三萬圓の豫算で市外本莊村に改築の工を起したのである、大正元年九月新築工成りてそれに移轉した、校長は醫學博士谷口長雄氏である、藥學博士一名文學士二名醫學博士二名醫學士七名の教授が居る他に九州醫學大學の櫻井、小山、石原の三博士教授を囑託されてゐる卒業ま

では満四ヶ年を要するのである嘗つて、醫學生の隨落は非常なものであつた、熊本で醫學生と云つたら、下宿も貸さぬと嫌らはれてゐたのが今日では實に其の氣風を矯正して、將來ある人格と權威とを備へて來たそれが本當の態度であると思ふ醫學生たれ

入學試験が済んだ校内をくぐれば、直接頭胸に四角(資格)ある未來のドクトル君、解剖組織の基礎、醫學が済んだ今は解剖の時期である。白い手術衣を着てギラ／＼したメスの光る、ピンセットを手に研究家の胸裡には赤い肉と白い骨とは解剖臺に横つて散らばつた瞬間其處に醫學の研究がある其處に未來のドクトルがある

——九州藥學專門學校——

明治十八年三月市内藥業者其他有志が相圖つて、藥學校を創立した。之れが今の私立九州藥專の前身である爾來校運日に月に益進して驚くべく完備と整然とを來した殊現校長藥學博士安香堯行氏が經營するに及んで頗る面目を更めて來た、市外大江に宏大な校舎を新築して九州の藥學大府となつた、學科は本科と別科の二つに區分してゐ



九州藥學專門學校

る中學卒業生が激烈な試験の上に入學するのが、本科の學生で角帽を頂く卒業の上は九州藥學士と稱號を付して差支がない。別科生は普通の藥劑師を養成する實動的の者である、本科は大正元年十一月文部省は無試験藥劑師たるを得る事を指定したのである

サイエンスの研究、酸類の香り高き白壁の實驗室に製藥の研究、美顏料の發明、不老不死の靈藥を作る進歩發達向上は諸君のスパンにあるではないか、頭腦の乗除にあるではないか、未來の仁丹會社の顧問は衛生會の會長は現在の研究家たる諸君ではないか?

▲中等教育▼

市内外の中等程度の各學校は、數に於ては決して少なくない、私立も、官立、亦決して劣つてゐない先づ縣立にては、男女兩師範と第二師範、濟々熊中の兩中學校、農工商の三實業學校と高等女學校である、私立には九州學院、鐘西中學の二中學校、尙綱、熊本、玫瑰の三女學校が先づ主なものあらう。



(兩師範學校)

第一師範學校

第一師範學校も第一師範、第二師範の建設を見る様にあつた。第一師範學校は明治七年五月の創立である、當時は新町にあつたが規模極めて小であつたので、小學教育の振興に伴つて校運漸次發展して後年敷内に移轉した、再び今の京町に移つたのである。三十四年女子部を併設して規模を愈々大にした現今の敷地は一萬三千四百五十九坪である、後女子師範の分立、簡易科の廢滅となつて、更に第二師範の市外出水村に現實したのである。本校が初等教育の爲めに貢献した功蹟は

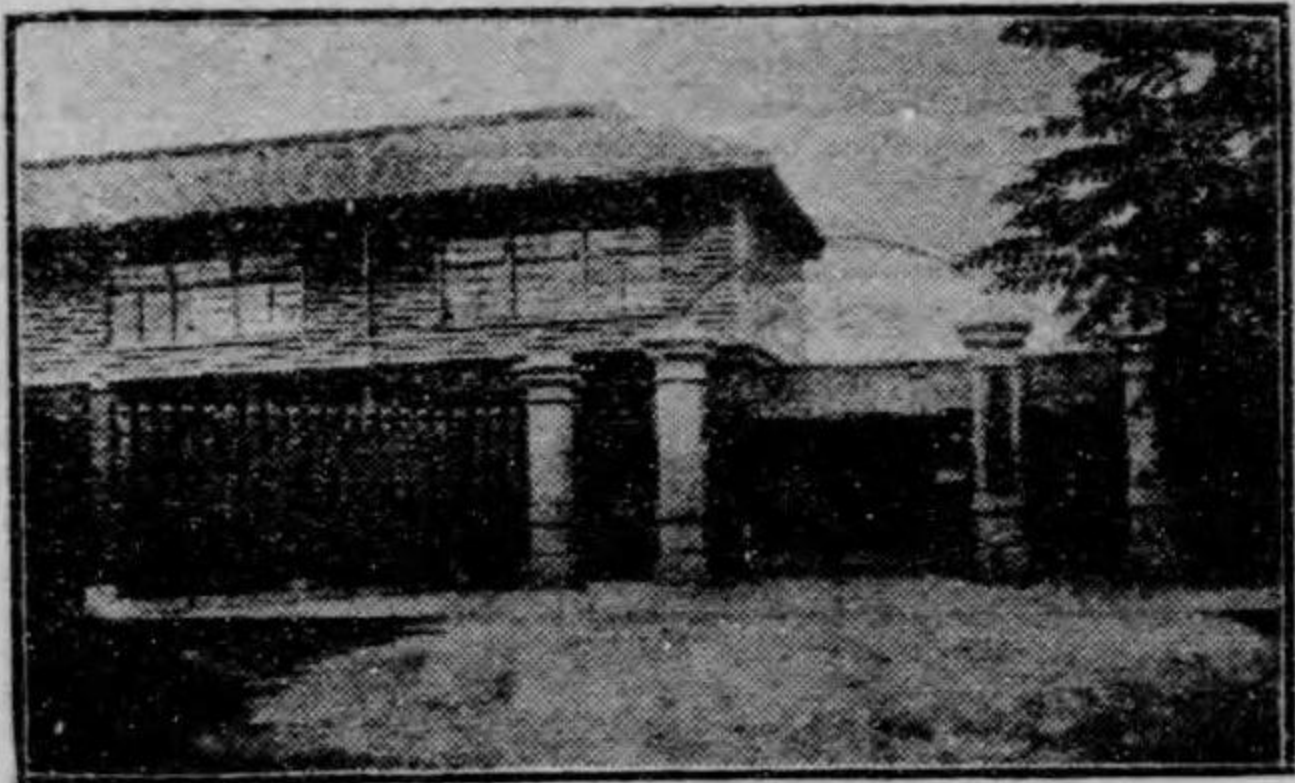
實に多大であらう開校以來卒業生は千五百余人と注せられてゐる、現校長は羽田貞義氏である、通俗講演は氏のバテントである、第二師範は市外出水村に宏大に建てられた第一師範と同様の生徒を養生してゐる、現校長は頭腦明折なる武井悌四郎氏である

▲兩師範の二部生は中學校卒業程度で入學試験を施し入學許可をしてゐる卒業年限は一ヶ年である▼

(女子師範學校)

女子師範學校

明治二十八年四月始めて師範學校内に女子講習科生を置き女教員の養成に務めた、三十三年に至つては遂に女子部を設けた爾來年々多數の卒業生を出したのであるが、義務年限の延長で女子教育の不足を來たしたので、女子部の獨立を見た四十三年二月内坪井に新築の工を起し、四十四年四月新校舎に移轉した、現校長は新莊義之氏である男子と同様に二部生の制度もある



教育の源泉は源を京陵に發す、縣下廿萬の兒童は諸君の畑である、田である、未來の大臣大將を耕す天職の教育は諸君の生命である。晨に道を聞き夕に教へを受く、京陵の健兒は將來の君子であらねばならぬ、將來の教育家であらねばならぬ、健全な思想健全なる體驅は第二の國民と第三帝國の華山を作るべき覺悟と深遠なる自重とを……



中學濟々黌

(中學濟々黌)

濟々黌は本縣下の中學校の祖である、明治十二年先達の士相圖つて相撲町に同心學舎を設けた之れが濟々黌の前身である、十五年一月規模を擴張して濟々黌を起した、當時質實剛健の學風は一世の視聽を驚した、宮内省の御下賜金五百圓實に歴史に光がある舊藩主細川侯爵前後して三萬三千圓を與へられた、これが爲めに大に組織を擴張する事が出来たのである、二十七年侯爵家から更に十萬圓を賜ひて頗る學事を勵まされる、其後私立より縣立に移し熊本縣立中學濟々黌と稱したる、現校長は井芹經平氏である卒業生は既に三千余りを出してゐる。

(熊本中學校)

市外大江村にある一構へが縣立中學校である、三十三年四月濟々黌から分立したも



熊本中學校

(九州學院)

英國神學博士セシエル、ブラウン氏が巨萬の資を投じて新築新設した洋館の結構は即ち九州學院である。五高教授であつた遠山參良氏が院長である、四十四年に開校した現今第五學年を最上級であつて第一回の卒業となるわけである、市外大江の原頭に一段の美と、壯とを擱んで建つてゐる、入學志望者實に多數である

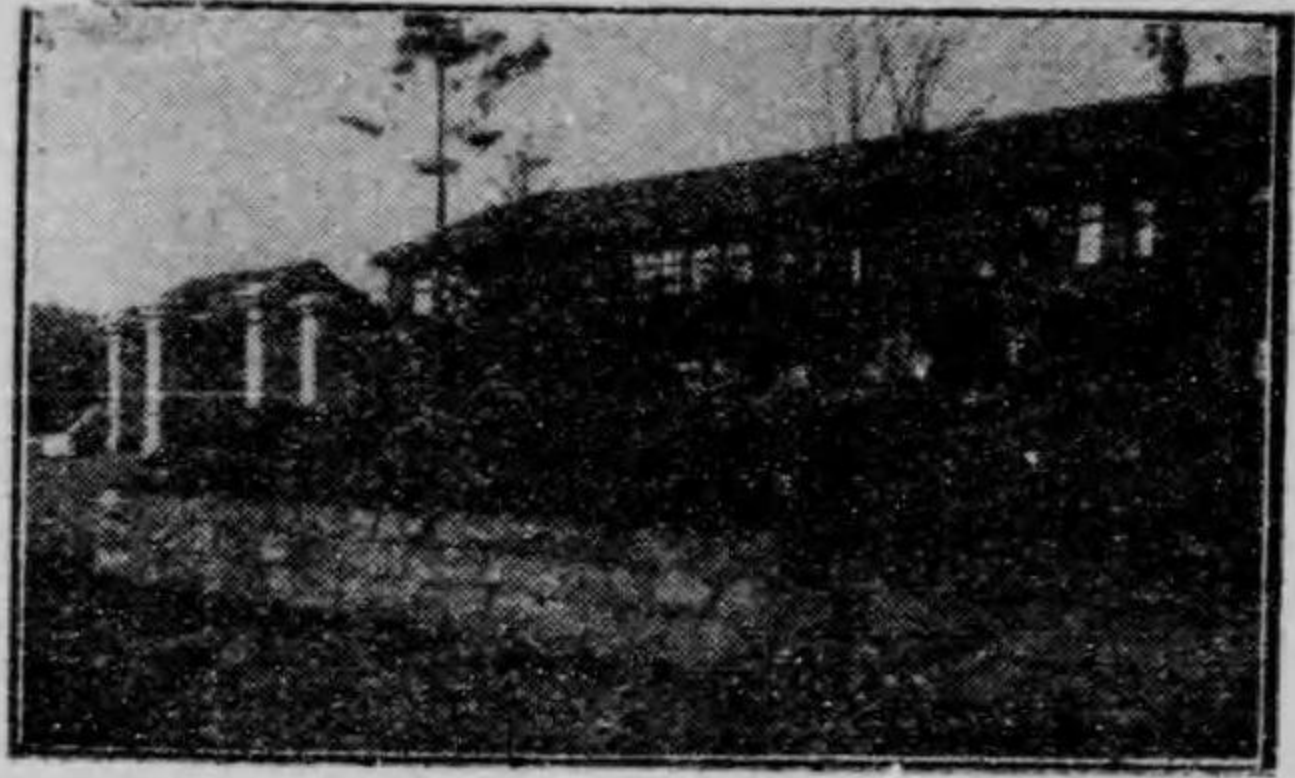
——(鎮西中學校)——

昔は佛教中學校と稱してゐたさうして佛教主義の教育を施してゐた、而し明治三十八年組織を更めて普通の中學校に準ずるに至つたのである生徒の成績も決して縣立に劣りはせぬ現校長は福島愨雄氏である。

普通教育の養成常識の修養は一年より二年三年より四年、小兒より青年に干城を作る軍人に、大學に入る豫備を修む専門學を修むる基礎の大事の大事の卵子で有る諸君の覺悟は眞面目であり健康にある、勉強にある、先生の口眞似れと聲名を付けざる事であり、中學生らしかれ、中學生らしかれ。

——(商業學校)——

明治二十六年一月熊本高等小學校内に商業補習科を設けられた、それが商業學の發端前身であつた。明治二十八年四月簡易商業學校と改名した、そして文部省から毎年百圓の補助を受けて居た、明治三十九年中學程度の商業學校に改めて、熊本商業學校と稱したのである全年八月新町一丁目に移つた、從來市の經營に屬したけれ共規横の



大なるに従れて縣營に移すの止むなくなつた、其後四十二年京町に宏大な校舎を新築して其處に移つた、修業年限は本科三年豫科二年である本市内に於ける商業學校出身者の活動は實に驚くべく市内の商業權は實に本校卒業者に移つてゐる、又高等商業に進む者も多い、現校長は原積威雄氏である。

——(工業學校)——

創立は明治三十三年である普通農事に關する各科を教授する目的である、別科には養蠶科が設けてある本科の修業年限は三ケ年で養蠶科は八ケ月である、市外出水村に田畑の試作地を持つてゐる、水前寺を見物する人は藥專と共に本校を望んであらう。

市外大江村にある、共益株式會社鐵工場と相對して建てる一構の洋館である、明治三十一年四月の開校である最初は物産館内に假校舎を設けられたが、狹隘の都合上三



十二年十一月現校舎落成して、移轉したのである建築、機械
土木、染織の四科に區分して居る、生徒の紀風正しい事は本
校ほこりである、現校長は竹村得太郎氏である、熊本の工業
亦此處から湧く。

——(獸醫學校)——

九州に於る獸醫學校の喝矢は即ち、私立熊本獸醫學校であ
る明治十八年の設立である幾多の變遷を経て今日に至つた市
外本山に一構へをしてゐる入學は高等小學卒業の程度である

商業の算盤とルーラーは世界の富を計算し採幹の軸である、工業の發展は生産品と巧妙なる技
術である、農業の進歩は太理を應用して國産を計る。昔は昔今は今商工農は富國強兵の基であ
る諸君の前途は、諸君の覺悟は大なる國家の一分子たるを自覺せよ！。

——(縣立高等女學校)——

市内藪内町に宏壯な新築の大校舎がある、それが高等女學校で明治三十六年の創立
である、現校長は會田義由氏である、一向に其腕前が表現せないのでは惜まねばなる
まい。

——(尙綱高等女學校)——

本校は明治二十一年の創立である内藤儀十郎氏が卒先して女子教育の振興を圖つた
賜もである、既に其名聲は天下に轟いて各地から志望者が多く遠くから來つて學ぶも
の決して少くない、卒業生を出す事千を余すべしである市内昇町に屹立してゐる、現
校長は福島綱雄氏で校主は内藤儀十郎氏である

——(女子工藝學校)——

本校は内坪井にある、明治三十六年五月内藤儀十郎、佐々布遠氏の主唱で始めて設
置せられた四十四年四月から、高等女學校三年制に準じて殊に裁縫手藝に重を置いて
ゐる即實動的である。

——(玫瑰女學校)——

佛人マテ、ボルジャ氏の創設する處である上林町にある、三十年七月校舍落成し、三十三年五月から授業を開始した、本科の修業限年は三ヶ年で専科は一ヶ年である、今日に至るまでの校運、實に盛んである

——(熊本女學校)——

明治三十年熊本英學校と共に海老名彈正氏の創立である、本校生徒は特に英學文學等に秀ぶと稱へられてゐた、創立以來五百余の卒業生を出してゐる、其他壺東女學校有働裁縫女學校等の私立學校がある

良妻賢母の覺悟は近きにあれ、遠きにあれ、處女の運命である、女大學からす丸はよく昔より女を教へた女を導いた、諸女將來の生命は將來主婦自覺の必要がある教育されたる頭腦と働く手は余りに大ならんより小なれ、學校に於て先生に隨ひ、家庭にありて母に隨ふ男は日に太陽と共に新し女は只古き女大學を読み、からす丸の古き教へにあれ。

▲補習教育▼

古町、坪井の二ヶ所に商業補習學校を設けて、夜間商家の子弟から番頭丁稚等に對

して讀書、珠算、綴方等の教授を施するのが目的である現に生徒が九十余名である、修業年限六ヶ月である

——(實科女學校)

市立實科高等女學校は手取本町にある新築の校舎で熊本高等小學校と門を同じゆうしてゐる、家事裁縫を主としてゐる其他に普通科も學んでゐる、修業年限は二ヶ年である。

▲徒弟教育▼

三十三年四月創立の市立工業徒弟學校は初め飽託郡營の學校であつたが明治四十三年三月熊本市營となつた、そして所在地であつた市外本山から大正二年五月市内新町一丁目に移轉したのである、學科は建築指物塗料工の三科に分れて修業年限は何れも三ヶ年である、尙徒弟教育としては各諸會社團體に於て注意してゐるが共益社の徒弟教育は、實に其の模範として差支へはあるまい、主として精神の修養、學問の應用に疑らしてゐる、それだけ實際上に表現してゐる

▲小學教育▼

謂ふ迄もない市の小學教育は最近に於て長足の進歩を來してゐる、最近の調査に依れば尋常科の在籍兒童總數は男兒三千四百四十一人、女兒三千〇四十九人である高等小學校は一ヶ所である男子四百五十七人女兒三百五十八人である、今左に各學校の創立期と位置を記して見る。

學 校 名	創 立 期	位 置
熊本高等小學校	明治廿一年	手取本町
碩臺尋常小學校	明治六年	南千反畑町
慶徳尋常小學校	明治七年	山崎町
五福尋常小學校	明治八年	吳服町
向榮尋常小學校	明治九年	迎町
壺川尋常小學校	明治十一年	内坪井町
一新尋常小學校	明治十一年	新町
手取尋常小學校	明治十一年	手取本町
坪井尋常小學校	明治四十一年	東外坪井町
山崎尋常小學校	明治四十一年	山崎町
白河尋常小學校	明治四十二年	新屋敷町

▲幼稚園▼

幼稚園は熊本五福手取碩臺の四つある、幼兒數三百七拾余人職員は總て二十人である、何れも保育年限は二々年である就中、碩臺校の小川保母多年の勤績で著者もよ知れる間である。

第三節 軍隊教育

明治三十年の創立である生徒に普通教育を授け軍人的精神を涵養して陸軍中央幼年校生徒となるべき者を養生してゐる、教授は陸軍文官之を擔任して學理を實際に應學用し得る能力を發達せしめ、訓育は將校が之を擔任して軍紀風紀に慣習せしめ併せて身體、精神を發育鍛練して有爲の將校を出す目的である、學校は市内二ノ丸に在る。學校長は福留龜太郎氏である。

第四節 社會教育

——(熊本圖書館)——

沿革

縣立熊本圖書館は明治二十八年觀聚館内に閱覽室と書庫を建て、細川

候、元田男、本縣記録係師範學校を始め有志十五六名の出品と新購入の書籍を加へて全二十九年九月廿五日始めて開館したのである、之れが今の縣立熊本圖書館の前身である、其後漸時進展を示して來た然し明治四十四年までは規模小にして見るべきものがなかつた、明治四十二年圖書室改築の目的から佐々文庫設立發起人總代高岡元真氏が壹萬圓寄贈の出願があり、且つ縣費二千七百圓を加へ圖書室擴張の議を縣會は決したのである、即ち明治四十四年に工成り五月二十三日開室した、全年七月一日文學士中津親義氏を聘して、総べての事務を囑託したとして始て圖書館と銘名したのである、氏は帝大卒業と同時に館長に搜せられた、熱心努力大に盡する處があつて先づ閱覽室を特別、普通、新聞、兒童の五に區分した、漸時に館も整頓し設備も完成して次に閱覽者も増加して實に驚く可き成績を見せて來た、明治四十五年四月一日熊本縣立熊本圖書館と改稱して新規則を實施し愈々對社會的教育の普及源泉となつた、大正二年五月より館外携出の制を實施した、大正三年度中の利用者は一日平均百五名を越へてゐる、大正三年九月より巡回書庫を開始した、現時館長は依然として中津文學士で

司書は佐々木伸作氏である、大正四年四月大日本圖書館大會は、現館長の腕は強かれ逐に、避諷地にも係らず、當熊本縣立熊本圖書館で催されたのである、是れ實に本館の重なる記録であらう、社會教育は學校教育より余程六ヶ敷より困難な社會教育の任に直接關係する、圖書館は更に注意周到でなくては叶はぬ現館長中津親義氏は、故辛島格氏が熊本市長の時特に見込んで帝大在學中に兩手で摺んで引き込んで、圖書館へ抱き込んだ丈けある、中津氏も才物だか才物をよく見透した辛島氏がより偉いと思ふ中津氏は卒業と同時に對社會的教育家になつた、昨日迄で學校教育に熱狂した同氏が今日は其實行的、社會教育に腕を打ち振つて見ると云ふ決心も強かれ、自覺も堅かれ主義主張胞負方針も全たかれ時は來りて現在の隆盛と整備完全を實現示した實に同氏は奮闘家であるとして同氏の生命は「信仰即生活」から保たれてゐる、その徹底さ、その美しさは新時代の新人物と讚辭せねばなるまい、今左に本館創設以來の閱覽者數を記して同氏の腕の切れ口の良味を紹介せん。

閱覽人員表

年	閱覽人員	年	閱覽人員
明治二十九年	七二四	明治三十一年	一、三六六
明治三十三年	六、二〇二	明治三十五年	五、〇〇四
明治三十七年	八、二一八	明治三十九年	九、四七三
明治四十一年	九、二二三	明治四十三年	九、九五〇
明治四十四年	三二、八八五	大正元年	五一、一九四
大正二年	八〇、〇六五	大正三年	一〇七、六一一

實に閱覽人員が中津氏就任以來突如として増した事は、氏の「腕」と「頭」を譽めねばなるまい。

位置 市の中央南千反畑町に在る縣廳、縣會議事堂と相並んでゐる前面には舊藩の碩學秋山玉水高本紫溟の碑が嚴かに建てられて自ら對社會的の學園の地である館は木造洋風の一構へである

▲附記 縣下にある公立圖書館の主なるものは鹿本の清浦文庫、玉名郡立圖書館、飽託の村立圖書館であ

第八章 宗教

第一節

- ▲神社 ▲神職 ▲寺院
- ▲住職 ▲教會 ▲信者

らう。社會教育としては猶外に多々あるが、宗教の如きは別項に記する事にした。

表數の一 班宗教

其一(神社神職)

官幣社	縣社	郷社	村社	無格社
三	九	五八	九八二	三、四五
九	一一	六六	一七五	一

其二(寺院住職)

天壽	眞言	臨濟	曹洞	黄檗	眞	日	時	淨土
一八	三六	二三	一四三	六	六八〇	六四	一	八八
一六	二七	一六	八五	五	六四四	六一	一	五七

(大正四年四月調)

神道 教會	佛道教會		基督教會	
	教務所	説教場	教會	講義所
五〇	三三	五四	三一	七

(以上の表は熊本縣下(熊本市也))

熊本市	熊本	八代	球磨	天草	合計
大正三年	一八三	一四三	一九六	一一〇九	二六三六

熊本は宗教的異彩を持つてゐるそれは案内記の一篇にあまりに書く要がない、書く
 とすれば肥後の地誌なり、歴史化して来るではないか、只案内記は現在の玄關から座
 敷へ誘つて將に庭先から床の上の飾りまで見せる位ひの處へまで案内したら責任は全
 くしたものだ、あまり出張ると横鋒が出るから——熊本は比較的宗教は普及されて
 る神道の各派、佛教の各派、基督教の各教會何れも説教所教務所又は講義所を設けて
 布教して止まないのはうれしいではないか。

第二節 神道 佛道

大社、黒住、愛國、蓮内修成、神習、天理、實行、大成、金光の各派がそれ〴〵教
 務所を設けて其數五十ヶ所に及んでゐる、古きから熊本は敬神の念が殊更に深い彼の

神風連の如うなものは極端な敬神家であつた、其の風流余韻は今に市民に感化してゐ
 る社前を通る人達ちが拜禮をせなく過ぐる者はない、佛道は前記表解した如うに大數
 の寺院住職を持つてゐる。

第三節 基督教一斑

肥後の基督教は其起原が實に遠い以前である、明治四年二月英學校を起した英國人
 ゼンスを聘して教師としたゼンス教授の傍竊に教理を説いた、此時に當つて彼れの感
 化を受けて信仰に入つた一團の少年がある之れ即ち有名な十六人組であつて現今基督
 教界に重きをなしてゐる、海老名彈正小崎弘道宮川經輝の諸氏と横井時雄、金森通倫
 浮田和民等の諸氏はその當時花陵山上に於て堅き信仰を誓つた人々である、熊本は實
 に政治的異常より寧ろ宗教的深い歴史を持つてゐる、吾人の今日が宗教即生活生活即
 信仰を誓ふ所以偶然でもあるまい、目下福音路帖、天主教、日本聖三一、日本組合
 浸禮、ハリスト、日本基督の各派が互に勢力を競ふてゐる、信仰者及教會數の如き
 は前記表數記載の様である。

第九章 交通、通信

第一節 交通

熊本縣は九州の中央に位するから四隣交通の便が早くから開けてゐる、當熊本市は縣の中央に位してゐるので交通通信至つて便利を添へてゐる今簡単に述べて見よう。

▲各地間の通路

福岡に行くには鐵道の至便の外に福岡、三池、南關の三街道がある一は熊本を出で、鹿本植木から山鹿を経るものと、二は植木から高瀬府本を経るもの、一は山鹿より玉名の南關に出でるものである田原坂の古戰場は三池街道にある、山鹿温泉も亦旅客の一遊に價がある南關の素麵は以て沿道の好土産である。

大分に通ずるには鐵道の便は勿論馬車するも便利である即ち日田、豊後の二街道が主なるものである、後者豊後街道は當市の東端龍田口から菊池阿蘇を経るものである効外に出づれば遙かに老杉の列を爲すを見る、山陽の所謂

大道平々砥不如 熊城東去總青蕪

老杉狹路無他樹 欽處時々見阿蘇

と云つたのは即ち此の邊の絶景であらう、現今大津迄には鐵道の便を通じてゐる前者日田街道は、三間町より發して菊池郡隈府町に至る五里二拾丁これから更に行つて大分縣直江街道に合する夫れ若し途中菊池氏の孤忠を吊せんものは此の道がよい。

宮崎縣に通ずるには一は陸路日向街道がある、熊本市迎町から上益城郡に入り矢部濱町を経て阿蘇郡馬見原町から日向に達する七瀧、五郎瀑、千瀧等の壯觀を見る通潤橋に古人の事業を認む事を得る、一は九州線にて八代に至り更に舟舵を蹴ふて球磨川十四里の急灘を溯り槍倒の危、岩戸の奇を探りて人吉に達し陸路更に行くこと五里で始めて宮崎線に入る此の行路を取るは主に青年學生に多い、興味多々

鹿兒島に至るには鐵道の他に國道がある元標から南大通系の如く川尻宇土松橋八代佐敷水俣を経て更に二里で薩州に入る、日奈久温泉は即ち此の線路にある。

天草は勿論群島からなつてゐる宇土三角港及際崎から舟舵の便を借らねばならぬ、海は頼山陽を偲ぶ雲耶山耶の天草洋である、更に舟は長崎唐津等海外に渡航し得るべ

く九州汽船會社が創立されてゐる

▲鐵道交通

門司を起點とした九州線は曲線を描いて西南行して鳥栖驛で二分して長崎と鹿兒島に汽罐車は走る、宇土驛から分れて宇土半島を縦貫して際崎に通じてゐる三角線、熊本驛より支線を大津に發してゐる大津線共に縣下の重要交通機關である、吾人は今後に於て豊肥線の貫通は論無く、三角線の延長して三角阜頭に達する事を切望して止まぬ者である、本縣縣の主要驛は斯んな數である。

- △長洲 △高瀬 △木葉 △植木 △上熊本 △熊本 △川尻
- △宇土 △松橋 △小川 △八代 △人吉 △際崎及大津

▲輕便鐵道

大日本軌道株式會社熊本支社の經營である、輕便は市内安己橋停留所を中心として三線を出してゐる、一は水前寺へ、一は大津へ他の一線は山崎新市街を貫通し新町に迂回して上熊本驛に通ずるものである、至つて旅客貨物滿載収益が大である。菊池

軌道會社の經營に屬するものは久しく市内廣町から上熊本に至つたのみであつたが、大正二年八月から菊池郡隈府に至る十六哩の開通を見たので大に市の北方の交通上の便益を増して來た、熊本軌道株式會社の經營する、熊本軌道は市外白坪村から百貫石港に通つてゐる、御船鐵道は市外春竹村から御船へ通せんと、只惜むらくば電車の無さを。

△附記 大正元年十月市内及鹿本郡山鹿町に至る自動車の運轉を開始して見たが、遂ひ今では中止の姿である。車輛數は三千九百五十余である(人力車及荷車自轉車客馬車)一般の交通に資して居る。

第二節 通信

▲郵便事務

市内には熊本(一等)郵便局、坪井(二等)郵便局の設けがある市内及市附近を管轄してゐる、三等郵便局は市内に十五ヶ所市外に二個所ある、郵便切手賣捌所は市内に百二十余ヶ所市外に二十八ヶ所を設けてある郵便函は市内に百三十六ヶ所市外三十ヶ所の設けがある之れで如何に他市に比して郵便事務の繁忙であるか、窺れる普通郵便物

及配達數、小包郵便物の數量は左程の必要もないので削る事にした

▲電報、電話

電報の發信に於て官報私報總計十五萬九千余通着信十九萬三千余通である、電話は市内を普通の區域として市外黒髮、大江、出水、本莊、本山、古町、春日、横手、花園、池田の各町村を特設電話としてゐる、目下電話加入者は市内で九百余名市外で百四十余名である、交換局は市内櫻町の一角にある四十有余人の交換手を雇用してゐる尙熊本郵便局集配遞道時刻表爲替貯金取扱比較表の如きは余りに専門的になるので削る事にした。

第十章 慈善事業

熊本には孤兒、貧兒を養育する慈善團體が至つて多い「肥後慈善會」「回春病院」「天使園」「聖心醫院」「島崎育兒院」「待勞院」「紫苑會」が其の主なるものであらう。

肥後慈善會

明治三十年英照皇太后崩御に際して御内帑金四拾萬圓を出し地方慈善救濟の資と遊

し給ひし時、本縣にも九千五百圓を拜受する事となつた、時の知事聖旨を體して本會を記し尙縣下有志の義捐を加へ既に其金額三萬圓に達したので當局は之れを保管して年々生ずる利息を以て本會を補助してゐる、之れ取りも直す皇室の恩惠の深き處實に感謝せねばならぬ、全く創立し得たのは明治三十二年六月二十六日であつた、事業を區別して教育部、感化部、白川學園の三としてゐる

▲教育部▼ 教育部は明治二十五年塘林唐五郎氏が徒手、空拳、世間の仁俠を傾りこして起した... 兒寮の事業を三十五年から慈惠會に移したものである。現に塘林先生が其の衝に當られてゐる

▲感化部▼ 感化部は出獄人の保護を目的とし白川學園は不肖兒童の感化教養を爲す處である。

第十一章 實業

第一節 六組合銀行論

明治三十三年十二月第九銀行、福永銀行等の破綻の爲めに一時財界に大恐慌を惹起したが其後直に常態に復した爾來、今日に至る迄で各般の金融極めて圓滑に運んでゐた。

□模範とす可き肥後銀行

株式會社肥後銀行の創立は遠く明治十年に始つてゐる國立銀行條例に準據して福島縣福島町に設立當時第六國立銀行と謂つてゐたが後、候爵細川家の買収する處となつて地方金融の圓滑と殖産の増計を致す爲めに其の運用の實動實務は之れを家臣に委ねたのであつた、是れが創立の起原であり且つ動機であつたと思ふ著者は當地の模範銀行であり先輩銀行である本行を社會に紹介して、あらゆる部面の人達ちの便益福利を圖る資とせん事を慶ぶ者である先づ沿革から記して現状と對照して見よう、本行が最初第六國立銀行として明治十年二月開業した事は前記の通である明治三十年二月營業滿期に達したので、茲に株式會社肥後銀行と改稱し本店を東京に置き支店を大阪、熊本に設け盛に營業を續けた後熊本支店は分離して株式會社熊本銀行と爲つた、明治三十三年十月熊本、肥後兩行の合併成り資本金一百萬圓に増加し東西相應じて益々隆進益盛を計つたのであつた、當時頭取は高橋長秋氏で熊本支店支配人は現在の頭取たる紫藤猛氏である、其後三十五年一月大阪支店を廢止して四十年四月更に拾萬圓を増資

して、本店を熊本市米屋町に移轉したのである全年五月株式會社第九銀行と合併して現今の資本金實に二百萬圓の全部拂込濟の美を見る、誠に驚くの外はない如何に堅實強固の基礎か直に窺れる、扱て斯る沿革を有てる本銀行營業にも亦殘からぬ盛衰の記録を探る事が出来る之れ實に本行の將來ある美の根底の源泉が此處より發したのであるまいか即ち第六國立銀行時代には一時非運に陥入つてゐたが細川侯の買収以來益進向上年と共に移り發達進歩恰も旭日昇天の勢ひ宛然龍雲の概があつた、今日の盛況を見る亦猛紫藤頭取の功しと云ふべしである、明治三十三年十二月二十五日株式會社第九銀行支拂停止前後九州各縣の經濟界に大恐慌を惹起した事は仕うしても忘れ難い事實である、當時金融の劇變常に一定せず内は同業活潑の大競争を行ひ事業の消長亦測るものなく財界攪亂の間に立つて豫め將來の趨勢を觀取して經綸を誤らず能く時艱を凌いで益々擴張の礎石を築いたのは獨り本行の確實信用併せ得たる結果と相持つて大に誇りとすべき策針として新ら記録を残してゐる越へて三十六年東京の安田善次郎氏株の半數を引き受けて針路及營業の大刷新を行ふたのと、四十年五月第九銀行と

合併して資金二百萬圓となつたのは亦美しい記録であらう、要するに、本行が今日の盛況を迎へ同業者の模範として仰がれるに至つた根本原因は蓋遇然でない、其一として堅實鞏固の基礎を通して現れた主義方針が徹底爲たからである、現所在地は米屋町一丁目七番地である頭取に紫藤猛氏を載き、大事な大事な中堅營業部長に竹内悌三郎氏を据へてゐる、庶務部長は中津熊太郎氏である、紫藤氏は我財界の代表的人物である事は今更記述する迄もない、竹内營業部長は檜舞臺に現れた人で當時中央財界のキリン兒と唄れてゐたそれだけ腕前もある、頭腦の加減も甚だ味い事務至つて敏速熊本財界の全く泰斗である、こんな内容を持つ銀行が決して社會總べての方面に便益を圖らぬ理けがない本縣下は勿論遠ち近ち實に金融の大機關となつてゐる、今本銀行の要點を附記して讀者の便益と更に參考に供して見よう。

資本金

貳百萬圓(全額拂込済)

諸預金高

六百五拾六萬六千四百拾五圓

貸出金高

六百七拾八萬〇六百參拾八圓

爲替取引先

各樞要地四百四十六ヶ所

(朝鮮臺灣滿州の各地を加ふ)

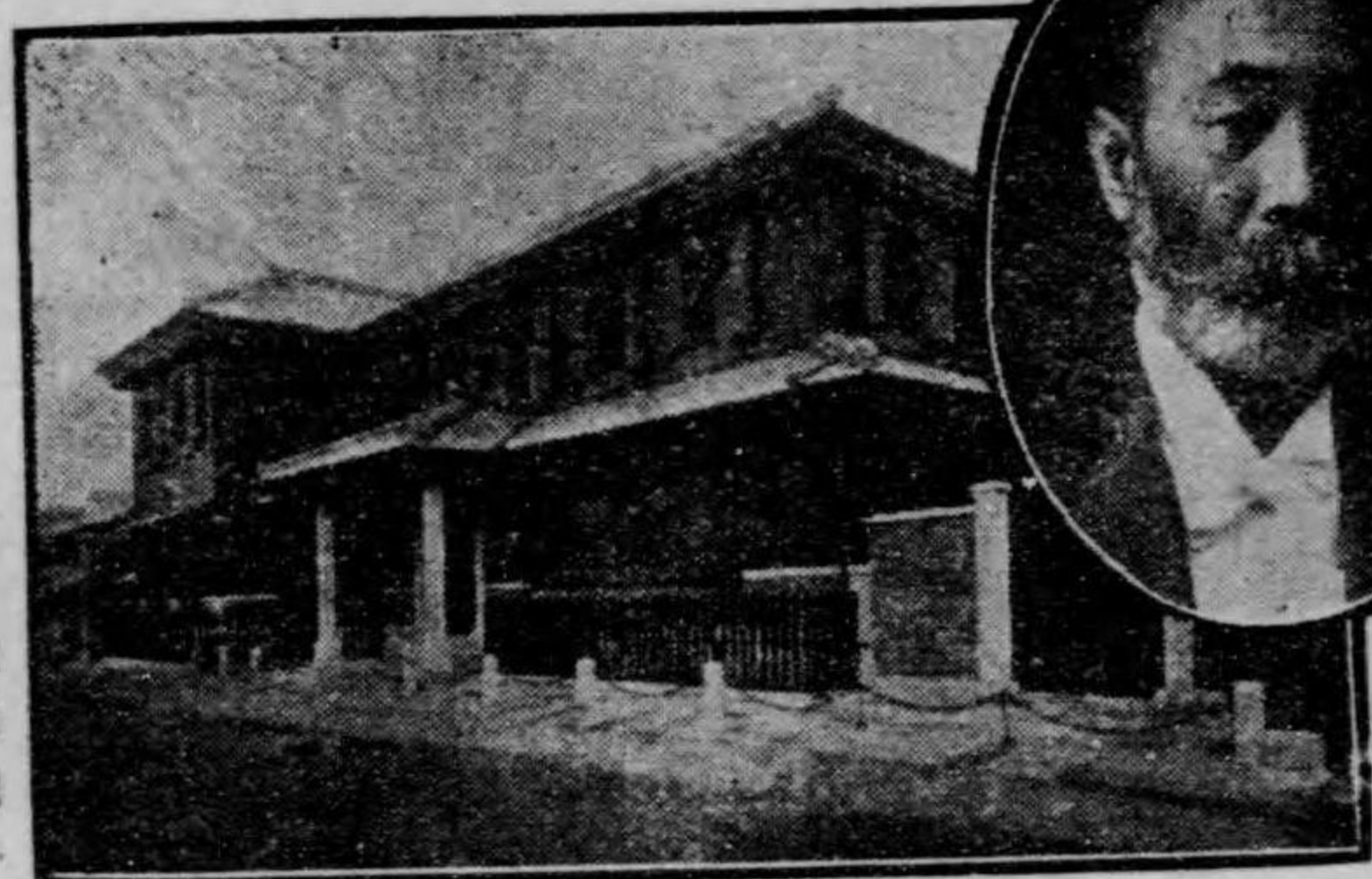
□資◎本◎三◎百◎萬◎圓◎の◎十◎八◎銀◎行◎

——熊本支店長は志位一藏氏——

——コレレスボンテンス二千余ヶ所——

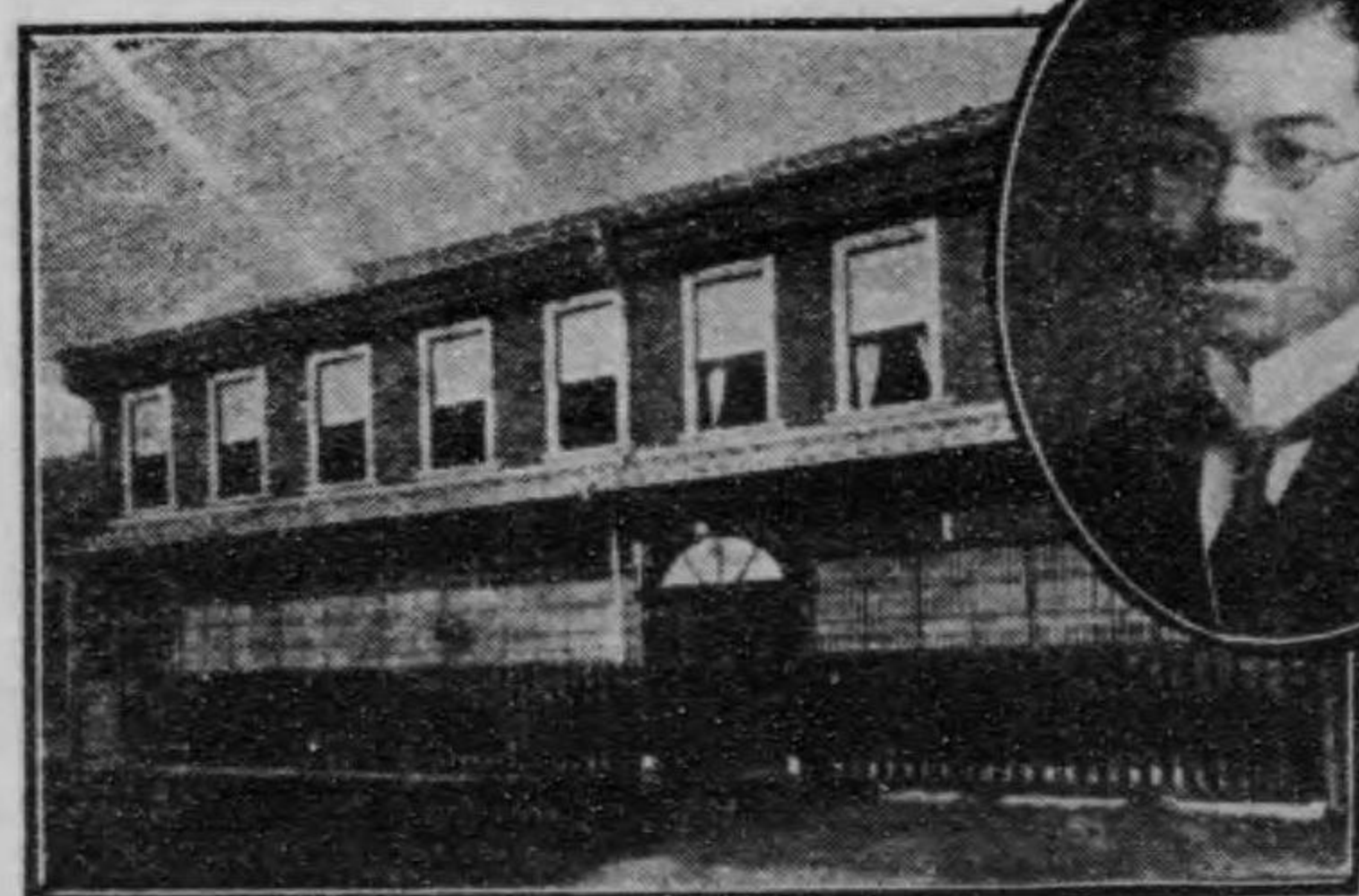
株式會社十八銀行熊本支店を紹介する前に同行本店の沿革を述べて見よう、本行は明治八年の頃故永見寛三、松田源五部氏等發起し長崎市に株式立誠會社なるものを起し専ら金融機關に共し同十年五月國立銀行條例に準據して同社を解散し資本金貳拾五萬圓を以て第十八國立銀行創立の許可を得全年十二月愈々營業を開始した同十三年九月九州銀行同盟會を長崎に開始し九州各地に聯滯爲替法を創設して一層營業の歩を進め廿年六月臨時株主總會の決議に於て五十萬圓とする事に決定して定款を改正して其の認可を得資本増加に伴ふて行務も亦擴張したのである、三十年七月株式會社十八銀行と改稱すると同時に資本金壹百萬圓として商業登記を受けて業務の隆盛を圖つたのである、内地並に朝鮮の各地に支店設立の結果資本總額三百萬圓として愈々歩武堂々

肥後銀行



頭取 紫藤 猛 氏

九州實業銀行



專務取締役 柴田 貢 氏

實業

の陣を張つて現今に及んでゐる、創立以來年を閲すること三十有八年其の間濟界幾多の波瀾があつたけれど常に確實な營業方針は遂に良好の成績を擧げたのである、大阪東、大阪西、熊本、佐世保、嚴原、京城、仁川、釜山、元山、木浦、群山に支店を設けて四出張所及幾多の代理店を有つてゐる、「コルレスボンデンス」先、貳千貳拾五ヶ所を有してゐる「熊本支店」は明治三十六年四月の設立である、業態年毎に繁盛に赴き現在預金五十八萬圓余を有し又工業資金として放出する金額六拾九萬圓に及んで實に當市實業の發展に努力してゐる事は肥後銀行九州商業九州實業三銀行と共に大に社會營業者の大に歓迎し深く尊重信頼する處である、支店長は志位一藏氏で財界の達人である更に事務家である。

□信◎頼◎深◎き◎九◎州◎實◎業◎銀◎行◎

——驚く可き益進向上の一大機運——新進氣鋭の專務取締役柴田貢氏——

株式會社九州實業銀行は明治四十五年五月十五日の創立である、六組合銀行中最も星霜淺き方である市内明十橋通に一構へを成る大建築である、最新建築の法に依つて

實業

遺憾なく設立され、事務室、営業部の完備せる亦熊本各銀行の代表的と云つて差支はあ
 るまい、現専務取締役柴田貢氏經營の任に就くや熱意専心營業の擴張を圖り今や眞率
 な營業方針と摯實な經營策略とは社會の各階級に認識されてゐる、見よ讀者愚へらく
 當地幾多の先輩銀行あるにも關らず尙濟界に一大恐慌を起したるにも關せず優に先輩
 一、二の銀行を凌駕して實際上に於て市内縣下の金融機關として遍く本行を迎へる一
 大機運に益進して來てゐる、即ち創業當日の預金一万二千參百九拾九圓に比し現在預
 金額四拾五萬參千七百七拾參圓貸出金六拾五萬八千六百五拾壹圓の較表を見るは全く驚
 く可き進歩發達向上の一大機運と深く信じて本行の永遠なる前途に向つて著者は慶ぶ
 の一人である、目下使用人參拾六名旺んに活潑に營業を擴張して他一二の先輩銀行に
 範を示してゐる事は社會識者の認むる美點である、資本金貳拾萬圓本期（大正四年前
 半期）貸金及預金の狀況を前期に比較して、如何に本行が益進隆運一般實業者の便を
 圖つて居るかを紹介して見よう



診察室ノ一部



肺病早期診察治療
 皮膚病 花柳病治療

吉田内科皮膚科療病院

院長 吉田久米雄

熊本市北千及畑町
 (電話五五四番)

同療病院玄關ト住宅

	當期預 金合計	前期預 金合計	當期貸付 金合計	前期貸付 金合計
一月末	三六三、三〇六	三一九、一二二	五四九、二一四	六〇五、一四一
二月末	三九五、四二八	三〇〇、六七二	五五三、一二三	五六九、七四二
三月末	三八〇、〇一三	二九一、一四二	五九一、九九七	五六八、四二四
四月末	四〇四、三五九	二九一、六五五	六二二、六九四	五五六、九八三
五月末	四三九、〇〇一	三〇三、九七七	六五一、六六〇	五五六、八四一
六月 廿四日	四五四、二七三	三一〇、五〇三	六五八、一〇四	五八一、三八八

即ち一月より本月に至る迄の貸付金の預金も前期に比して漸次非常の増加をしてゐる、かるが故に營業の成績亦良好である事は何人も疑ふ餘地がない前期新舊株に對して七朱の配當を爲したる本行は本期は更により以上の配當を易くし敢て前期以上の積立金を爲すべし、斯くの如きは短年月に於て堅固な基礎と信用確實併せ得た事は實に我財界に於ける美しい記録である、是れ専務取締役柴田貢氏の腕と頭胸の働きが然らしめた結果であらう、氏は三十垂々まことに動的の人物である。

□確實なる九州商業銀行

—— 商工業者の重要機關銀行 —— 頭取は縣下の富豪菅慎雄氏 ——

株式會社九州商業銀行は元第三百三十五國立銀行と稱してゐたが、明治十二年四月熊本縣宇土町に設立し同廿九年九月國立銀行營業滿期際し私立繼續の許可を得始めて九州商業銀行と改稱したのである、當時資本金四拾六萬圓とした同年十月百五拾萬圓の増加を爲して熊本、博多、佐賀、久留米、大阪、來氏、柳川の各地に支店を設置して旺んに營業を擴張し同三十二年五月市内紺屋町(今の肥後農銀營業所)に新築移轉し愈々益々隆盛を致し預金實に二百萬圓に達したる美事なる記録を持つてゐる、同三十三年四年の交、一時全國を風靡した經濟界の恐慌に際して各支店の金融の操縦頓に不敏は止むなく一時支拂を停止するの悲運に遭運したのである一盛一衰實に本行の沿革史は肉あり骨ありの感がある、尙頭取上羽勝衛氏の辭職以來小山改藏、岡崎唯雄、川野如矢、東一安等の諸氏が頭取となつて善後策に盡瘁する處があつた同三十七年十二月松本泰吉氏専務取締役に就いて大に基礎を強固にし三十九年七月松本清三郎氏代つて専務となる越へて四十三年七月友常毅三郎氏同行の新舊株の大部分を買收して大正元

年八月頭取となつたが不幸世は諒闇に悲しみ經濟界亦不振——越へて三年七月縣下打つての富豪菅慎雄、弓削和三兩氏の友常氏の株を買收して愈々菅氏頭取に就いた市内紺屋町に新築移轉したのである、是れ最後の改革である恐らくば最後の刷新であらう本行の株式は今や市内有力なる實業家と郡部地主資産家に新株主を得て全く強固な基礎を築いた事は只に本行の幸のみでない我商工業者の爲め慶ぶものである營業は専ら商工者の便宜は勿論米穀に對する荷爲替、米券に對する貸出商業手形の割引を主とし新に開始した勸業債券割増金付三年積立預金は時勢に投じたるもの如く一般預金と共に漸時増加の趨勢を示し居る、本行は舊態を然々脱脚して益進向上展達の新生面を開いてゐる新得意の増加亦著しく地元商工業者の尊重甚しく全く機關銀行である、本行の現在資本金は參拾萬圓であつて諸貸出金は五拾萬圓、諸預金參拾七萬圓である本行の獨占舞臺は今後であらう、專務取締役兼理事は財界巨人の山田鉛五郎氏である。

□株式會社◎肥後農工銀行◎

—敏腕なる支配人林千八氏—

肥後農工銀行は明治卅一年八月一日の創業である一般農工銀行たるの事務を執ると共に日本銀行の代理店として勸業債券募集又は代理貸附等を爲す、資本金は百四拾萬圓である市内紺屋町に建築されたる宏大なる一構へである頭取は内藤正義氏で支配人取締役は林千八氏である林氏は現に市會議長であり商業會議所會頭であり、當市重要な椅子にありて至つて敏腕の聲高き人物である、當行の隆運も亦同氏の爲めであらう因に本行利息の割合は定期預金六ヶ月以上五分五厘一ヶ年以上六分二ヶ年以上六分五厘當座預金日歩一錢二厘、

□株式會社◎他◎田◎銀行◎

明治廿七年の創立、頭取は内藤正義氏である市外春日町に在り資本金二十三萬七千五百圓(全拂込濟)

第二節 諸銀行、貯金會社

□福◎築◎貯◎金◎と◎大◎福◎榮◎銀◎行◎

福榮貯金株式會社は明治四十五年の創立である、本縣下此の種金融機關の嚆矢であ

る、當時現社長大塚齋氏、現營業部長門垣平米氏は主昌者となつて計劃し一般社會の貯金奨励と同時に小資の金融機關として出現したのである、かるが故に縣下幾百萬の大觀迎を受け漸次順調の發達向上進展を爲し次に支店を縣下各樞要の地に設け出張所を開始して昇天旭日の勢にて進歩繁榮し、現在會員は實に三萬余申込金額三十萬圓以上を算して非常なる展達と營業の堅實を致し每期配當金一割五分以上の比較なき好配當を爲てゐる、「福榮と大福榮の事業」大福榮銀行は大阪に本店を有し、最初大福銀行と稱して營業を開始してゐたとして當地福榮貯金株式會社に支店を設置したのである福榮に於ては早晚銀行として營業を爲す計劃であつたのと時勢的法律は是を要求して居るので實に幸機會に遭遇したのである茲に福榮は大福の貯金と銀行の重役連の談は整ひ福榮貯金の取締其他重役は銀行の重役となり銀行の重役は福榮の取締役として入社したのである、愈々資本金壹百萬圓に増資する計劃である、著者は愈々本行が壹百萬圓の増資を完成せんか、時勢に共ふ一大金融機關として十二分の任務を果たし我財界營業に一大新記録を造る事を疑はない、社長であり副頭取である大塚齋氏は奮闘

家である本社本行の柱堅であり花形役である營業部長は濟界に非凡の聲ある門垣平米氏其人である

同氏は曰く ◎貯金會社の事業は別に法律上何等六ヶ敷拘掣なく活動の範圍廣漠であるが要は當事者の能力至誠如何に依つて盛衰するものである、當社は茲に覺るありて一意専心至誠大に奮進してゐるのである、元來本事業は一般商工業者の要求であり時勢に最も適合したものだと思ふ、抑も現今の文化向上の時に當つては薄利多賣主義で無くては困難である尙當事業は特に然りと思ふ、即ち五十人を一組とし十組又は二十組……を營業日數より割出見ん乎一日又は一ヶ月の利益實に微細なものである、かるが故に會員をより澤山に勧誘する必要が起るのである

◎貯金會社は時勢適合の營業である爲めに社會人士の大觀迎の下に進歩發達隆盛を致したのであるが、法律界の一問題として裁判所は銀行條例違犯と見做して起訴したが其後抗告の結果は會社側の有利に歸した事等は實に經營者の忘れ難き事である、然るに當業務は銀行同様の業躰なるに法律は是れを監督するの一定の法規なく要は法律の不備不完を敢て叫ぶ者である、更に税法の欠陥を甚しく遺憾に恩意する者である云々 (所在地市内新市街)

□共榮貯金銀行熊本支店◎

株式會社共榮貯金銀行は明治三十三年二月の創立、資本金壹百萬圓、本店は東京にある營業は世にあり觸れたる貯蓄銀行とは其方法を異にし定期貯金の如きも三年貯蓄不動貯金等類似のものとは全然別種の方法に依つて預金者には割善き利息を附すると共に株主に準じて利益配當をも爲し又資金入用の場合には簡便なる手續の外に貸付けて居る所謂、理想的貯金銀行である實に其の營業振りの誠實眞摯を旨とし營利に囚れざる一種の信條に據る所、深く推知するに難たからず本社は普通銀行一般の業務と共に其特別銀行たる營業種目として定期預金、小口當座、貯蓄預金、定期貯金等を取扱つて居る、本行は株主への配當年八厘以上に達する時は前決算期に於ける定期貯金總額に比例して満期に達したる貯金者に此の利益配當を全時に行つてゐる、是れは毎月遅滞なく貯金した人達に限つた特典である、定期貯金は之を壹百圓貳百圓參百圓五百圓壹千圓の五種として月壹回又は三ヶ月一回半年一回一年一回等預金者の都合にて預金をすれば三年後には千圓とか百圓とかの纏めた金額が元利金と利益配當と同時に受取られる様になつてゐる、尙貸付と辨濟に就ては短期貯金を五ヶ月以上遅滞なく預けた

人達が借受希望の時は二名の連帶保証人の立合にて各定額金は易々として借られるのである、本行は目下三十五の支店四十五の代理店を設置して盛に營業をやつてゐる熊本支店は大正三年二月の開店である支店長は近野猛氏である爾來順潮の發達と共に山鹿、八代、に代理店を開店して縣下に益々便益を圖つてゐる(所在市内東唐人町)

□ 戊申貯藏銀行熊本代理店

株式會社戊申貯藏銀行は本社を東京に持つて市内上鍛冶屋町に熊本代理店を設けてゐる、主任は陸軍豫備大佐長江虎臣氏である氏は頭腦明晰亦良く青年を統一して對社會的に發奮する熊本に是非居なくては叶ぬ有爲な人物である、大正三年七月現在の任に就くや漸次營業の發達向上進歩は氏に依つて益々擴張され幾多の市内各銀行代理店を凌駕して唯一至便の金融機關として信用が厚い元來本行は戊申詔書發布と同時に其の主旨を帶得して創業したるもので所謂國民の勤儉貯蓄の獎勵を其機より帝國民に徹底させ克己の精神を鼓吹する赤志から湧き出でた信用淺からぬ貯金銀行である、新年元旦三日の外日曜日と雖も開店し夜間も晝間同様に營業を營んでゐる、實に當市發展

につけて益々本行の營業は擴大する事を切望し更に期待する者である

□ 九州貯金株式會社

九州貯金株式會社は市内新南千反畑町にある青ペンキ塗りの一構へである、熊本に於ける純貯金株式會社として一般社會の人達が既に定評し且つ信頼してある理想的の會社である市内に多くの會員を以て盛に營業地盤を擴張してゐる、現専務取締役は寺田亥三郎氏である氏は至つて眞面目な努力家である、熱意營業及經營等に朝夕頭胸をを加減して益々本社の發展に盡し會員の募集に努めてゐる、本社の前途は實に慶ばねばなるまい寺田氏は實に動的の人物である、幸に健康なれ

□ 本所銀行熊本代理店

株式會社本所銀行の本店は東京兩國橋畔に在る熊本代理店は中唐人町の當市打つての目ぬきの場所にある創業年を経る十七全國に五十有余の代理店を有してゐる、本邦据置貯金の嚆矢として眞率な營業方針と摯實な經營は社會の各階級に認識せられてゐる、同行は専ら勤儉の美風を養成して克己の精神を鼓舞し、併せて獨立の氣概を激勵

して努めて射倖的行動を排斥して、中流以下の金融機關に至便至利を圖つてゐる特に國家の中堅である中産社會の各種事業には對人信用を以て放資して盛んに産業の發達を圖つて生活の向上を期してゐる、其の立派な美しい主旨正しく現代の理想的模範的貯金方法である事は「大正の熊本」に特に紹介して價ひあるものである、熊本代理店は開店後僅かに二週年であるにも拘らず潔約高已に五拾余万圓に及んで基礎益々堅固を加へてゐる、殊に現主任琴谷柳三郎氏は中産以下の農工商者が唯一の金融機關として信頼せる頼母子講が不完全なる事を歎じて是等の弊を救済すると共に同行の主義綱頭の献身的宣傳を圖つた爲め、愈々本店の認承を得て團體貯金者に對する特種貸付の法を設けて商工業者の業務擴張資金乃至、農家の協同購買資金等に低利に放資して償還期間の如きは團體の希望に應じてゐる社會多くの金融機關中優に一頭地を抜いでゐる理想金融法である、琴谷主任の頭腕亦賞すべし。

□ 寶壽貯金其他銀行

寶壽貯金株式會社は市内紺屋今町に建つてゐる、熊本貯金會社の代表的なものであ

る確實信賴併せ得てゐる、目下會員の多き事亦他貯金銀行を凌いでゐる、其他東洋貯金及不動の諸代理店がある

其他郡部に各重要な株式銀行がある今附記して置く、玉名の「株式會社玉名銀行」、植木の「株式會社植木銀行」、隈府の「株式會社隈府銀行」及び「株式會社菊池銀行」其他「株式會社小國銀行」は阿蘇小國村にある、「株式會社南郷銀行」は阿蘇高森町にある尙御船町に益城銀行、小川町に益南銀行、佐敷町に葦北銀行、水俣町に水俣銀行、天草本渡に天草銀行の設設立せられて本縣下の金融機關として便益を圖つてゐる。

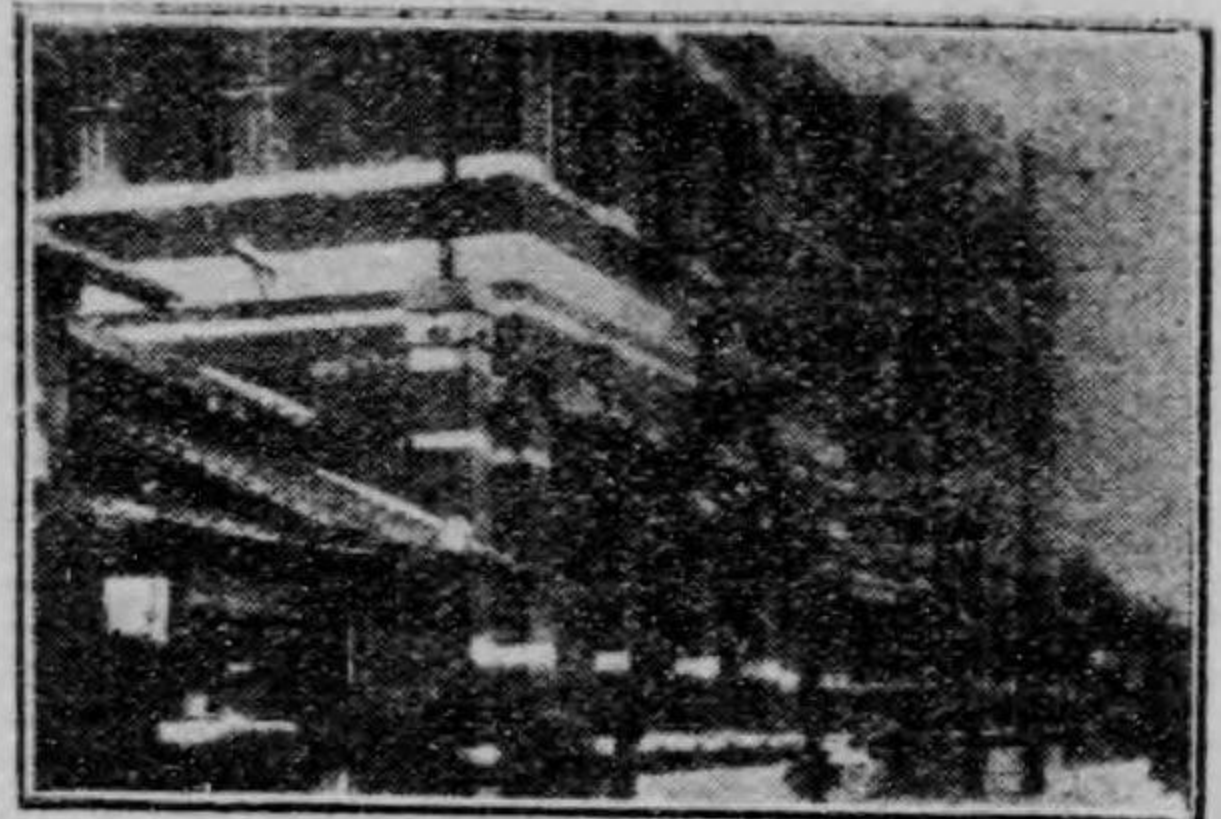
第三節 諸會社 組合保險

諸 會 社

- 熊◎本◎電◎氣◎株◎式◎會◎社◎

實業の發達と共に諸會社の興起する事は自然の勢である、殊に征露以來更に歐洲大禍亂の勃發するや世界の膨脹と共に一層其興起を多からしめて來た今各種協會及實業第一、二、記載の外の諸會社組合保險事業を紹介して見よう

明治二十七年熊本城の一角既橋の袂に株式會社熊本電燈所を設けた、是れ實に熊本



所務事電水社會式株氣電本熊

に於ける電氣事業の始めである、明治三十七年六月市外本山村に移轉し明治四十二年七月電燈所の解散の後を承けて今日の熊本電氣株式會社が起つたのである、其の後益進展達社運益々隆盛を來して大正二年度下半年期營業報告書を通して見ると、蒸汽機關四臺にて八百五十馬力を出し發電機四臺を動して五百五十キロワットを起してゐた、之に對する市内外の需用者は六千五百七十五戸二萬五千五百六十二個であつた、電力の供給は合計八十二個百七十キロワットであつたが、而も社會の進運に伴ひ各面の需用は益々増加して到底此需用に應じ難いので茲に於てか黒川の水力を應使せんと計り細川侯爵家安田一門其他一般の投資を募つて即ち二百萬圓に増資し、阿蘇郡なる黒川の水を導き菊池郡立野に宏大な發電所を設け大正三年三月中旬諸般の工事を終へ愈々四月一日開業する一大機運を迎へたのである、該發電所は落差八百十尺に達して九千二百二十四馬力六千キロワットを起してゐる斯る大規模

の發電を有する電氣會社は我國に多くの比類を見ないのである、大正三年下半年營業報告を通して其の營業の概況を見るに市内外四十一ヶ町村の供給區域に對して電燈數各燭混合五萬九千二百六十二燈であつたが、爾來區域全部に配電支線を延長し各郡部の要求に應じて今や七萬四百八十八燈を算してゐる、尙遂次増加を見るは本社の前途を豫想せしむるに十分である、社長は安田善三郎氏で取締役には安田善之助高橋長秋紫藤猛清浦保恒菊澤庸の各氏、營業部長兼技師長は頭腦明晰なる工學士岩橋武之助氏を招聘してゐる、著者は茲に本社の柱堅たる營業部長岩橋氏を紹介して置く氏は東京北豊多摩の生れ三十六年東京帝國大學工科學を優等に卒業し直に土佐電氣鐵道株式會社に招かれ、三十九年朝鮮總監府通信技師に榮轉し大に滿韓の工業界に資する處が深かつたが、四十二年波佐見鑛山作業部長に轉じ、大正元年八月本社營業部長兼技師長の席に据つたのである、氏は實に敏腕骨達良く左右の理解を行くばかりに爲し部下統一に妙技を有し、營業の擴張に亦巨大なる秘訣と善良なる策略を具備せるに於ては現職程氏に至當な事業は鳥渡あるまい、氏の益進向上發奮努力は夫れ當社の展達進歩

隆盛となると言つて過ちはない、今後同氏の腕の乗除頭胸の加減では輕鐵も電鐵に變更さるべきは易々たる事であらう、大正四年四月廿五日市内紺屋今町に宏大雄美の水電事務所を建築し一般社會の益便を圖つて居る。

□ 新築せる共益社鐵工所

株式會社共益社鐵工所は市外大江にある縣立工業學校と相對峙して我工業界に躍動してゐる事は既に知る事である、著者は今新らしく大江なる土地と文學士の稱號に深い印象を湧出せずには居られぬ、此地は曾て一代の文豪が義塾の一小陋室で新時代の要求する新文章を書いた處である史的關係の地を卜して鐵工場は起つた、社長中津氏は文學士ではないか實に感慨一層深くなつた、役は文學を以て世に立たず工業者として鐵槌を揮つてゐるのである文學必ず國家に益なしと言はぬ



新築せる共益社鐵工所

が彼は直接主義である、國利速進主義である彼は文學を論じてるよりは鐵槌を揮るの

が直接的の國益であると信じたのであらう、而し一方圖書館長の椅子に腰を据へて居るからには仕うしても彼は文工[◎]の聯絡が富國増進と信じたのであらう、明治四十四年資本金拾萬圓を投じて株式組織とし愈々吉田隆藏氏を技師長に据へて此の工所は勇然として起したのである、當時の設備は決して大なりといふ事は出来ない即「人肥へたるを以て尊とからず、うごの大木亦何等の用を爲さず」で規模小なりと雖も其組織、職工の待遇法に於ては、恐らく我國工場の模範として激賞するに餘りあるものである大正二年二月工場の落成を盡げ營業を開始するや、昇天旭日の進歩發達向上を致し従業員職工五十余徒弟二十余其他技術者事務員等計八十以上に達したのである、工場内は鑄造、鍛鐵、木型、製罐、機械、仕上の各工場の外製圖室、寄宿舎等の建物主製品としては、水力電氣に屬する諸機械、捲^{ワインチ}機、石油乾燥機、ポンプ類^{殊にヒューガルボンブ}、印刷機、蒸汽機關、精米麥機、吸入瓦斯發動機、石油發動機等である、然も其製品が如何に優良確實であるかは既に世評有る事著者の言を要せない、尙職工、徒弟養成に深く意を用ひ克己團なるものを設けて総べての修養を爲し、經濟上の安心を與ふ

る爲めには貯金奨勵法を設けてある、同社の新面目なる態度は實に爲國家慶ばねばなるまい、創立日淺き大正四年二月四日の沸騰黒煙天を焦し猛火同社を呑むるの災禍至る、悲しき運命の潮來つて洗ふも同社は兼ての設備遺憾なく完整せるを以て休日三日再び歩武堂々從來同様の營業を始め傍ら敷地を擴張し同四月上旬新築工事に着手し全部建築材料は鐵柱鐵板見るからに其雄姿壯嚴前途が益々思はれる、八月上旬全部落成の見込である、見よ、アスファルトの壯觀、五棟の建築、モーターの響き地下に震ふ、

社歌[◎]「血潮の戦今やみて、平和の戦たけなわの、世に大任を擔ひつゝ生れ出でたる
共益社」を口々にハンマーを揮ふ作業者の顔の生々敷しき汗、如何に尊さよ
嗟吁、涙と熱と血に社界各所を増補する人生の指導者よ！救濟者よ！人格者よ！著者は傍にあつて讚美謳歌の聲を吞まない、因に本社と兄弟柄として、「共益社洗染所」同社電氣部がある更に、「共益揚水株式會社」の創立を見既に縣下は勿論福岡、宮崎、大分の諸縣に於て灌漑の大施設は早くも其全きに至り茲に益々隆連發展す可きは期して疑はない、事務所は市外大江にある。

株式會社 鐘淵紡績熊本支店

同工場は本社を東京に營業部を神戸に置いてゐる、資本金壹千七百餘萬圓全國二十ヶ所に支店工場を有してゐる、絹綿紡績五十萬罐力織機五千臺に達し規模宏大殊に救濟獎勵、教育慰安等職工優待に關する諸般の設備も完備してゐる製品の優秀なる亦天下に冠たりである、市外春日町にある熊本支店は精紡機壹萬餘罐男女職工約四百を有してゐる、同社の支工場としては最少の部位にある由なるも其建築物の宏壯なる、諸設備の完全せる等は當地工業會社中一異彩を放つてゐる、今構内諸設備を見るに工場内機械の完備せるは言ふ迄もない工手寄宿舎の清潔實に至れり盡せりである、普通女學校の到底及ばぬ所であらう、病院には専門の醫看護婦等が常備されて無料治療を受けてゐる、工手日頃の勞苦を慰る爲めの娛樂堂、其他専門學校の教師、裁縫教師等尙生花作法まで業務傍ら教授してゐる實に本工場は總ての點に於て、工手の將來の幸福に向つて研究しゐる工手亦幸である、支店長は遠藤宗六氏である氏は働き家である、頭腦明晰よく社會の要求に順潮して行く頗る熱意な人物である、本支店の向上發展亦

氏の腕胸にあるなん。

内國通運株式會社熊本支店

内國通運株式會社は江戸定飛脚問屋仲間の發起である、我國最古の運送會社である慶長の昔江戸開府當時に發勅し主として書信の遞送を營んで側ら大小貨物の運送を掌り爾來明治維新に至るまで徳川幕府と共に消長し連綿として本業を承繼して來た、明治五年私會社を起した之れが陸運元會社である、後内國通運會社と改稱したのである本社の沿革史は實に舊幕を偲びて面白く亦價值あれども大正時代に左程の要を認めない、内國通運熊本支店は言ふまでもなく市外春日町にある、出張店を市内各所に設けて居る當社創立の當時は交通機關殆ど草昧の時代に屬して汽笛未だ國內の水陸に響かなかつた、然るに今や鐵路縱横し其延長六千哩航海噸數一百五十萬之れ當時に比して實に隔世の感がある、その間に於ける同會社の營業亦變遷移堆せる見るに値ひするものがある、即ち創立當時は政府の保護であつたが獨立自營となつた事、不整賃金を全

國の賃金一途に出づるに及んで手数料制度を取る様になつた事は著しき變化である、今や本社は社報を發行して業務の通信を敏活にし百二十五萬の資金と五十六萬余圓の積立金を擁して、従業者約一千名二十九の支店六十九の荷物取扱所を有つ昌運を見るに至つた、本社の營業は經濟界の盛衰に伴ひ時に多少の消長はあるが概して調順に發道して來た熊本支店は先年建築し支店長は生野惠太郎氏である、明治四十二年六月當支店長に轉じ拮据困勉よく業務の擴張に盡し今や熊本に於ける運送業の獨占舞臺となつて居る。

□通運業としては他に、山本、八坂、田村等の敏活速進確實併せ得たるものあるは、熊本の慶ぶ可き象であらう。

□熊本機械製氷株式會社

熊本機械製氷株式會社は市内練兵町にある、明治四十年の創立で途中一度火災に罹りたるも今や依然として販營は熊本は勿論門司、長崎、鹿兒島に及んで隆盛に其の營業を擴張してゐる。

□兩製糸株式會社

肥後製絲株式會社は市内坪井町にある、明治三十九年の創立であるが目下機械七臺釜數百七十枚婦數人男工八人女工二百余人を雇用して居る、最近の年産額は生糸四千貫屑絹八百貫である繭の使用高は三年六百三十五石以上に及んでゐる。

熊本製絲株式會社は市外大江村に在り明治三十五年の創立である、一ヶ年間の生産額は生絲三千二百貫屑糸八百貫以上に達してゐる、使用機械は五臺釜數百六十余である、男女職株二百を數へる。

□熊本塗器合資會社

合資會社熊本塗器製造所は市外春日町にあり、支配人は菅沼勝英氏である支配人菅沼勝英氏は塗物本場たる静岡縣の出身であつて夙に斯業の學術を修め東京に於て教鞭を取る事九ヶ年偶々飽託郡徒弟學校の聘に依つて全校に教鞭を執られて居たのを明治四十一年本會社から聘して支配人とした入社した敏腕家で將來ある人物ある。

□肥後酒精株式會社

肥後酒精株式會社は市外出水村にあり明治四十年に落成したものである、逐年事業發達し最近年度に於ける成績亦非常なるものである生甘藷百二十萬斤切干甘藷百十六萬斤麥芽七百四十石の原料から酒精三百五十石酒精余有飲料七百石燒酎三千石を出した、其價格は優に二十八萬圓以上に達してゐる、前途同社の爲望なる今より想像するに十分である。

□九州汽船株式會社

九州汽船株式會社は明治三十七一年十月の創立である、初め肥後汽船株式會社として市内米屋町に設けられたが、現在は之れを宇土三角際崎に設けてある、専ら九州各縣の海上交通は重に本社に營業である。

□肥後製蠟株式會社

肥後製蠟株式會社は明治三十五年五月株式組織として資本金拾貳萬圓を募つた、目下男女職工四十人で一ヶ年間に櫛實百九十一萬四千余斤以上を原料として、生蠟三十二萬余斤價格五十萬を産出して居る、市外出水村に建築され日進隆盛社運益々向上し

て行く、文化三年の頃八代郡豊原村に櫛方出會所と稱する製蠟所を新設して役員を派して遠く葦北郡水俣の邊に至るまで普く櫛樹を植へしめた、仲秋霜白きの候熊本八代間を通過する旅客は車中路傍の畦畔に二月の花より紅なる一帶の櫛紅葉を見るであらう、之れが當時植栽したものである、肥後製蠟は實に源泉を遠きに發す、

□熊本瓦斯株式會社

明治四十三年の創立である、市外春日町にありて熊本電氣と相對持して盛に市民の便益を圖つてゐる、最近調査に依れば需用戸數實に數千戸、孔口數六千個以上燈用數五千個以上熱用六百個以上動力二十七馬力を有つてゐる

□松村鐵工場

市外本山村にある、專賣特許松村式無點火石油發動機の發明者松村三善氏の經營である、現今既に内地は勿論遠く朝鮮臺灣よりの注文製造に殆ど忙殺される有様にあり

□各種商工業會社

市及び市附近に於ける重なる商工業會社は

名 稱	所 在 地	創 立 期	資 本 金
九州製菓合資會社	中唐人町	明治二十九年	三、〇〇〇
熊本ラムネ合資會社	米屋町	同三十二年	二〇、〇〇〇
熊本葬儀株式會社	櫻町	同四十二年	四、〇〇〇
合資會社御船精米所	市外春日町	同二十九年	三、六〇〇
合資會社長野製種組	市外大江村	同三十一年	一、五〇〇
合資會社熊本漆器製造所	市外春日町	同四十年	一〇、〇〇〇
熊本海產合資會社	新町	同三十一年	一八、八〇〇
九州洋紙合資會社	吳服町	同三十七年	三〇、〇〇〇
熊本煙草元賣捌合資會社	魚屋町	同四十一年	四〇、〇〇〇
大阪灰九合資會社	鹽屋町	同三十七年	二、五〇〇
合資會社山内商店	新町	同四十三年	五〇、〇〇〇
肥後紙合資會社	魚屋町	同四十四年	六、〇〇〇
關西紙合資會社	吳服町	同四十四年	四、〇〇〇

諸 組 合

□ 肥 後 米 輸 出 同 業 組 (市外春日町)

我肥後米の調製俵裝及枘量を改善一定して益々之れが聲價の發揚と販路の擴張とを

謀るを目的として明治三十一年六月之れを組織して組合員は米穀商輸出米運送業者地主の三者を合し正副組長評議員以下六十余の役員を置いて、縣補助數千圓を受けてゐる、縣下樞要の地五十余所に輸米検査所を設け設立以來の成績誠に驚く可く、販路市場の擴張甚しく實に斯業家の便益と、發達を圖つて居る、げに本組合の如きは洵に樞要の機關と云はねばなるまい。

□ 熊 本 茶 業 組 合 聯 合 會

茶業の改良發達を企圖し粗製濫造及販賣の弊習を矯正するを以て目的として、各郡市に茶業組合及取締所を設けたるは明治十七年四月廿日であつて、全二十一年一月廿五日規則を變更して取締所を改めて聯合會議所と稱して今日に及んでゐる。

□ 熊 本 洋 服 業 組 合 (上通丁)

市内上通町に事務所を置いて熊本爾來の洋服同業者から組織して居る、同業組合會員の技術は頗る精巧にして常に流行の新趣向に後れざる様に期して居る、縣下は勿論の事縣外からの注文も多い、毎月五日に徒弟教育として佛教青年會等にて名僧儒者

の訓話を催して居る、即ち同業組合講演會と銘名してゐる本組合の幹事は伊藤喜三郎山代彦八、宮崎彌一郎、吉田仙次郎、岡本政平、辰本平市、笠次郎等の各氏である。

□ 熊本靴業組合 (上通町)

軍隊各官衛諸學校等の需用は、勢市に於ける製靴事業の進歩を促して來る、即ち一ヶ年間の産額四萬六千五百三十三圓に上つてゐる。

□ 熊本傘同業組合 (立町)

市内熊本傘同業組合から製造する傘は、堅牢優美かるが故に筑後方面を始め他府縣に輸出するものが多い、主なる製造者四十余戸を以て職工は男女を合して百人に近い一ヶ年の賣上高は六萬五千圓以上である、以上は和傘の分なるが洋傘の製造も大に盛んとなつて其の産額は五十萬圓以上を越へてゐる。

□ 熊本指物組合

箆筒火鉢等各種の製造は近年盛んに發達して殊に下通町から新鍛冶屋町を経て、西通町に至る一帯は當業組合者が軒を並べて盛に製造してゐる、一ヶ年の産額は十三萬

圓以上である、同業者の内杉龜齡、岡本等の諸氏模範とすべき組合員であらう。

□ 熊本菓子製造業組合

市内に於て菓子製造額は年々數十萬圓の巨額に上つてゐる、美味風味至つて高尚なる中にも朝鮮餡は一等を凌いでゐる、征韓の役加藤清正携へて彼地に到つて籠城の際之を以て饑を防ぎし由にて一名長生餡の名がある、福榮堂、園田、三好を三大菓子店と推す左に主なる實業團體を記載して諸者の參者に共して見る。

- 熊本茶業組合聯合會(物産館)
- 肥後木蠟同業組合(市外出水)
- 熊本醬油同業組合(鹽屋町)
- 熊本鍛物商組合(唐人町)
- 熊本宿屋業組合(洗馬町)
- 熊本湯屋同業組合(本莊)
- 熊本時計商組合(唐人町)
- 熊本履物販賣部組合(唐人町)
- 熊本古物商組合(電信町)
- 熊本彫刻商組合(古城堀端)
- 熊本染物業組合(洗馬)
- 熊本酒造同業組合(鹽屋町)
- 熊本各種卸商同業組合(商業會議所)
- 熊本市場組合(朝市場)
- 熊本清涼飲料水製造組合(全)
- 熊本吳服反物組合(鍛冶屋町)
- 熊本紙商組合(鹽屋町)
- 熊本寫真協會(物産館内)
- 熊本小問物雜貨商組合(上通町)

等であらう。

□ 保險事業

我熊本では生命、火災、海上の三保險會社があるが、何れも皆本店でない支店又は

出張所代理店である、其中総べての代理店支店出張所の模範として且つ代表的なものは、帝國生命保險株式會社熊本出張所である。

市内米屋町に建つてゐる、本社は實に一般社會の信賴多く確實なる生命保險會社として既に全國の代表的なるのである、熊本出張所開店以來本縣人の加入著しく、目下秋山鐵吉氏主任となつて益々營業の擴張を圖つて居る、火災には帝國火災、福壽火災等の代理店がある。

第十二章 各種協會

□ 熊◎本◎縣◎農◎會◎

本縣農會は從來組織せられ便宜上縣廳に於て會務を取つてゐた、明治三十二年二月農會令及同年六月の農會法に依つて組織を改め、三十三年四月一日事務所を熊本物産館内に設けた、郡に郡農會、町村に各農會があつて各農事の改良進歩を圖り相集つて以て本縣農會を組織する、縣農會は勿論會長に川上知事を推してゐる、郡農會長は之に准じて郡長を推してゐる。

□ 熊◎本◎商◎業◎會◎議◎所◎

商業上に關する萬般の事業を商議せんが爲めに、明治十二年熊本商法會議所を立てた、全二十三年商業會議所條例の發布と共に其の規定に従つて全二十五年七月更に熊本商業會議所を設けた、爾來年を経る事廿星霜、熊本の商業次第に發達進歩の勢を現したのも確かに本會議所の力多きに依る、初期の會頭は岡崎唯雄氏であつた現會頭は林千八氏である、目下役員七名所在地市内辛島町

□ 熊◎本◎聯◎合◎實◎業◎會◎

熊本實業聯合會は熊本の實業界の健全なる發達を圖る目的を以て組合したるものである、創立日尙淺いが其の好果は驚く可きものがある。

□ 肥◎後◎蠶◎糸◎協◎會◎

本協會は初期蠶糸業同業組合と稱してゐた、農商務省組合法發布の結果として自然消滅に歸したので更に便宜上明治三十一年七月本協會を設け全縣下の同業者を以て組織した、經費は會員の負擔と縣稅の補助とを以て之に満たし、而して今日に及んだの

である。

□熊本米穀取引所

熊本米穀取引所の沿革は頗る古い其の淵源は實に寶曆年中にあり、明治二十六年松永常喜外二十七人の連署を以て熊本米穀取引所の設立を出願して許可を得同年十一月從來の米穀市場を解散し財産の全部を舉げて之を取引所に譲り渡したのである、同月松永氏外三十二名は株式會社熊本米穀取引所設立の申請を爲した、十二月主務大臣の許可を得たので二十七年一月から營業を開始し以て今日に至つたのである、建築亦麗美宏大市内明十橋通に青ペン塗りがそれである。

□熊本織物協會

縣下機業の發達進歩を計る目的から、明治十一年七月の比織物同盟會の組織があつた後、幾程もなく織物協會と改稱した爾來年を経ること二十有三年此間本縣の機業家は種々の困難に遭遇して今日に至つたのであるが、今や本縣機業の名聲漸く天下に知られ良好の織物を出す様になり、本協會も赤益々盛んとなつてゐる。

□熊本縣五二會本部

織物、陶磁器、金屬品、紙類の五品及び雜貨敷物類の二品は我國重要な物産であるから、其の業の發達隆盛を計り七種業者を合同し打つて一九とし進んで廣く販路の擴張を計り、退いては粗製濫造の弊を去り以て之れが發達を企せんが爲め明治二十七年始めて前田正名氏の唱導に因つて五二會の設立があり、本縣の有志亦是れと意見を同ふし直に呼應して熊本五二會を設立した、時明治二十九年十月であるとして今日に及んでゐる、市内鹽屋町に本部を置いてゐる。

□熊本商工協會

熊本商工協會は本縣の商工業者の氣風を改善し併て商工者の親睦團結を圖りて益々商工業の發達を圖る目的から起したのである、發起人は伊藤喜三郎、泉増太郎、細谷久一郎、轟仁三太、小山令之、小山申壽、渡邊悟市、吉田隆藏、横田芳太郎、高田太吉、田代群太、中津親義、永井三之助、魚住廣八、國武猪太郎、兒玉氏信、後藤末士郎、寺田豊記、三穗野喜作、宮原虎彦、柴田貢、杉龜齡等の諸氏である

第十三章 熊本縣物産館

熊本縣物産館は縣立圖書館と相隣して建つ一構へである、明治二十八年十月の創立であつて始め觀聚館と稱して居た、明治三十五年物産館と改稱した農工林水鑛等の諸産其他雜品約八千點を陳列して公衆一般の縦覽に供してゐる、一部に縣内名産の依託販賣を行つて全く博物館式であつたが、大正二年五月刷新を加へて階上を參考室として階下は全部商品陳列場として製作品、化學工學、染色工品、飲食品、農産林産、水産蠶絲等の製作品の依託販賣を爲る様になつた。

第十四章 諸營業の榮

第一節 代表的醸造場

『銘酒』と『醬油』

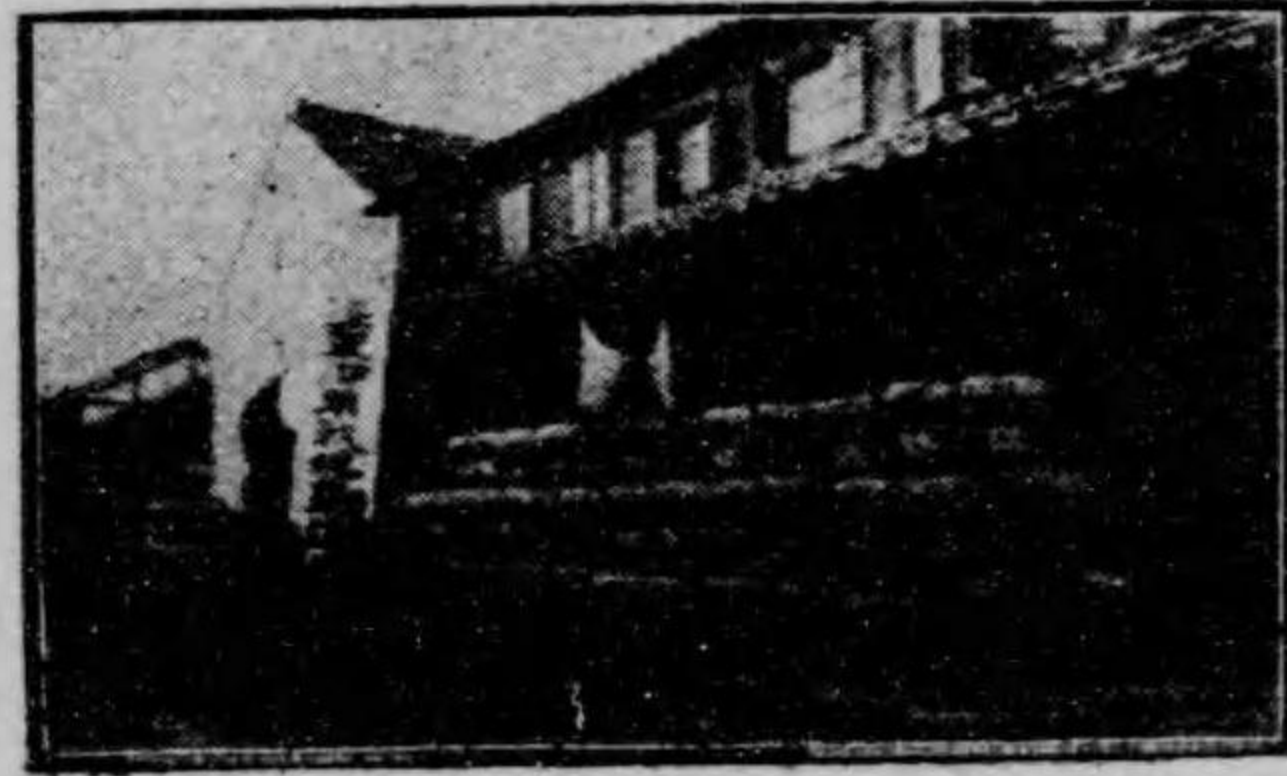
□熊本酒造界□ 本縣は所謂肥後米の産地であるから古來海内に知られたのみでない、水質亦頗る良好で先天的酒造税法施行以前から著く發達して、其の石高十萬石を超過してゐた然し本縣では一種特別な醸造法行はれ所謂、赤酒と稱するもの本縣の特

産として縣内冷く需要せられ今日に至るまで尙此の赤酒を飲用するの習慣がある然し交通機關の發達と同時に商業の方法一變して容易に有無相通するに至つた時は、赤酒の需用は漸次減少し醇良な他縣の清酒が進入し、其の嗜好に投じて縣内の需要は總べて他縣の輸入に係るの觀がある、於是乎、本縣の酒造界は時代の要求に余儀なくせられて自ら革新せなくては叶ぬ様になつた、蓋し熊本酒造業の發達は醸造家其人の熱意奮闘を更に一層待つものである、千石以上の醸造家は魚住廣八、西岡壽一郎、吉村彦太郎、山代熊吉、高田又七、磯田平藏、本田喜久八、増永忠三郎、杉本廣次、下田理平太等の各著名士位であらう。

▲熊本醬油界▼熊本縣の醬油高は一ヶ年五萬石、此の税額約九萬圓である戸數人口に比例して優に九州第一と稱するに足るのみでない、石高の増加は實に著しいものである、本縣産出の醬油は品質良好で優に關西大である遙に關東の野田銚子と相對して、正しく東西の兩雄たるの觀がある、今千石以上の主なる醸造家を擧ぐれば、玉城常八、上田彦次郎、古莊政吉、西尾清太郎、加藤儀一、高木三藏、片山伊太郎等の諸氏であらう、尙幾多の醸造家は年々増加して尙更に前途が有望である

□完備せる清酒醸造場

▲欧州動亂に「都長」の躍動▼ ▲百折不撓の精神と人格▼



青島士氣舞榭都長

富の戦争は實業が本位である就中商と工とは富力増進の中堅である、今や我國の商工界は一新時期を劃すべき氣運に偶してゐる、此の時に當り昇天旭日の勢で光彩陸績榮譽併せ得たる熊本清酒界の泰斗は取も直さず、魚住廣八氏の醸造清酒『都長』『天主』『正宗』である、著者は實は魚住氏を此の欄にて紹介したくないそれだけ氏は新時代要求の氣鋭新進の人物で、崇高なる人格と嚴な權威とを備へ實に熊本實業界の代表的人物であるからである、氏は當年三十歳の青年意氣亦龍山青雲の概かある、「都長」の好評愛用と共に氏の人爲にも世人頗る敬意を捧げてゐる、氏の醸造場は市内吳服町にある現熊本稅務監督局鑑定部長野白氏の設計で蒸汽の

應用遺憾なく設備され、二十五馬力のボイラー壯嚴に裝置され、三臺の今橋式自動數島精米機の建設裝置亦、美事と謂ふべし、エンペロール濾過機數臺を應用して化學工學理論と實地を融合した理想的醸造法は直に「都長」の品質の如何に優良なるかを實証するに易い、販路の如きは縣下は勿論九州中國より臺灣朝鮮に及んでゐる、名譽賞の如きは各共進會、博覽會に於て優等金牌數十余個を得て榮譽併せてかんばし、更に特筆すべきは「都長」の青島攻撃に躍動せし事である、征獨軍人と共に爲國家青島に向ふ「銘酒」は都長のみ、之れ一面肥後清酒界の功しと云ふべき乎。

九曜正宗

市内米屋町西岡壽一郎氏の醸造銘酒である、其の品質優良拔群からして大に名聲を博して居る、見よ！鐵道管理局指定構内賣品の清酒無量幾十種の中に、優等金牌を得たるは只九曜正宗のみ又そが名譽を叶ばん

□熊本醬油界の重鎮

▲肥後醬油界は水由印の天地▼

熊本の不製産地に獨り製産額の多く富力増進を計りつゝあるは勿論、醬油醸造業で

ある、然も其の醸造が近年著く進歩發達向上し品質優良恐らく千葉醬油と拮抗しても劣るまい、就中醸造元市内千反畑町上田彦次郎氏の水由印醬油は實に熊本醬油界の重鎮である、氏は最初上田源助氏の許にて祖先傳來の製油業に拮据黽勉してゐたが、氏の銳眼は早くも斯業の前途、頗る有望なる事を覺つて愈々意を決して、明治廿四年奮然斯業に従事した之れ今日の水由印醬油の第一歩である、一意専心あらん限りの全精力を傾注されたが因より單獨の經營それに加へて資力又豊かでない、一時は非常に苦々辛酸を嘗め盡したが氏の先天的の秀才と明晰なる頭腦は相待つて、不屈不撓の底の奮闘と周到用意の經營とは漸く成功に期し、明治三十一年の五二品評會以後毎年各縣各地に開設の各種博覽會共進會品評會に出品し、最高名譽の金牌を得其の數實に四十回の多きに達して居る、然も一千九百九年亞米利加シヤートル市開催のアラスカユーカン太平洋博覽會に於ては、頗る名譽ある大金牌を受領した、實に帝國の代表的醬油と云つても過言でない、明治四十五年には長くも、聖上陛下御買上の光榮を賜はるに至つた、殊に三十七年以來は同業者に卒先して最新式蒸汽機罐を据へ付け、新式麴

室を新築し専ら品質の改良に注意せし結果販路は遠く海外に及んでゐる、獨り上田氏の榮譽と云ふのみでない熊本醬油界の前途を祝せねばなるまい、水由印は大正博覽會に於ても最高級の大賞金牌を受領してゐる。

□因に同醸造所は實に清潔行き届き、味噌製造機の如きは頗る其妙を得この設備を爲るは九州に只上田氏のみ

模範的醬油醸造場

見よ、アスファルトの壯觀十棟の大建築

熊本醬油界の泰斗は云ふ迄もなく玉城醸造所である、今や熊本は農業本位から商業本位に移り更に工業時代に入らざるべからざる時代に際してゐる、於此時須らく同業者を超越し文明的化學機械蒸氣を利用し、研究益進を加へ奔電的に進歩發達向上して、驚くべき光彩を放つたのは取も直さず玉城常八氏である、今左に簡単に醸造所を紹介して見よう。

先づ何人の眼を引き付けるのは麥杓回轉器の敏活な働き振りであらう、今を去る七年前の設置目下更に

エルメターを使用し、自然的に麥を回轉器に送入すべく計畫中である、茲に特記すべきは模範的此の化學工學の應用に於て巧妙なる醸造法を發明せる攪拌運搬壓搾の自由自在な事である、實に蒸汽原動力の利川機械の完備至れり盡せりである、麥杪回轉器の設置場に隣して、機關室がある三十余馬力を保つ、コーニツシユ式汽罐が設置されてある是れ即ち蒸汽原動力發生の據在である、そして鐵管を以て第一第二第三第四の倉庫に聯絡されてある即ち鐵管はこんな要務をする、今壓搾機から送つた空氣はエヤデシ―バを通しセパレターの辨を排して鐵管に入り途中に於て三分して各倉庫に向つて流れ茲に始めて(必要に於て)バルブを捲ち適當に空氣の送入を終る、鹽水注入も之れと同一である、實に人工の實働に比して便益驚くの外はない、麴室の完備、煮豆法の敏速亦感心無量のものがある。

斯かる模範的醸造場から製出する醬油が決して劣る理がない、各共進會博覽會では公式審査の結果熊本は勿論九州の代表的醬油となつた、今一二の賞譽を記して讀者の參考に供して見よう明治四十三年第三回九州沖繩八縣聯合共進會に於て優等金牌大正三年東京大正博覽會に於て優等金牌こんな都合で每會最優等の首位を占めてゐる且つ宮内省の御買上實に氏の胸裡は躍れ將來が益々有爲である、現主常八氏は殊に頭腦明晰不屈以て努め自重以て自覺し、重ねて視察に余念なし其の販路に至つては縣下は勿論遠くは臺灣滿洲朝鮮に夥しく近くは中國四國九州各縣に供給してゐる、「因に今回の桑港大博覽會に於て大日本出品の首位を占めて優等金牌を得たる榮譽亦實に薫し

□銘酒「瑞鷹」の香り麗し

銘酒瑞鷹は飽託郡川尻町の吉村彦太郎氏の醸造である、慶應三年の創業明治三十二年現吉村氏父の業を繼いだ、爾來熊本は赤酒のみなりしが彦太郎氏實父太八氏大に覺る所があつて、杜氏を丹波から雇入れ器具機械を改良して盛に清酒の醸造を始めた、之れ本縣清酒の始めならんか其後醸造上の事に就ては、全部之が指導を稅務監督局技師に依頼して益進日歩盛に改良を加へたる結果、銘酒瑞鷹の名漸く天下に叫ばる、尙同酒は各博覽會各共進會等に於て出品度毎に優等金牌を受領して、榮譽併せ得て居る之れ吉村氏の熱心の然らしめたるならん、宏大なる醸造場見るからに一ヶ年三千石以上を醸造するを疑はぬ、蒸汽機罐を用ひて總べての便益に共して居る。

□マルコメ醬油醸造所

熊本醬油界が近時著しく發達進歩したのは全く加藤儀一氏の腕であらう、明治四十二年理想的麴室二棟を建築し尙麴室の前面に三十馬力のボイラーを裝置し、總べての人工總べての努力を削つてゐる、猶同醸造所には温室第八十五號まで裝置して速醸法



を行つてゐる、元來加藤家は祖父の時代始めて千葉の野田と拮抗して漸時天下の名産となつたが尊父の時に至つて彌々信々研究を重ね現主儀一氏亦不折不屈の精神は驚く可き進歩發達向上を得、今日の隆盛を見、販路の如きも遠く臺灣朝鮮、近く九州中國四國に及び縣下は無論である殊に、陸軍御用達品となり品質の如きは云はずもかな、各博覽會に於て公式審査の結果は常に優等金牌を得てゐる、

□ 銘酒「金白」醸造所

銘酒「金白」は菊池郡隈店町中山熊彦氏の醸造である、明治二十五年父の業を繼で酒造改良に意を注ぎ一意専心一般の嗜好に適する様努めたる結果、其後昇天旭日の勢にて社會一般に好評を博して來た、氏は明治二十五年菊池郡酒造組合を組織されたるや同三十四年同組合長となり同三十七年熊本縣酒造組合評議員となり、菊池郡酒造傳習所を同家に指定された、現熊本稅務監督局野白技師來つて改良を加へ漸次發達向上し

て今や本縣代表的の銘酒となつたのである、山中氏は明治四十四年十二月熊本縣廳の囑託に依つて福岡廣島伏見の各地を視察したる以後尙一層の改良を加へ別に申分なき最優等の銘酒を醸造する様に至つたのは決して理なしとは言へぬ、壯嚴なる十二棟の倉庫は二百六十余坪の廣濶たる屋敷に並んで見るからに、銘酒金白が尊い此の酒は各共進會及博覽會等に出品度毎に優等金牌を受けて居る。

△ 銘酒「菊源」と「眞」の好評▽

銘酒菊源は菊池郡隈府町小池マキ氏の醸造酒である、明治四十五年小池源平氏死亡の後を受けて益々改良、研究を重ね大に研鑽する處か深く遂に今日の大好評を博して來た、本酒は全國各共進會博覽會に於て三十余回の優等金牌を受領し、正しく本縣の「銘酒」として他縣に誇つて差支はあるまい、醸造所の清潔宏大實に模範と贊して善い「眞」は市外川尻町平野屋の醸造で、第十回全國特産品博覽會にて一金等牌を始め其他數十回の受領を得たる優等清酒である。

△ 正確◎ 妙技◎ の◎ 二寫◎ 眞◎ 館◎ ▽

九州一「九四一」の電話を据へ九州第一の寫眞館として、名聲を轟かしつゝある市内新市街の正木凱旋館は、九州第一の建築物熊本專支局と相對峙して市の中心點に位してゐる、破額底價にて軍人學生一般紳士紳商及階級に歡迎されて、妙技亦々大好評を博し優に熊本の模範寫眞館である、一は市内楠町なる下田寫眞館である、本館は先輩寫眞館を凌いで信賴確實併せ得、實に正木凱旋と共に當市の美しい寫眞館として紹介すべきものである、二館の前途は益々有望である。

△驚く可き新發明の「スキット」▽

蚊軍驅除法に就ては世界何れの國に於ても完全なるものがない、然るに最近新らたに蚊除劑の我國に然も熊本郷人間に發明された事は、爲國家榮譽であらうそも名稱は「スキット」である、市外清水村の吉川常彦氏を叫ばゞ、直に「スキット」の有難さを聯想させる位ひ原料は外國産より取りて香料亦美しい、この「スキット」は蚊軍の襲來を防ぐのみでない南京虫其他害虫一切の驅除に効果驚く程あり、「スキット」は液体クリム、狀劑、粉末劑の三種あり價格底廉であるから各階級に頗る觀迎されてゐるは當

然であらう、製造所は市外三軒町出切大日本ローヤル商會、八代鏡町中島裁之氏吉川常彦氏の共營である、吉川氏は元玉名郡長州町の人青年の時米國に渡り苦學十三年、學成り遂に前記の外數多の新發明を爲せし明晰な人物である。

第二節 特徴ある商工店

△「熊本の三越」越後屋吳服店▽

店主は常に語る「思ふに我が商店は如何にせば顧客を集むべき。如何にすれば顧客をして満足なる待遇するか、日没夜來研究する我商店は價格の低廉に品質本位に親切丁寧に遇するを以て愛顧の榮を伏して願望し飽迄も大正式に薄利多賣主義を實行する。生存競争々々吾商店は競争に先驅せん」と著者は答ふべし「行けよ而して試みよ」

現代の商店の心得ゆべき條件であらう、同店は熊本に於ける三越である、實際上價格も充分底廉で且つ時々の流行に遅れず店頭を麗はしく飾つてゐる、讀者試みに市内唐人町を散策せんか直に吾人の目を驚く許り「チャム」するは、取りも直さず大正熊本の代表的吳服店越後屋である、同店は實に店主を始め店員一同親切丁寧で低廉なる、正札只々顧客本位である商運倍々發展して信用益々深く前途はより以上に有爲である

△當代吳服店の模範柏屋▽

著者が言ふまでもない、東唐人町の柏屋と云へば熊本唯一の親切確實の吳服店として知らぬ者はあるまい、新流行の魁店高尚優雅なる各品揃ひ即ち越後屋田代屋と共に當代吳服店の模範として何人と雖も信用厚からぬものはない、目下益進して株式組織にせん計劃なる由とか。

△熊本著名吳服店田代屋▽

田代屋は越後屋、柏屋及最近非常なる信用確實併せ得たる、千徳屋と共に熊本に於ける著名吳服店として一般社會に定評ある處である、市内六間町にある豪壯な構へである、別に洋館を建築して四季折々の新流行を優雅高尚に飾つてゐる、確實廉價の發賣元として何人も先づ第一に指を同店に屈するのである、特に婦人間は好評を博して居る。

△安巳橋通の千徳屋吳服店▽

千徳屋事千場吳服店は創立左程古くは無けれど、最近に於て非常なる人氣を集め先

輩各吳服店を凌ぎて最早獨占舞台ならん昇天の勢である、目下増築中にて多分大典式前に落成の筈である、前途益々發展の余地が廣い。

△益進せる地金屋吳服店▽

市内上鍛冶屋町にあり熊本古來の大吳服店である盛にモスリンの小賣販賣を特に爲して居る、底廉確實、實に八木、増田、越後屋、柏屋の各商店と共に既に定評がある

△熊本第一の藤村洋品店▽

著者は當市に幾多の洋品店が並軒して居るけれども、薄利多賣の主義を實行して、人氣を得たるは藤村雜貨店であらう、見よ店頭を！顧客の心行くばかり同店に憧憬するを！

▲著名商店總まくり▼ 以上の商店の他に、坪井米屋町の赤松屋中坪井の鹽山兩商店等の店頭裝飾は至れり盡せりである、猶羅沙洋傘卸商としての西唐人町藤井本店の如き、細工一丁目の山鹿屋陶器部の如き硝子線光商なる西唐人町藤井商店の如きは、當代大正の熊本の香りとて紹介すべき商店である、尙有田屋陶器店の如きは熊本唯一の陶器店にて、唐津竈元出張店である大正元年に大擴張を爲し盛大に、人氣を集めてゐる就中、有田焼を主として各陶器の販賣も爲してゐる、夏季の候納涼大會等を催し顧客の満足な遺憾なく計つて益々隆盛を致してゐる。

△各洋服店總まくり▽

先づ伊藤、梶原、吉田、泉、宮崎、山城、辰本等の各商店は市内目抜きに宏大なる一構へを以て、低廉確實美術本位でよく其の職業を努め、益々業務の益進展達を計つて居る事に於て他縣に比べがあるまい。

△代表的菓子商店▽

熊本代表的菓子商店として數へたら先づ園田屋、福榮堂、三好商店位のものである之れ正しく熊本代表的の菓子商店で、薄利多賣主義の實行商店である、幾多の菓子商店が総べての點を模範として居る、福榮堂は南新坪井町にあつて、安巳橋通の三好商店は一年前より三好商報なる新聞を發行して、武歩堂々正しき商戦を行つて居る。

△縣下の名産▽

肥後米の聲は天下に響いてゐる、就中、菊池米は最も品質の優良を以て名がある、其他各郡部の物産は飽託郡河内、玉名郡小天の蜜柑、鹿本の山鹿團扇、並に河津の傘製造、阿蘇の牛馬、上益城の矢部茶と牛、八代郡の高田焼、葦北の木炭、球磨郡の香魚焼酎、天草郡の牛及水平焼等が主なるものであらう。

△果物密製造の元祖▽

熊本の名産として果物密の時期が来た、其の元祖は市内六間町の青果園である、當果物密は他の粗悪なる品とは其の質を異して最も此の種の模範として誇るに足るものである、四季を通して盛に製造し一般社會の大歡迎と信頼を受けてゐる。

第三節 美術

◎著名活版活字事業

△井澤新行堂と活字事業▽

井澤新行堂は市内山崎町にあり、中國以西に於ける活版機械並に活字製造大販賣を爲し、益々進歩發達繁營を附して居る今より十年以前此の業を創め、目下の販路及得意先きは實に甚だ擴大されて、大阪青山進行堂と拮抗して益々營業に信用を博して居る、主任井澤不美雄氏は新進銳氣の新人物で尙倍々前途が有爲である。

△三色版装置の小山活版所▽

市内建丁小山盛林堂は美術本位の活版所である、本年正月ビクトリヤ三色版印刷器を構入して盛に活版印刷と同時に、世界名所繪葉書の製造を爲してゐる、主人小山恒一氏は明治三十三年より四十三年の十ヶ年の間東京に於て、熱心其術を研究したる好

果は現今漸く現れ實に各方面の注文及出版物多く、優に熊本先輩活版業者を凌いでゐる、尙活版所としては中島商會、秀英舎等が主なるもので、就中中島商會は熊本活版業の泰斗である

第十五章 新聞、雜誌

元來熊本縣は言論の盛な處である、之れが爲めに新聞雜誌の發刊も他縣都市に比較して其數が多い様である、今、日刊と週刊の主なる者を記して見よう。

□九州日々新聞□ (日刊)

明治十五年の創刊である、號を重ねる事既に一万余、記事の豊富紙面の整頓發行部數の多き事地方稀に見る處である、久留米市に支社を設けて筑後新聞を發刊し、宮崎鹿兒島に支局を置いて益々社運の擴張を計つてゐる、縣下國權黨の機關紙である、社長は小早川秀雄氏で現に主筆を兼ねてゐる、性質至つて温順意を部下統一に注いで余念なく我黨の隆盛を圖つて居る、硬派記者には差程非凡の才物在らざるも先づ掴まんとすれば宇野靈南氏である、何れにも適合する記者として評判よきは後藤是山氏であ

らう、地方新聞に當て嵌た『画も書けば雜報も書ける書かせたら記事文も評論も載せて呉れたら論説も』それ相當に書ける古莊點軒氏、この記者は四季折々好材料を紙上に表してゐる、案外速記者も揃つてゐる、本社は市内上通五丁目に建つてゐる洋館の一構へである。

□九州新聞社□ (日刊)

九州新聞は九州自由新聞の改題である、縣下政友會同志の機關新聞であつて盛んに正義仁義を標榜して始終淪る事がない、支社を久留米に設けて縣外に羽翼を張つてゐる、福岡日日新聞と南北に相對峙して天下國家を正論して益々隆盛を計つてゐる、去る四十二年以來紙面に大刷新を加へ讀者の増加亦驚くべく既に九州日日と相對峙して決して劣りは無い、社長は高木第四郎氏、副社長は法學士池田泰親氏、主筆は伴熊太氏である、尙朔風池田貞記、惠風吉田惠久磨、兩硬派記者鬼灯吉田響鳴、軟派者記の面々は實に中央に羽翼をキカして敢て遜色無しと云ふ丈けそれ程美しい鋭い筆鋒は、遺憾なく數萬の讀者を満足せしめてゐる、本社は市内辛島町、

□熊本日新聞□ (日刊)

福岡日日の支社である、國武猪太郎氏經營の任に當つてゐたが部下末派記者の陰謀に依つて職を退くのを止むなすに至つた、現主幹は芝尾入眞氏である、營業部は現市會議員小川彌次郎氏の經營である、氏は頭腦明晰よく物事の理解に明確亦腕の有る非凡の才物である、著者とは深いインスピレーションを持つてゐる、畢竟熊日の今日あるは小川彌次郎氏の腕の筆と頭胸の加減に依るか、政友會の機關で多くの讀者を市内に持つてゐる、無邪氣な坊ちゃん記者が多い社は市内辛島町にある、

□熊本立憲新聞□ (周刊)

立憲新聞は市内櫻井町にある、社長は藤井克己氏で主筆が峻峯宮部逸夫氏である、著者の關係も淺くない著者が九州新聞記者の當時峻峯宮部君碧洋々橋本壽七君等と計つて第一號を發刊したのは一昨年の秋であつた、目下發行部數五千余で縣下各郡部に擴張してゐる、其他熊本雜報、熊本毎夕新聞、青年新聞、熊本慈善新聞、熊本縣教育會報、うき新聞等の發刊がある、▲九州の少年▼ 創刊第一號を出してゐる同人入江

白峯氏の經營である。

第十六章 辯護士

熊本市に開業してゐる辯護士は帝大出身が最近大に増加し先輩を凌いで大に法曹界に名を爲すものが、頗る多數を占める様になつて來た、其の主なる辯護士を左記して見れば先づこんな御方達ち

- ▲井島義雄 ▲小山令之 ▲林立夫 ▲川上直行 ▲福原義三 ▲瀬口三二 ▲古閑又五郎 ▲坂本哲夫 ▲緒方正義
- ▲竹田管雄 ▲楠田義人 ▲山隈康 ▲本田柳三の諸氏位ひのものであらう

第十七章 衛生

常市には未だ上水下水の設備完全でないで、衛生上全く缺陷がないとは云へぬ然し街路廣潤であつて樹木全市に茂し恰も林中に市を成せる遙望他に見る能はざるものがある、着々上水道の改善も行れ下水道の完全を見るも遠きに非ざる感あり、今市の衛生に關して一斑を記して見よう

△醫師總まくり

市内に開業せる醫師は總計二百余名である、内外科醫其の絶對多數を占め齒科最も少ない、赤門出身のもの亦少なからず云へぬが年々増加を見つ、あるは常市衛生上に喜ぶべき事であらう、先づ二三の泰斗醫を紹介して置く

婦人科としては福田令壽氏を惜いて他に人はあるまい、氏は人格の人であり學者で

ある、亦深く情的の人であり、結局吾人等の兄と仰き師と偲び範を同氏に求む可き精神界の人である、其他皮梅科の吉田、野尻、婦人科の大里、神尾、小児科の中村、富田、内科の浦本、眼科の田中、守往、脊柱内科の多賀等の醫院其他醫學士の小澄任市出田醫院、山本醫院、熊北の行徳醫院、檜木醫院、柿田醫院、前田醫院、齒科醫では古莊醫院、皮梅の高島醫院、婦人科の山口醫院、内科池田醫院等が信賴併せ得て居る尙原口、奥村、愛甲、豊島、浪岡等の醫員は實際的に市民の衛生に對する熱心なる研究家である。

▲附記 藥劑師も近來大に増加して二十余人を算し藥舖亦七十以上である

△病院の記

病院の主なるものは縣立病院、市立傳染病院、熊本驅梅院である

縣立病院は市外本莊村にある、三十五年に二十五萬圓を投じて新築したものである諸般の設備完全地方稀に見る大病院である、院長は谷口長雄博士である博士二名醫、學士七名他數十名の醫員等で熱心に診察を爲てゐる、抑も當病院は明治十一年五月市

内手取本町に新設して二十三年以降一度私立であつたが、二十八年再び縣立に復し其間幾多の變遷を重ねて今日に及んでゐる、市立傳染病院は二十九年十月の創立市外大江村にある院長一名醫員二名にて總べを整理してゐる、熊本驅梅院は二本木遊廓の娼妓の檢梅と治療とを行ふ處である、市外古町村に建つてゐる。

△汚物掃除

全市を六區に分ち各區に掃除人夫を配置し常に汚物の掃除に従事せしめて、且つ監督員を置いて巡視せしめる等頗る注意を拂つてゐる、最近一ヶ年間に於ける塵芥の搬出高は四百六十九萬余百貫である以上三項を以て當市の衛生の一斑を窺ふ事が出来る

第十八章 旅館料亭

第一節 旅館總まくり

『旅寢と云ふは憂きものにて』と云ひしは昔の事、今は各地旅館の設備整ひ其待遇亦懇切を極め人をして却つて家郷にあるより以上に心安からしむ、當熊本は軍人學生其他各府縣からの來往者が多い爲めに、従つて旅館の數を増して來た最近の調査に依る

と普通旅館百六十五戸、下宿屋三百戸以上、木賃宿五十戸以上である、今市中に於て重なる旅館を摘記すれば

▲綿屋(洗馬電話五五一) ▲研屋支店(手取本町全二番) 白水館(安巳橋全一五二) 竹田屋(阿彌陀寺全二五六番) 寶來屋(小澤町全三三一番) 丸小(上林町全三五四番)等であらう

第二節 料亭総まくり

天草玉名の鮮魚、春日の蔬菜、春竹の牛豚之れが割烹の術頗る進歩し、銘酒の醇良亦多く飲むべし食ふべし今左に旗亭中の主なるものを紹介して見る

△静養軒 △一日本店 △三浦 △八百九 △慶 △京常 △南山樓 等就中静養一日三浦は紳士小集に適合してゐる其他簡易ビヤホールとしてはキリン、及日勝亭等がある

第十九章 遊樂

第一節 演劇場

演藝を一つの藝術品にして観る可は先づ多くの人々は是を鑑賞的なもの一の遊樂品として取扱つて居る日毎々に運ばれ行く劇しい務めの餘暇を籍りて行樂を夢見る市の人には必ずや、芝居の影が心の底にパツと映するであらう、又は海空遠く離れて来る旅の身の殊に春雨とと降る夕の如に至つては何となく心のもごかしくて徒然の余りは旅の芝居でも覗いて見ようと思ふ心の湧いて来るものである演

藝は先づ逸樂品であり演藝を見せる劇場は安息場であらう、さて熊本には此の安息場である劇場も少ないが其絶対權威としては直に大和座と推されねばなるまい

△九州第一の大和座▽

大和座は市内新市街に建つてゐる豪壯な構への一棟である、座主は古城卯三郎氏創立は明治四十一年二月である、是より先き明治九年松平權令の際熊本市には在來の二劇場(東雲、旭)以外に劇場を建設する事を縣令で以て禁じた、此の不文律の流れは明治三十八年古城氏が創設の企を爲すに當つて随分の打撃であつた、かるが故に氏は西奔東走惡戦苦楚をなめ時の市長辛島格、九日社長山田殊一、縣會議長村上一郎等の臂力をかり縣令の改竄を圖つて遂に目的を達し建設する時に至つた、胸にブラチナの光を輝やかした思がしたであらう、練兵場を市街地と改めて間もない當時の新市街には見るべき家はない、殆ど空地の有様で大和座が六百坪の面積を買収したのを手始めとして、漸次に大地が必要される様になつた、建築は大體博多の壽座を象し大阪角座中座の特徴を採用したので是れと云ふ非難點は無い、短い年月に當代名題の役者を随分

入れてゐる事に於ても如何に大和座が——九州第一である事を証明してゐる。

△東雲座▽ 吾熊本で尤も古きを爲す劇場である、市内阿彌陀寺町に建てる一構へで其後幾多の變遷を爲して目下經營者は古城卯三郎氏である。△朝日座▽ 朝日座は市内川端にある大構である、大道具小道具遺憾なく設備せられて大和座東雲座と共に吾熊本に於ける三大劇場の一つである。

第二節 活動寫真事業

吾熊本は活動寫真事業の頗る盛な處である、今日三劇場に對して將に四常設活動寫真の競争を見ん時期に達してゐる、先づ其の重きを爲すは

- ▲世界館▼ である市内新市街に宏大美麗に建築され、新寫眞の操り換へ取り換實に多く觀客の多き事亦第一であらう、▲太陽館▼ は市内坪井に新築した天下第一の活動常設館である、常盤座の火災後坪井の淋狀甚だしく遂に太陽館の生れ出でたるものであらう、館主橋本長吉、山形鐵次兩氏専ら經營の任に當つてゐる、▲地球館▼ 常館は市内草葉町に建てられ大和座第三興行場で、經營者は古城氏である、此の三活動寫眞の他に電氣館もある

第三節 相撲館

熊本は相撲の神様の在地である、それに相撲館の設備がなかつたが近年漸く其の新築を見るに至つた、

市内新市街の一角に壯嚴に建築され東京大阪の大相撲幾回も乗込んで四肢の響を固めたのである

第四節 券番、遊廓

□券番□ 西券熊券の二つある、熊券は鹽屋裏一番丁藝妓五十六人之に屬してゐる西券は二本木遊廓内にある五十六人の藝妓之に屬して、藝妓の本場たる京都大阪神戸等から入込んで營業を爲てゐるものが多かつたが、近年縣下の者大に増加して來た様である、又別に土手券なるものがある所謂町藝番である、此の大都會たる熊本市に比較的藝妓の數、少くて且つ彼等に不最氣を來し居るは、二本木遊廓の影響を受けるが爲めであらう。

□遊廓□ 二本木は市外古町村にある所謂狹斜の巷たり、六十余の青樓莖を並べて立ち中に粧を凝せし九百余の阿嬌がある、脂粉の氣空に漂ひ、紅燈輝いて晝の如き處皓齒歌ひ細腰舞ひ管絃の音終宵絶ゆる事ない是れが眞の不夜城かな、遊廓は元々京町にあつたが明治十年の兵亂後今日の地に移轉した『京町通ひはもう止めなされ金も雪駄も堪りやせぬ』とは當時遊治郎が雪駄チャク足繁く遊里に通ふ女房が氣にして

唱へるものらし、其後取締を嚴重になして大刷新を加へたるも樓主其者の精神根本より改革爲無くては全然遊廓の改善は徹底が六ヶ敷いものである、主なる妓樓は東雲、三橋、三代喜、松鶴、幸等である。

第二十章 洗 湯

當熊本の洗湯は先づ完備した方である、多くは蒸汽機關を以て湯を沸し、浴客浴室の採光、さては温度の調節等遺憾なく設備整つて衛生、上風規上大に其の處置を得同業組合は更に善美を盡さん事に腐心して居る實に當市の誇の一であらう。

第二十一章 名所、舊蹟

第一節 市内遊覽地

「京に田舎あり」田舎に名所多しと云ふ、今市及市附近の所謂田舎名所を紹介する。

△熊本城▽

雲井を凌ぐ銀杏の影濃かき熊本城は我國三名城の一である、足利の末葉菊池氏の一族出田筑後守秀信始めて千葉城を築く之れ熊本城の濫觴である、大永年間鹿子木寂心が飽田山本二郡五百六十町歩を采地として此地に居城するや、熊本郵便局の後方なる

古城に改築し、慶長五年清正肥後全國五十四萬石を領するに及で兩城の間に横はつた茶臼山を失げて此處に築く、六年八月起工七閏即ち十二年竣工、濠深ふして疊高く層樓碧空を摩し眞に天下の偉觀である、寛永九年嗣子忠廣に及んで除國され、細川氏代つて國主となり爾來居城二百三十九年以て明治維新に至る、四年熊本鎮臺を置かれ九年神風連の變起り越へて十年三萬の薩摩男兒が、巨眼老西郷を擁して來つて圍んだが城將谷干城堅く守つて降らず、偶々二月十九日火災に罹つて城樓悉く灰燼に歸し唯當時の第三天主閣であつた、宇土櫓の一を残したのみされば今は往時の壯觀を見るに由きも而も墟上古木蔚葱として梟梢頭に鳴き、巨濠草深ふして人の到る稀に規模宏大なる人をして轉た、鬼將軍の雄圖を偲ばしむるものがある、三十五年の秋肥筑の野に於て特別大演習の舉行せらるゝや、明治天皇は城中第六師團司令部を行在所として軍務を統監し給ひ、當時御手植の記念松は翠色年と共に加はり、城頭に千歳の齡を重ねべきも今や、天皇は在されず明治十年の兵燹に其巨幹を枯らしたる公孫樹、遺蹟復數竿に達して居る。

△加藤神社▽

加藤肥州を祀る、京町臺上に建つ東方託麻、菊池の平野を隔て、遙に阿蘇山に對し近くは市の北半部を脚下に指點する、市街の盡くる處に立田の翠巒の横るなど眺望甚だ佳である、往時本妙寺なる墳墓の上に清正在世中に彫刻せし四位の衣冠の木像があつたのを安置し、祠堂を建て、靈廟と稱し僧侶之を奉護して來つたが明治四年社を建てん事を請ふ、同七年社を城中に建て、神体を移した十年の後兵火に罹る、十九年再築四十二年三百年祭を營み大に内外を修築した、征韓の後分捕りの石橋今に園中にある高麗橋と稱して古色掬すべきものがある、此の社は從來錦山神社と云つて居たが三百年祭以後加藤神社と改稱したのである。

△藤崎神社▽

朱雀天皇の承平年中平將門追討の勅願に依り、山城國石清水八幡宮を分祀されし社である、住吉大神神功皇后を合祀せる、始め城廓の西邊藤崎臺にあつたが西南の役兵火に罹り、殿堂悉く烏有に歸し十一年八月今の處に御遷座あり。

古來市民の崇敬も深く、祭典は俗に放生會と稱し舊社跡の附近まで神幸がある、古典的なる百騎の鐵武者長柄の列の隨行及び、飾馬の奉納等があつて全市沸くが如くに賑合ふ、社域は白川の淵にあつて頗る景趣に富んでゐる。

△下河原公園▽

下河原公園は市の南方白川のみきほにある、園甚だ廣からざるも雅致に富み且つ市街に接近するの故を以て散策の人が絶へぬ。

△戦争記念碑▽

西南戦役記念碑は城西法華院の下にある地剛にして境雅、仰いで碑文を読み伏して往時を想ひ人をして徘徊願望去る能はざらしむるものがある、征清記念碑は市内山崎新市街の東端に三兵士が聯隊旗を捧持せる銅像の時つを見らる、であらう、之れが即ち征清記念碑である碑を周りに圍りて圓形の庭園は樹石趣きありて行人遊客の足を止めしむ。

第二節 市外遊覽地

△花岡山▽

花岡山は市の西南にある近郊の一名所である、試に此山に登臨せんか尤も殷賑なる市の南半部古町地方の層々白壁酷々として脚下に展開し、更に東南數郡に跨る城南一帯の沃野を一目の下に見る事が出来る、亦遠く蘇岳の噴烟を望み有明海の眞帆片帆の

白鷗の如きも指顧の中に讚する事も出来る、されば四季総べて可ならざるなきも殊に山腹の櫻樹が蕾を綻ぶ艶陽四月の候には熊本隨一の遊覽地として遊客頗る多い、中腹には十年丁丑の役に戦死したる將卒、又王政維新の際國事に斃れた人々の招魂社及九年の暴動に非命の最後を遂げた安岡權令以下の墓も茲に在る、近來登山するもの、便利を圖り頂上まで通路も開け容易に登る事が出来る。

△本◎妙◎寺◎▽

本妙寺は市外花園村にある市の西北に位し京都日蓮宗本國寺の末寺であつて京都法鏡山妙傳寺十二世の住職日眞上人の開基である、天正十一年十一月攝津國大阪に於て發星山本妙寺を建立したが同十六年加藤清正の入國に際し、熊本城内三の丸に天臺宗の三寶院と云ふ寺跡があつたのを、法華の教刹とし清正の薨るに及んで子忠廣茲に靈廟を建立して城内の本妙寺を遷し爾來三百有余年の久しき、法燈赫灼讀經の聲暫くもやむ時がない、遠來の參詣者は上熊本驛より下車するが尤も便利である、五六町足らずして御廟に達する、明治四十二年藤公三百年祭の折道路の修理改善を計り參詣者の

爲大に便を與へて居る。

△北◎岡◎神◎社◎▽

花岡山の東南市外横手村にある、神殿は高岳に建設してあるを以て眺望極めて佳、白川は蜿々として南面を流れ畫津潮。雁回山が指顧の中にある熊本驛紡績會社等が接近して絶快なる地である。正保四年花陵山上から北岡森の内に遷座ありしが、今や再び現在の所へ移したのである、祭日は舊六月十四日

△成◎趣◎園◎▽

熊本の名所を案内するには先づ第一に成趣園水前寺であらう、園は市の東方三十余町砂取町の北にあり、寛永九年細川忠利公入國の時豊州羅漢寺の僧玄宅得て來りて、此處に寺を建て水前寺と稱したのである、明治十年一社をこゝに建て出水神社と名稱し細川氏祖先の靈を祭り今は縣社の一となつた、境内假山青芝の眺め美、泉池水清く境内静にして天下の絶勝と稱するも恐らくば過言でない、春は花を賞し夏は涼を容るべく、秋は月を譽め冬は雪四時遊覽者の足絶へし事がない、公園の東方に日露戦役に

戰死されし細川護全公の銅像が嚴かに建つて一層の權威と風致を添へてゐる。

△江津湖▽

水前寺の泉池から湧出づる水南流して渺然巨浸を爲す所を江津湖と云ふ周圍一里十五町餘風光雅景四郊の風物何となく情趣をたゞわて眞に熊本に於ける琵琶湖である、湖中一島あり松島と稱す、風光殊に佳、舟遊の客は多くこの小島に船を繋ぎ足を留む湖上の絶景に至りては拙筆の能く盡す所でない。

第二十二章 總覽

第一節 熊本驛附近

西下の旅客が一度び門司停車場を發して次第に南に走り、驛又驛を幾多過ぎ田原坂の古戰場を偲び待つ間なく、人家櫛比の一市街を望むであらう、これが我熊本市である、上熊本驛を汽車は走り出で、西すると右に熊本市一常の近郊丘陵老杉古松雜木の亭々たる一幽境を撫し、左に粉壁鮮かな民家の薨に汽笛を響かせて結構頗る壯大なステーションに入るであらう、是れぞ即ち熊本停車場である、人口拾貳萬余を包容する

熊本市の大玄關である、そは一昨年殆ど往時に倍がして諸事遺憾なく設計されて新築の工成り、博多門司と相並んで先づ九州各驛中有數の建物となつたのである、旅客は此の驛のホームを出で、前面に一線の道路を見るであらう、之が所謂東西貫通の幹線で細工町、唐人町、通町の繁華を脱けて、縣廳市役所の邊に出づる事が出来るのである、附近は市外春日町一帶である、内國通運、山本通運、等の運送業等の他は差程の建物及商店もない、至つて閑雅寂寞の趣があるので始めて此地に下車した人は就れも市況の不活潑を嘲けるのであるが、數百歩脚一度び細工町の一角より唐人町に入らんか、實に澗澗たる市況の狀態に驚かるゝであらう、熊本驛は恰度舊藩主の大玄關の様である、驛長は古田豊吉氏

第二節 上熊本驛附近

熊本市第二の玄關である、日本軌道と一方菊池軌道の便を利用して市内に入る更に人力車によりて市内京町に入り加藤社及熊本城を望んで市の中心點通町、山崎新市街邊に出る更に京町より坪井に車を轉じて藤崎宮に詣で縣廳、市役所、物産館等を遊覽して市中心點の旅館綿屋、白水館、研屋等に泊るもよかるべし驛も近年新築して結構壯大となつてゐる

第三節 縣廳附近

上熊本より下乗せる旅客は京町を脱け坪井に入りて藤崎宮に詣り千反畑町と云に達する、熊本驛に下車せる旅客は繁華な町を脱けて千反畑に入る、茲に熊本縣廳はある附近には諸官衙の構へ多く警察、市役所、議事堂、圖書館、武徳殿、赤十字支部及知事官舎等がある、道路大に復雜自在、水前寺するにも菊池するにも輕鐵の附近を起點としてゐる。

第四節 市の中心點

縣廳の門前を西に過ぎ草葉町より上下通町をパスすれば西通から唐人町に入る、唐人町の南方紺屋町米屋町、北方山崎新市街明十橋及新町これが市の中心點で、云ふ迄もなく繁華區域である、熊本は廣い幾多の町數からなるが其の中心點は此の數個町で總べての商工取引の活潑なる事は殆ど他に比べる所がない、呉服商の大なるもの、雜貨商の大なるもの、緋商の大なるもの、銀行諸會社の重なるもの、其他凡百の大商工業は此の方面に集中され、殊に金融機關たる前記銀行は多く此の中心點に營業を始め居る競商場は唐人町にある見よ！市の中心點を見よ！不斷活氣に溢れたる熊本を！

第五節 自働電話

市内外に於ける自働電話は左の様である

- ▲龍田口 ▲安巳橋 ▲水前寺 ▲京町 ▲明八橋 ▲二本樹 ▲兩驛前

第六節 人力車賃

□熊本市及市附近人力車賃表□

縣廳より		上熊本より		熊本より	
縣廳	○錢	一九錢	二五錢	縣廳より	上熊本より
水前寺	一八	二八	三一	下阿原公園	一七
藤崎神社	六	一九	二七	肥後銀行	一六
本妙寺	二五	九	二五	熊本郵便局	一四
加藤社	一二	一一	二三	熊本稅務監督局	一三
上熊本	一九	二五	二五	縣立病院	一〇
熊本	二五	二五	二五	師團司令部	一二
二本木	二三	二五	五	第五高等學校	一三
				陸軍階行社	一五
					一四
					一七

熊本市を單に學生地であり、不生産地であり、非動的の都市であると云ふ人があるがそれは皮相の觀である、成る程五高、高工を筆頭に幾多幾種の學校が市内外に建てら

第七節 壺中我觀

れてあるし、久留米の如き生産地に比して著しく其の特産を見ないので左様にも見へるが、實は熊本は學生地であり、工業の地であり、又商業の土地である強いて謂へば商工業を以て基礎とせる一市である、故に其の機敏なる取引は往々にして京阪地方の商工業家をして後へに瞠若たらしむるものがある、熊本は近年氣風の改善を社界の要求に止むなくせられて著しく其實を上げ、勤勉にして敏捷なる事に於て九州各市中比肩する所は殆ど尠ない、無論商業の大小と言ふ事は問題外であるが商略にかけては最近決して他に譲らないと云ふ自信で遣つてゐるので、市況は常々活潑であるとして商業會議所、實業團、經濟協會、及熊本商工協會亦新たに生れんとせる機運は全く當市商工界が如何に隆運を致しつゝあるかを窺ふに易い。

一二篇終



第三篇

郡總論

第一章 各郡現勢

第一節 飽託郡

□飽託郡總まくり □ 飽託郡は本縣の中央から少しく北西に偏し、北及東は玉名。鹿本、に接し南は宇土、益城に對し西は一帶有明海に濱してゐる、面積十六方里である町村數五十にして地勢西方底く東方従つて高い、交通の便大に開け殆ど市内と同様の趣きがある、市外春日町は所謂飽託郡下の唯一の町であつて郡役所も亦附近にある

△遊覽地總まくり▽ 花岡山、北岡神社、本妙寺は既に市外遊覽地として紹介した、其他本郡には池田村の往生院、花園村の柿原成道寺、松尾村の岩戸山及鼓ヶ瀧、白坪村の蓮臺寺川尻町の大慈寺等の名勝古蹟は古色蒼然として巖かに昔の名残を留めて居る、遊覽者亦多し、雷津湖及水前寺も亦本郡に屬すれど前記せしに依てはぶく事にする。

第二節 宇土郡

□宇土郡總まくり□ 宇土郡は所謂宇土半島の全体である
東方飽託益城に接するの外は筑紫、不知火の海に濱して眺望
亦佳である、面積九方里町村數十二個である、交通は九州線
より分岐して三角線を出して其の便を得、海路遠く長崎、唐
津、京阪に通じて居る、三角町は郡役所在地である旅館料亭
等も多く、際崎町は三角線の終點にて三角港と共に本郡二大
町である。



樹 双

△遊覽地總まくり▽ 宇土町の宇土城趾は初鶴と稱して後冷泉院の永承三年關白道隆下
向して此の城を築く云ふ、正保三年六月細川立孝の子宮松宇土益城二郡の内三萬を得て此所
に居つたが、後城は毀れて今は只礎をこむのみ、郡浦の三宮大明神宮、綱津の住吉小島轟
村の轟の泉等の名勝がある、住吉神社に詣でんとして著者は宇土驛に下車して、頗る滑稽極る
失敗をせし事がある、乞ふ旅人遊覽者は三角線住吉驛に下車あらむ事を。

第三節 玉名郡

□玉名郡總まくり□ 本郡は本縣の北部西方を占め東鹿本
南は飽託の一部に接し西方一帯は筑紫瀉に濱して壯快の景亦
多し、北方は福岡縣三池郡に對して居る、面積二十六方里五
赤 腹
は地勢一般に平垣である、交通従つて發達し教育の發達亦縣
下第一である、郡役所は高瀬町にある當町には玉名中學及郡
立女學校郡立圖書館等の建物が並んで郡の中心となつてゐる
邊 海 の
△遊覽地總まくり▽ 立願寺の温泉夏猶寒し、來客者夥し
疋野大明神宮亦其處にある、高瀬町を去る二十町更に腹赤村
の海濱より長洲に至る迄の磯邊を稱して、腹赤の濱とし快々壯々、歌に
四方の海波しづかなる御代なれば



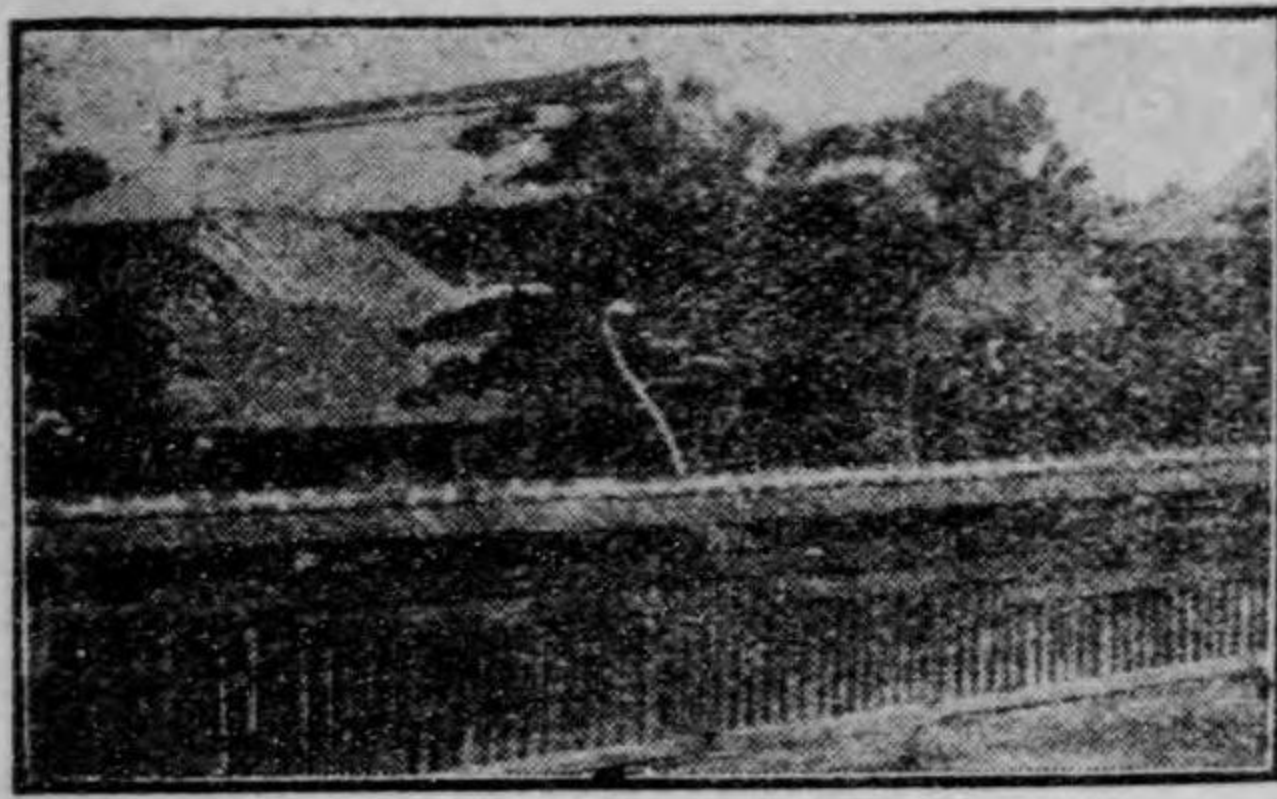
腹赤の贅もけふ備ふなり

條四節 鹿本郡

□鹿本郡總まくり□ 北西は福岡縣の一部及玉名郡に接し東南は菊池及飽託に對し

て海に遠ざかつて居る、郡役所は山鹿町にある面積二十二方里二一地势比較的山俗である、温泉多く町村数二十七個である

△遊覽地総まくり▽ 同郡は名勝舊蹟に甚だ富んでゐる、即ち鏡田村の杵築大明神の如き先年新築したが不幸火災に罹りて亦其後假築を爲して居る崇信頗る深い、木留村の吉次峠古は戦場の一である、昔金賣吉次信高諸國を周浪して此處にて強盜に害せ



山鹿温泉

られ其古蹟が残つてゐる故に吉次峠と云ふ乎、十年の役薩軍峠の絶頂に壘壁を築き以て官軍に抗し三月四日の激戦に第一の良將篠原國幹が戦死した處である、田原村の「田原坂」は那知船底谷の東、七本北の谷の西、北は鈴麥の低地をひかへて南の方や、平垣で三池往還豊岡の中央を貫き休居以北に至る坂路を田原坂と云ふ天然の要害である、十年二月西南の役起るや薩軍この險に據つて、官軍に抗し殊死して守る蓋し田原の勝敗は全軍の勝敗の大局に關せしを以て也、三月四日官軍

の攻撃始まる、十有七日の間血戦幾百合一進一退終日終夜頃刻も銃炮の聲を断たなかつた、兩軍壘壁に倚り困苦甚だしく彈丸雨注の下に熟睡する其の苦戦の有様、又察すべきものである、同月二十日敵營遂に陥ちて死傷する四千人亦慘ならずやである、戦後碑を田原坂に建て、以て當年の苦戦のあとを記し、義に斃れた者の忠魂を慰めてある、文は有栖川宮熾仁親王の御撰に係り、坂頭松林の間東面して立つて城内宏濶遠く四近の溪谷をのぞむ事が出来る、九鐵木葉驛は眼下にありて熊本市を去る四里に足らない、縣下唯一の古戦場である。

第五節 菊池郡

□菊池郡總まくり□ 本郡は本縣の眞北倍東北に位して海に遠く離れ、北は大分縣日田郡に東は阿蘇郡西南は鹿本飽託上益城の一部に接してゐる、菊池川の流れありて菊池米の特産を有つてゐる、面積三十二方里一三、貳拾五ヶ町村から一郡を爲してゐる、郡役所は



菊池神社

隈府町に新築せり郡下大津町は著名の町、現今豊肥大津線の終點である。

△遊覽地総まくり▽ 菊地神社は隈府町にある正觀寺(熊耳山)亦そこにあつて有名の古寺院である、院内大樹の下に菊地武光の墓は苦なめらか深川村の菊の池は四隣幽スイの地則隆の墓亦其のほりにある、立野大道の右側僅に數足黒川の末流轟然として降り落つる、之れ數鹿流が瀧である、老樹青苔怪廢削立水煙モロとして萬ライの一時にホゆるのカンがある、縣下唯一の大瀧である

第六節 阿蘇郡

□阿蘇郡総まくり□ 本縣下の最高地である東南は大分宮崎の兩縣に接し南西は菊地上益城の二郡に對して居る、面積八十二方里五〇球磨郡と共に二大郡である、二十六ヶ町村より成り郡役所は宮地町にある、郡下高森町内牧町馬見原の各町は繁華な田舎町で郡の中心となつてゐる、氣候は寒冷にて交通は便利とは云へぬ、郡長は温厚篤實明敏なる、佐々木乙氏である。



△遊覽地総まくり▽ 阿蘇は著者の生れ故郷である、記せむか一萬頁紹介せむか五十有の勝景溪谷の眺而「大正の熊本」には頁數に限りがあるので、今左に一二を記述して置く、長陽村の下野狩場の舊蹟、宮地の阿蘇神社及満願寺等の勝景、鮎返の瀧、白糸の瀧の壯景、阿蘇外輪山の絶景等は他に求むる能はざるの眺め、知る人あらば行かむか夏の大自然の阿蘇、冬の暮雪の外輪山にぞ、著者は快よく誘ふべし、阿蘇山は實に本郡の中央に崛起せる群山の總稱である、一休和尚は、聞説九州第一山 三池畑波大空間 應斯此境明神地 多少旅人更匪攀 其他栃木、湯谷、月下、垂玉、地獄等の温泉、あつて、四季の遊客頗る多い。

第七節 上益城郡

□上益城郡総まくり□ 本郡は阿蘇、菊地、飽託、下益城の五郡に包まれ一部宮崎縣に境してゐる、面積四十四方里九〇郡下木山御船は中心にして御船町に郡役所はあゝる四町二十八村から成つてゐる。

△遊覽地総まくり▽ 七瀧村の七瀧、瀧の大なるは多し然も風流雅致あるは未曾て七瀧の如きはあらしと皆亦慕ふ、濱町の通潤橋は縣下の著名の橋である今を去る五十年前嘉永五年の築造である。

第八節 下益城郡



□[◎]下益城郡[◎]總[◎]ま[◎]く[◎]り[◎] □ 本郡は上益城、宇土、八代の三郡と有明海の一部によつて包まれ川尻、松橋、原町、隈庄等の町は郡の中心となつて居る、面積一九方里、三町十五ヶ村より成り郡役所は松橋町にある、同郡杉合村に緑蔭養蜂研究所あり名和虎雄氏主事となつて數百箱の伊太利産の蜂を研究改良してゐる、本年度の採蜜總斤數五百斤に達せり。

△遊覽地總まくり▽ 隈庄城趾、竹崎城趾、海東村の塔福寺及竹崎季長の墓の如き、古蹟、響の原古戰場は豊野村系石に松橋海濱又絶快壯快の遊覽地である。

第九節 八代郡

□[◎]八代郡[◎]總[◎]ま[◎]く[◎]り[◎] □ 本郡は西一帯は不知火海に濱し其他葦北球磨下益城に接して居る境、宮原は八代町と共に郡の中心と成てゐる、郡役所は八代町にある、郡長は中西正義氏で縣下郡長の代表者であらう、面積四十一方里三町二十九ヶ村より成つてゐる

八代遊廓又紺屋町を爲す、セメント會社、窒素肥料會社等の大會社又八代町にあり、縣下第二の都である。

△遊覽地總まくり▽ 八代城趾は所謂八代宮、八代町にある今を去る五百年前古麓に創り三百年前夢島に移り二百六十年前再び松江城となつた、即ち八代城である城趾は一面球磨川の流に濱し東は古麓山脈を去る一里北は廣漠の水田に連り西は不知火の海に濱し、斥鹵の地ありと雖も船舶來つて去る、遠くは薩隅日肥の諸國を控へ近くは球磨、天草の咽喉を占頗る形勝の地である、宮は明治十三年征西兩將軍を合せ祀り八代宮と號して官幣神社に列せられたのである、殿堂高壯泉石の美又つくせりと云ふべきである、更に高田村の遙拜堰又萩原堤宮地村の悟眞寺及八代神社柿迫村の大恩教寺等の舊蹟の他、高山峻峯の裏別に一乾坤をなす之れ五箇の庄である、值柳村に屬する水島は又勝景の地である。



八代神社

第十節 葦北郡

□[◎]葦北郡[◎]總[◎]ま[◎]く[◎]り[◎] □ 本郡は不知火海一帯に濱するの外八代球磨兩郡に接し、南方鹿兒島に對してゐる、面積三十三方里九佐敷、水俣、日奈久は郡の中心である三町八

村より成り郡役所は佐敷町に在る、日奈久は温泉にして四季の遊覧遊客が夥い
△遊覧地総まくり▽ 日奈久温泉を筆頭に野坂の浦の絶景、佐敷城趾及歌坂、水俣
城趾等の舊蹟が多い、濱村の出月原は遠近の眺望絶佳にして迫間より宇土金峰の諸山
を望み嶋嶼及藻銅山薩州長島等眼下にありて山海の願色宛然畫く如うである、古島、
戀の浦塔の遊覧地が多い。

第十一節 球磨郡

□球磨郡総まくり□ 本郡は宮崎、鹿兒島の兩縣に隣し、八代葦北の兩郡に接し
て海に遠ざかつてゐる、面積九十六方里一町二十五村から成つてゐる、人吉町に郡役
所を置き、多良木と共に郡の中心となつてゐる、球磨川の源を本郡に發してゐる。

△遊覧地総まくり▽ 人吉城趾及青井大明神は人吉町にあり、霧島神社は本郡著名
の一祠である、球磨川の奇景は恐らくは本郡稀れに見る處であらう、

第十二節 天草郡

□天草郡総まくり□ 本郡は群島を一丸にしたるもの即ち天草洋、筑紫海、不知火

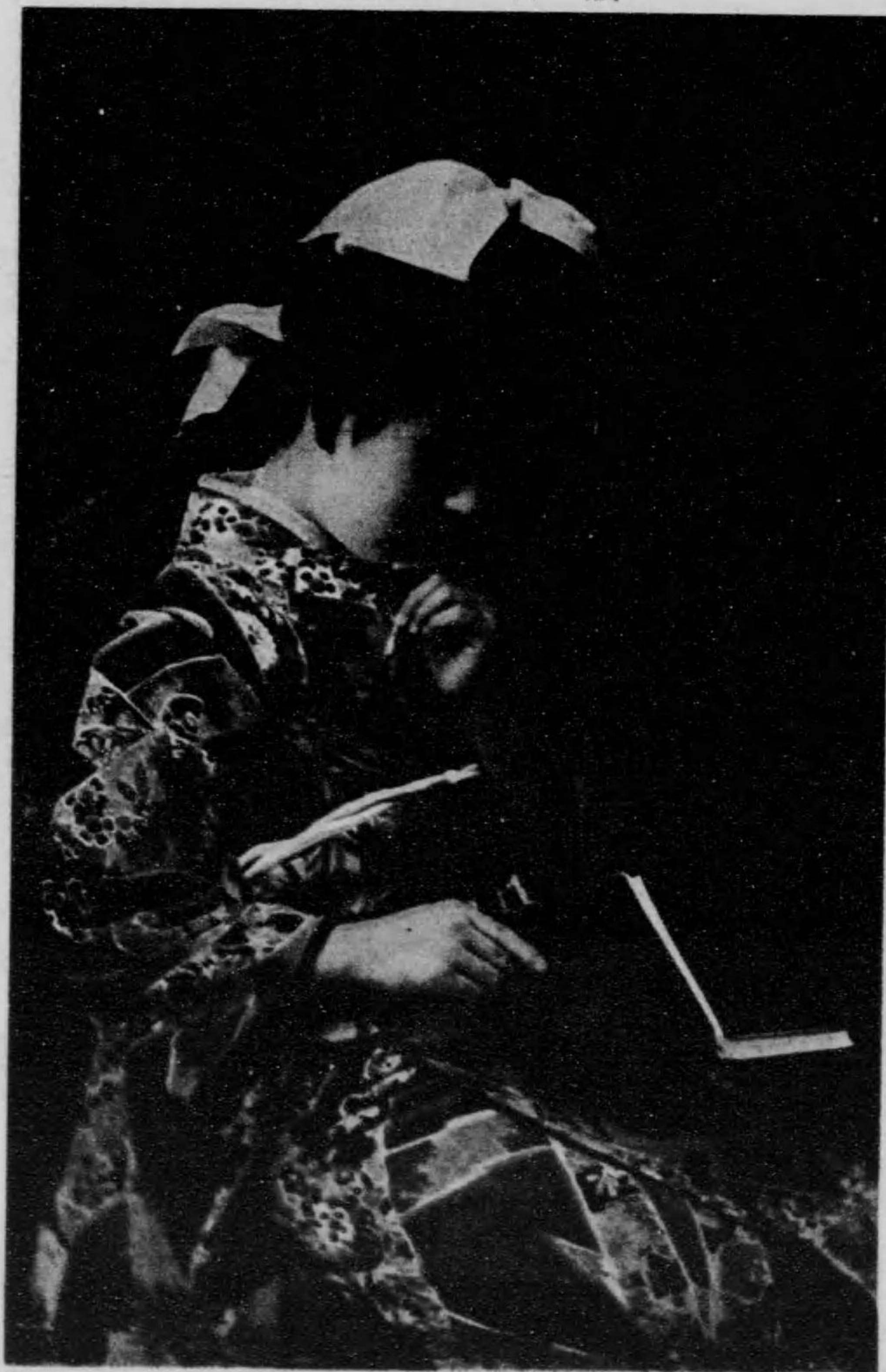


富岡港

海の中にある多くの群島である、面積五十七方里二六、三町
六十村あら成り郡役所は富岡町にある、著者は後日特に『天
草群島論』と云ふ一小冊を論せんと思ふ、之れ天草を研究す
るに多くの價と興味とを感じたればである

△遊覧地総まくり▽ 二個の大島十の小嶋の絶景、又格別
水天の間忽ち山陽頼氏を偲ぶ、志岐村の國照寺及本渡城趾、富岡
城趾等の舊蹟多々、本縣下第一の遊覧地であり避暑地である。

ミドリノ影
七福神何所へ行かうと辻に立ち 鈴吉 煙草屋の辨天様は厚化粧 星
遺産分け庶子十人が腹異ひ 哲 看板が嫁いで淋しい店になり 峰坊
面倒を見てやるといふ紙幣の束 一斗 手品師も及ばず小僧不二をのみ 喜世



堂林盛すまじ應に川需御刷印版製版銅色原

屑紙籠

主義に囚へられた著書、人は主義なき一篇を笑ふが僕は主義に囚はれた著書をも呪ひたくなる、但しこれは僕の理論上から割り出したものではなく僕が著書に對する感情若しくは氣分と云ふ様なものから自然に湧いて來る不満である、イズムと云ふみな是れ個性の表象(全体でない)に外ならぬ、然もそれは個性の著しい部分だけの表象に限られてゐるのではあるまいか、個性の中に數多のイズムがたとい永續的でなくとも同時に湧いて來る事は事實ではあるまいか、自然主義、新浪漫主義、印象主義の凡てが自由に僕の一つの心の中で調和の合奏を發見することがあると僕は信ずる、落葉の一片と一ト葉に懷ふべしその悲しみの凡てを擁く僕はそしてこの書を編しつゝある。

大正四 七 廿日 ゴトウ

第二章

郡部のインスピレーション

飽託の印象。

再度遊んで初度目の銀露様へ

△大慈寺の川畔より

銀露様！親しい銀露様！彼れは夫れから四日経つた廿五日、思ひ出した様に突然熊本ステーションを西へ流れ、貴女と彼に深い印象のある大慈寺に逡巡ひました、貴女と共に「しころん」一本に「うなぎめし」二パイと少し宛つ食べた「録屋の窓」から今度も淋しく流れ行く緑川を眺めて居ります、彼れの眼境を貴女が試みて「無度」だとは、いんだ、六疊のあの「緑り屋」の窓によりか、つてゐます彼は思出の多い此の録屋の部屋と緑川の流れと大慈寺の眞夏に輝り付けられて居るのを見るに丁度……思出は遂に彼れには世捨人の様な果敢い氣分に浸されます。

銀露さま！思ひかへせば夏も八月の中旬過ぎで御座いました、大慈寺まで車を二輛きしらせ僅か三時間足らずの散策も、暑い夏でさいものたりなう御座いました、遠くは無けれど矢つ張し人里離れの河畔はがらんとして草刈る乙女の姿も見えず、唯川風は人達ちを慰める様に冷く吹く而し彼には風が吹く儘に四圍の風調が亡んでゆく、殊に初度目は貴女と再度目は初度目を慕ふての余り只獨り、それに遠い國の方へ日脚の傾く頃から月明の夜に誘れるまでの彼の胸裡彼の理想彼の未來彼のライフと責任までを、思ひ浮べた時もう何んにも云へませ

ぬ、銀露様よ！もう何んにも謂へません、只強かれ々、活けよ々、信仰のライフに働けよご
彼は彼の心を慰めました緑屋の庭の百日紅には美しい花が咲き匂ひました、而し彼と貴女の
サビンスは何時花となり實となり行くばかり、匂ひもし甘い味じまで持たれませう乎？、嗚
呼彼は再度目の大慈寺を悲しい哀詩に包んだのであつた、老樹緑蔭滴つて緑川の流れば本當
に無心の遊客の喜ぶ唯一の避暑地であるが、彼には夕暮れの景色が恰度秋の様な淋さを深し
て居ました、銀露さま！やがて夜になりました利鎌の様な月は緑の彼岸を浴びせて長い流は
銀の河の様になりました青草の河の水にひたされて葉先の水の光る事よあー銀の露あー銀露
あー白露あー銀露銀露様よ！と醒めて顔を上げると『シトロン』を飲んだ六疊の窓でした。
夜の大慈寺河畔を吹く風はうそ寒く淋し心裡を大慈寺の鐘の音が仄かに彷徨ふ、彼はくみ上げるハネつるべの音を心細く
聞きながら冷い水で顔を洗ひました。
—大正四—七—二五日—大慈寺の森にて—蘇—

宇土の印象

際崎阜頭より西の灘を望んで

△夜の港まちから

蘇風様よ！私は今年の五月十四日三角旅行を致しました、そうしてあの港まちの夜からつて差上りました粗雑な水壺の後

にこの氣分と心情を添へて置きたう御座います、途中住吉驛一帶の絶影は何んとも言へませぬ、私が女學校時代曾遊の地
それだけでも懐しい、まして海なれない私共には、この單調な海の景色でも却々捨て難い、蘇風さま！しかしそれよりか
「港まちの夜」際崎阜頭からの西灘の眺は如何に、私の氣分を眞剣にせしめましたでしよう、あ、海は良し水も美しいが
考へも廣うなる。

この岡上に立てば海に聲なし

うきばりの様に動かざる白帆さへ

見つむれば益々暗し淋しもの悲し

忽ち深き濃藍即ち悲みの爲に消て行く

心ない世の中から受ける苦しみの影は

いぢらしいと思ふと前前の苦しみは

雨はやがて海のためてより退き

雲は水にひたりひたりつゝ色を變じ

ゆくりなく戀人にあふようにたのし

空も海も油の様に静み渡りて

わが心の海も今は静に暮て行く

銀の様に光る白帆のかけ即ち愛も

その美しい心と顔を幾度びあふたらう

火のつくように私の苦しみとなる

夜の白雲は空をあうて走る

沖のかなたより白帆の浮來るを見るは

この海の色の変らぬやうに！

玉名の印象

—大正四—七—一三—銀露—

△立願寺温泉のごとく

櫻々堂學人

高瀬町から遠くない處山縁り温泉亦心地よし、彼れが學生時代恩尊深き大人を訪れてそこに誘れ一日の曾遊を行くばかにせしインスピレシヨンの深い處である、山間の深き所に泉あり家あり貴女と姉さんと妹の代喜さんさちんか、妹さんと湯に入つては遊び偶には「サイダー」も飲んだ、静閑な立願寺よ彼れは今に忘れ難い深く記憶に止めてる！彼を忘れな...

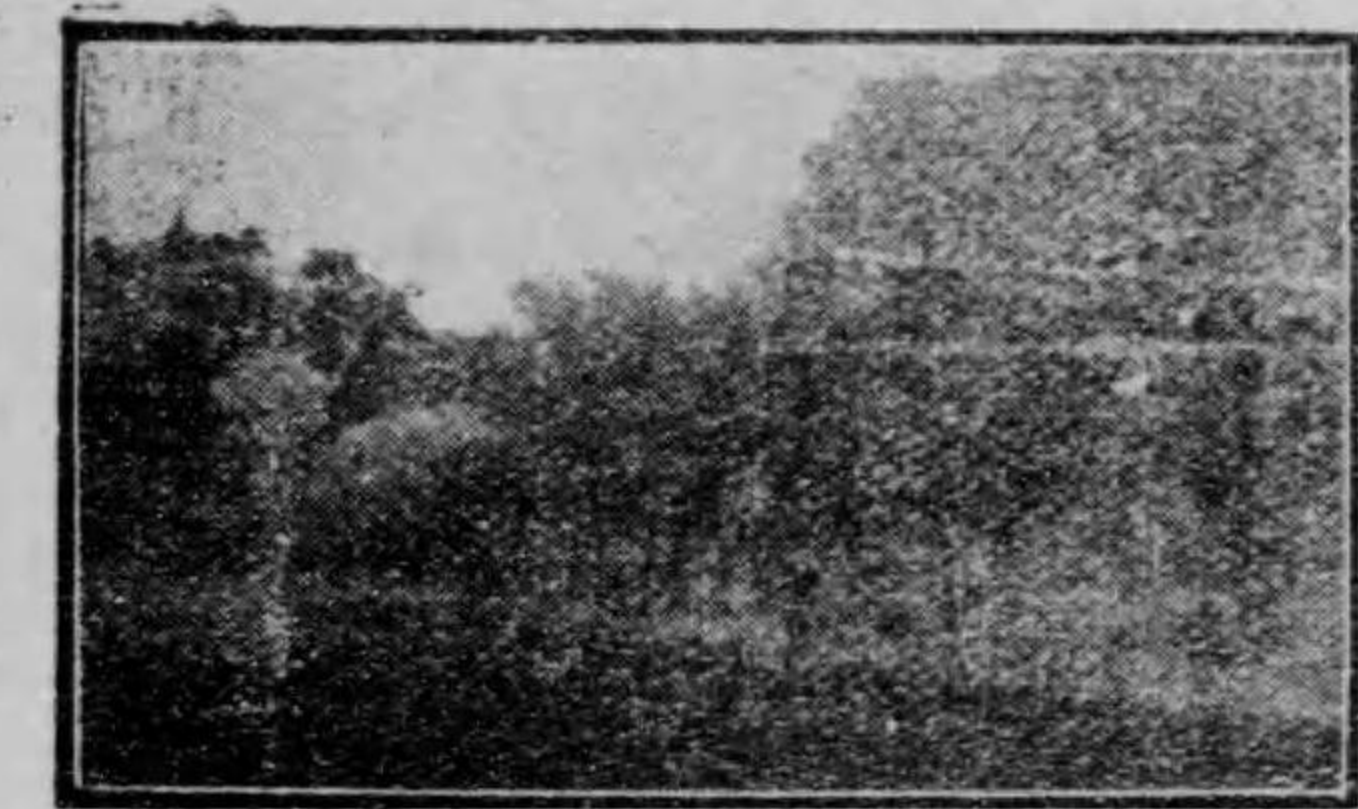
(大正四—五—廿五日)

菊池の印象

初めてさびしき秋を隈府にて

△菊榮館の旅寝心地

彼は菊池城を歴史的に偲んで悲しむより、よつばと淋びしい秋の隈府の印象が記憶せられて、身にしむ寒い秋風が細い糸のような雨を交へて折々吹きすさんだ、裏の庭のハセの下葉の赤く變じたのが二三枚音もなしにハラ／＼と散つた思ひ出したように秋雨が障子を輕くたいて又ハラ／＼と落葉の音がした、あ、最早晩秋は日に迫つて來たのです幾數里の東の懐かしい郷里の野山にも矢張り同じい秋が來てゐるのでしよう...、菊池城趾から隈府一帯の野は山は見る々秋の色に捕れてゐるのです



の空には厚い銀壁と冷たい鉄板もて圍まれたと同様に、彼れが親しい貴女は懊惱んでゐる、

秋！秋と云ふ言葉は彼れには何んもなく恐ろしく響くのです、秋！

人は皆こんな悲哀な經路を果してたゞるのでしようか、彼は只一人枯野の中を浮浪してゐる様な心地になりました——木々は朝の重い霜に染まつて黄に紅に變じ行く大小幾多の隈府町の店頭の数子に其の美しい姿をうつす菊池城趾の松、點々交つて錦織りなす色彩も數日吹き荒んだ木枯の風の爲に萬木は悲鳴して、其の葉を揺り落す様、噫臨終の人？一朝にして寂寥たる初冬の景に變ずる無情の木枯の風は尙も／＼あきたらず空山枯木到る所に吹きあてる慘状は噫、はかなき野邊の一片の墓碑では...あゝいやだ寧ろ活氣滿る夏がと思ひます、瓢を腰に紅葉狩に出掛ける人々の心の底にも云ひ知れぬ淋しい色が見へた、無心に行き交ふ雲の色さいも秋は淋しいものですと、箸を取つて彼れは女中たまきはんの顔を窺つた、噫！菊榮館の印象は彼のライフに取つて忘れ難い事です。

菊池城趾に暮色見へし頃

大正三—十一—一〇日(ゴト)

阿蘇の印象

懐しい故里を誘つて蘇虹様に捧ぐ

△蘇麓の大自然より

阿蘇の大自然、ロマンチックの阿蘇にありて最も特色ある、最も印象と懐情ある處を擧ぐ

れば南郷谷の色見、阿蘇谷の宮地である、波の泡より湧き出でたるアフロデイの女神の如く美にして艶なるは南蘇極東隅に浮べる村落ちである、これを慕うて未だ愛せざるもなしとはいみじくも言ひあてたり、南蘇の霧と烟に閉さるゝ丘陵の上に聳ゆる権現の祠堂は南方の祠の如く、人を魔する力を有せぬ、さはれそゝり立つ岩が根より深谿を瞰下する根子岳、恰度アドリヤチック海隅のエデンボローの古城に登臨せしがよう、アゼンスのバルセルノンを忍ばしむる、カルトン岡の石柱大理石の巨塔の下に踞する文豪スコットの像や、アダム、スミスとデヴィット、ヒュームの墓こそ無けれど、視中幾多の古趾、妙景、奇境は點々して旅客の感慨をひく、権現洞窟に士武の昔を偲び質素純朴、大古の風ある村人が活きつゝ、働くを懐ふ。

ロマンチックの阿蘇特に南蘇は歴史的發展の内容は極めて複雑なものであるア！ロマンチックの阿蘇の「解放」「開放」「開報」を深く爲したいもの人情、氣風、地形、未來の純民本我の政治、法律哲學、宗教の精神は自ら此山水秀麗の區より湧かした、然し尙武堅實にして趣味を解する國民數世紀の努力はこの「近代的阿蘇」となつた、見よ蘇嶺の木像こそ蘇人の變的趣味の體現である、春風今や蘇麓の山々を吹き渡りて純なる村落なべて花びやかなるべし、偲ひは忽ち轉じて西友蘇虹盟兄に飛ぶ

大正四—四—一五日—愕々堂學人

益城の印象。

「大正の熊本」著者蘇風さまに

△卅年の星霜を経て

蘇風兄足下 溪泉の郷里は益南小川街の南端を流れてる砂川の邊であります、幼い頃見馴れてる砂川の流は今日少しの變りもありません、悪戯小僧の群れ「ケンカ」「鬼ゴッコ」した堤防の老樹も卅年後の今日でも青葉が繁つて、私は郷里に歸る毎に思出多いその堤防の綠陰を訪偲するので、ア！綠蔭下の友は多くは死し多くは遠きに移り多くは老いぬ私は印象の深い老樹の見へる毎に言ひ知れぬ悲哀を感じるのです、郷里の喜びは却て私は故郷の悲哀を味ふのです

蘇風兄足下 益南の地は地形上有利の處でないが、農産地としたら他に劣るまい副産物として養蠶と製茶先づそこら位のものであらう、私はそんなものより第一にあの弘安四年の元冠に殊勳を奏した、五郎竹崎季長の墓が海東にある事を印象樹と共に懐かしく思ふ、幸ひ郡教育會は主催となつて公の墳墓の地を卜して祠堂を建てる事に決つてゐるト、噫！益南の人達よ！隈庄城趾と塔福寺と共に多くの舊蹟を究められよ、蘇風兄足下卅星霜後の今日益南の地は益々潑瀾として活きゐるのです。

—(大正四—七—一日—サイト牛)—

八代の印象

星は移り霜又換つた、大正元年の五月二日明治の終り球磨の瀬音と新しい若葉を聞きて、眺めて彼れが情ろな

雜記帖より

(愕々堂)

みち溢れたぬの淺きに知らざりき、いくばくならぬいのちなりしを
打さけて待つべき頃よ若葉かけ猶儂りの人は來んとも
忘れんと思ひなりしに一時の其淋しさに我はまごぬぬ

球磨の印象

新聞記者の手帖に残つてゐる

△夜の球磨川船の片々

虹の氣焔をはく程に夜はいつしか更けぬ、食終るや主人又助氣轉を利かして「是より舟にて案内せむ」と云ふいざとて座を顧れば峻峯君在らず先程の失策にしよげて何處にか行きたるものと見ゆ、さまよい迷子にもなるまじとて導かるゝまゝに門前の堤を下りて球磨中腹にかゝれる船に乗る涼風面を吹いて快さ言はん方なし、空はくもりて薄墨を流したらむが如し東天稍あかるきは月出でんとするにや、船を中流に浮べて五六十間さかのぼる、流山の人家一帯の黑影となりて二三四五の燈火闇を破る、激波水滴、活きて又刺す、舟中には一同思ひ／＼の處に座を占めて活聲吟聲闇に和して高し、又助は頓狂を出して「魔窟なり近づく可からず」とて舟を返す噫！球磨の會遊は今になつかしい

—(大正二—九—五日—ゴトウ)—

葦北の印象

日奈久温泉の濱伊勢屋より！

△海邊の月を……



中秋の月を海邊にとて日奈久の海邊をさして獨り都を出で、上熊本驛より宇土松橋を経て八代にて汽車をくだり、幸ひの自働車に初思乗心地よし温泉場の濱伊勢屋事伊三郎宅に宿る、「はと山」は當地唯出一眺望佳なる處、獨り又月明を賞したくなる、見渡すに海上萬里渺のとして雲なく暮色漸く波聲を聳めたれど日は未だ全く暮れず、月の出するには尙程あらむと眼を移す、ふと東の方を見れば團々たる明月いつしか海をはなれたり、はなるゝこと數尺未だ光線を放たず海は碧に空は青し、恰度、彼が世界周航の時、上海沖で見て取つた月なるべし、いと懐かし海邊の月、やがて水天蒼茫の際月獨り紅玉を懸く、更にやがて月は上りて小となり一條の金蛇今や波上を走る、愈々上りて金蛇大となり波光遠く月に輝きて、萬里金粉を散し沖に釣する舟五つ六つさやかに見ゆ、噫！彼れは越中島の大成丸を泣く程戀しく偲ふのである、海はい——眞面目である——月も靜かに輝く。温泉場に下るより海邊の月を眺める程、よつぼど、まし。

(日奈久會遊の片々)

—(大正三—八—三日—博々堂)—

象印の草天
景風の岡富

富岡の地海中に斗出して東は青松遠く連り三面皆海、青松白砂盡も又如かずの眺めは富岡を惜いて他に無し、曲浦を隔て、雲烟渺茫の間に温泉岳を望み夜間魚火數千、千々波灘に散點するを見る、さては月明の夜扁舟に棹して銀波萬里白砂と映するの景を賞せば風光の美、眞に人間の境にあらざるかを覺へる、今朝パーク形の帆船來る珍又珍齋藤兄來れ、そして快を同じふされよ——(大三—七—一五—後藤)

—三篇終—

へ終を輯編

△吹く風漸く止んで太陽はヤキ々輝りつけた、苦い蟲のナキ聲今日が本當の夏であらう。ア—吾等の編輯は炎々暑々夏と戦つた創造、創造の要求そこに生命の躍動がある進め々迂回しても進め！△吾等は太正の熊本をどうすれば総べてを紹介し総べての人達が福利増進と便利を圖る事が出来るか？と考へた時、是れがこの書の赤心を透したる熱意ではあるまいかこの「誠」に賛同せられた多くの人に謝す。
△吾等は四十日後に吾等の本とホゞ同じ名稱の本の様なのが生れた事を發見した、それは吾等の編輯上に結構な薬になつた、實行々徹底々！△吾等の「新愛縣心」の吹奏は多くの人達に徹底した爲に一版は忽ち迎へられそうである、どうしても再版せなくてはなるまい。働けよ々活けよ々——(エ)

■版色三と書本■

此書は私がビクトリア三色版を求めて初刷りの記念書である私は前後十有三年印刷研究として都に遊んだ、印刷機數臺を据へてからこんな部數の多い書籍を發行するのは先づ熊本では始めだと思ふ、それに三色版二葉を挿入するのは恐らくは本書が以て第一歩だと思ふ、どうしても印刷業は美術が本位ではあるまいか、
盛林堂の機場にて
印刷者 小山恒一

大正四年八月五日印刷
大正四年八月十日發行

定價金四拾錢

著者
後藤末士郎



發行者
印刷者

齊藤忠嗣
小山恒一
(熊本市建丁卅番地)



大正四年八月五日印刷
大正四年八月十日發行
大正四年八月十日發行

大正四年八月五日印刷
大正四年八月十日發行
大正四年八月十日發行

發行所

熊本市建丁卅番地

盛林堂

電話二二一〇番

『大正の熊本の後に』

著者の識と觀察と熱意とは世既に定評あるが如く、その深刻の觀察と痛然のボリシーを透した飛躍は往々人の肉を剝り、その輕妙の筆致と洒脱の編輯とは間々人の頤を解く、頤が外づれても一度はた醫者の厄介なり無暗に肉なぞ剝られてたまるものは、著者既に新愛縣心の結晶を以て自ら處る、發行者豈それと同意たらずして可ならんや。

大正四年八月一日

盛林堂の三色版機械にもたれて

發行者 齊藤溪泉

熊本驛發着時間表 (○は最急)

上リ		下リ	
午前一時四十分	午前四時十六分	○全二時五十分	○全三時三十三分
全六時四十五分	全五時五十分	全四時四十八分	全五時二十二分
全八時四十八分	全七時五十四分	全六時五十五分	全六時四十九分
全十時二十五分	全十時四十分	全八時五十九分	全八時五十一分
全十一時四十五分	午後○時三十四分		
○午後一時十六分	全二時五十分		
全二時二十分	○全三時三十三分		
全四時四十八分	全五時二十二分		
全六時五十五分	全六時四十九分		
全八時五十九分	全八時五十一分		

○上熊本驛下リ、上リ、は當驛發着時間より急行は六分普通は九分の差あり。

祝御大典

商標 登錄



醬

油

釀造元

熊本縣御船町 高木三藏

電話號碼(カ)又(キ) 電話號碼
阪口座福六七〇番

鹿兒島市住吉町

高木支店

宮崎縣加久藤町

高木支店

祝 御 大 典



諸 醬 油 油

製 造 元

熊 本 市 外 本 庄 中 通

西 尾 清 太 郎

電 話 六 〇 三 番

最新式蒸氣機關應用

壹等賞金牌受領

祝 御 大 典

肥 後 名 產
赤 燗

優 等 清 酒
清 酒 商 標

金 華

珍

熊 本 縣 松 橋 高 良
增 永 第 一 支 店
熊 本 縣 御 船 町
增 永 第 二 支 店

熊 本 縣 御 船 町
釀 造 元
增 永 忠 三 郎

振 替 口 座 國 岡 五 九 五 九 番